

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第708集

## 平成30年度発掘調査報告書

祇園 I 遺跡 岩洞湖 E 遺跡

八幡館跡 沖遺跡 森の越遺跡第36次

ほか調査概報（13遺跡）

2019

(公財) 岩手県文化振興事業団

# **平成30年度発掘調査報告書**



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会资本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業團埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとつてまいりました。

本報告書は平成30年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で18遺跡、約51,405m<sup>2</sup>が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 菅野洋樹

## 目 次

平成30年度発掘調査の概要について ..... 1

### I 発掘調査報告

(1) 紫園I遺跡（平泉町）	5	(4) 沖遺跡（九戸村）	61
(2) 岩洞湖E遺跡（盛岡市）	27	(5) 森の越遺跡第36次（岩泉町）	79
(3) 八幡館跡（盛岡市）	31		

### II 発掘調査概報

(6) 北日詰城内I遺跡（紫波町）	107	(13) 田ノ端II遺跡（洋野町）	114
(7) 北条館跡（紫波町）	108	(14) 鹿鳴浜I遺跡（洋野町）	115
(8) 南日詰大銀II遺跡（紫波町）	109	(15) 板橋II遺跡（洋野町）	116
(9) 中平遺跡（野田村）	110	(16) 万丁目遺跡（花巻市）	117
(10) サンニヤ皿遺跡（洋野町）	111	(17) 二子城跡（北上市）	118
(11) 宿戸遺跡（洋野町）	112	(18) 下村遺跡（普代村）	119
(12) 北玉川遺跡（洋野町）	113		

調査報告遺跡抄録 ..... 120

## 平成30年度発掘調査の概要

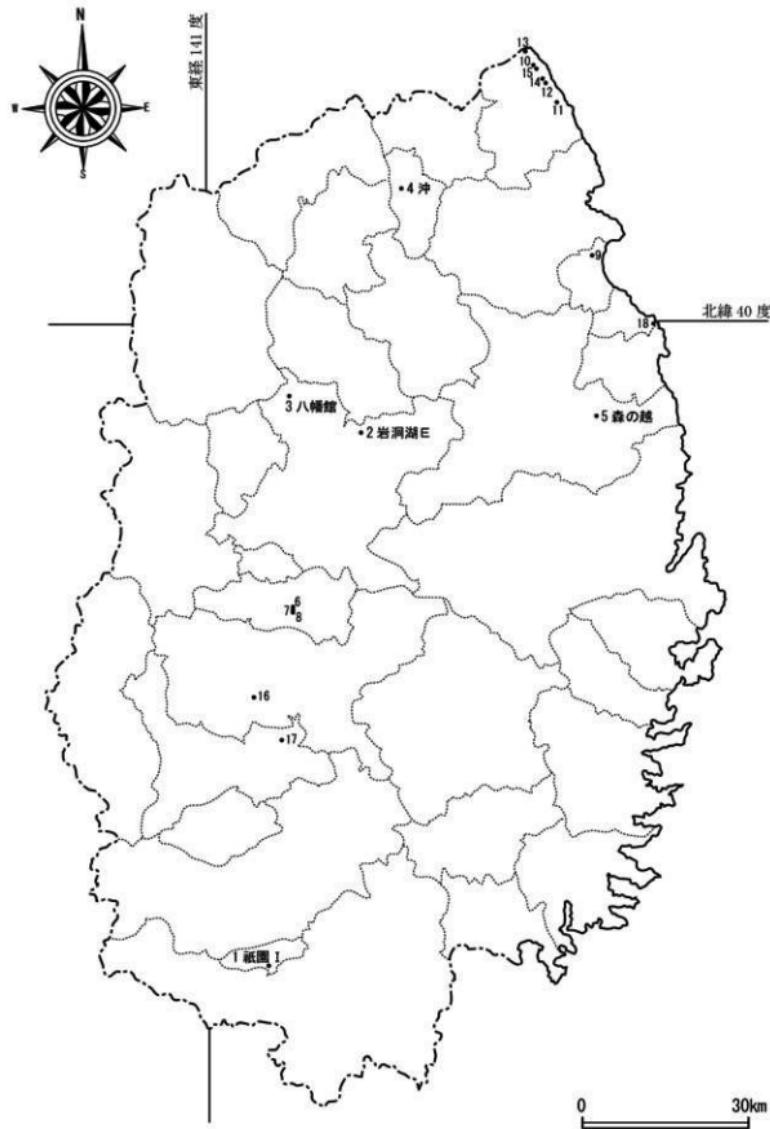
平成30年度の発掘調査は、当初18遺跡、46,568m<sup>2</sup>で計画していたが、最終的には18遺跡、51,405m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。調査遺跡は、沿岸部を中心に3市4町3村に及んでいる。前年度の最終結果と比較すると15遺跡減、面積で48,138m<sup>2</sup>の減少となっており、ほぼ半減の状況となっている。全体的に発掘調査事業は減少傾向にある。通常の開発事業に関連する調査は、11遺跡で面積約3万m<sup>2</sup>、全受託面積の約6割を占めている。内容的には、北上川の築堤関連事業、農地整備事業、平成28年に発災した台風10号関連の灾害復旧事業の発掘調査である。一方、復興関連調査は7遺跡、面積で約2万2千m<sup>2</sup>、受託総面積の約4割を占めている。多くは三陸沿岸道路建設に関連する調査である。平成24年度から続いている東日本大震災関連の復興に関わる発掘調査が漸次減少傾向にあったが、宿戸遺跡・サンニヤⅢ遺跡など大規模な遺跡については今年度で野外調査を終了している。

縄文時代では、継続調査となった洋野町に所在する田ノ端Ⅱ遺跡で前期を中心とした竪穴住居、竪穴状遺構、土坑類が複数見つかっており、縄文時代前期から後期にかけて形成された集落であることが明らかとなった。同町内の宿戸遺跡は、今年度が最終の調査となり通算で3ヶ年の調査が行われた。前回までの調査では、遺跡の高位面で早期から中期の住居等が密に分布することが確認されていたが、低位面に移行する今年度の調査区では、縄文時代後期・弥生時代の居住域となっていることが確認され時代により居住域を異にしていたことが明らかになった。同じく洋野町の鹿糠浜Ⅰ遺跡・北玉川遺跡・板橋Ⅱ遺跡・サンニヤⅢ遺跡でも、縄文時代を中心とした遺構遺物が見つかっている。板橋Ⅱ遺跡では、縄文時代後期前葉を中心とした住居や貯蔵穴が見つかっているほか、38基の陥し穴状遺構がみつかっており狩猟場として機能していたことが確認された。

古墳時代～平安時代では、野田村の中平遺跡の今年度の調査で、円形周溝1基・方形周溝1基が見つかった。今年度を含む4ヶ年の調査で当該期の住居が16棟見つかっている。他に、洋野町の鹿糠浜Ⅰ遺跡で奈良時代の竪穴住居2棟、盛岡市の八幡館跡で平安時代の竪穴住居1棟、九戸村の沖遺跡で奈良時代の竪穴住居1棟、花巻市の万丁目遺跡で古代の竪穴住居3棟が見つかっている。

中世では、平泉町の紙園Ⅰ遺跡では12世紀代の溝跡1条、花巻市の万丁目遺跡では中世の竪穴建物8棟、中世の掘立柱建物168棟、土坑類、井戸、苑池、溝、カマド状遺構が見つかった。これらの多くは、溝で区画された南北約50m、東西約80mの内部に位置している。大型の掘立柱建物、竪穴建物、苑池も存在しており溝で区画された居館の存在が想定されている。居館はかわらけや中世陶磁器等の出土から12世紀から15世紀中頃の長期間に渡りに機能していたと考えられている。他に中世の調査事例として、紫波町に所在する南日詰大銀Ⅱ遺跡、北日詰城内Ⅰ遺跡、北条館跡の3遺跡が挙げられる。北上川緊急治水対策事業に伴い実施された調査である。3遺跡とも北上川西岸の標高91～93m前後の河岸段丘上に立地している。北上川の支流の平沢川に並行するように南側から南日詰大銀Ⅱ遺跡、北日詰城内Ⅰ遺跡、北条館跡と連続して位置している。南日詰大銀Ⅱ遺跡では、12世紀のかわらけの他中国産陶磁器、常滑・渥美産の国産陶器が出土しており城内でも重要な場所であったことが窺われる。北日詰城内Ⅰ遺跡からは、掘立柱建物、竪穴建物が見つかっており隣接する北条館跡との密接な関連が想定されている。北条館跡では、上端幅6～8m・深さ1.5～2.5mの館を開んでいた3条の大きな堀が見つかっている。館の主体部は一段高い北側にあり次年度以降に調査予定である。北上市に所在する二子城跡は中世和賀氏の本城と伝えられる当該地方最大の城館跡である。今回の調査では縄文時代の陥し穴状遺構、縄文～弥生時代の土坑類・土器類が見つかった。次年度も広範囲に調査が行われる予定である。

(調査課長 斎藤邦雄)



# I 発掘調査報告

#### 凡例

本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。

(例) 壺穴住居跡→壺穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

## (1) 祇園 I 遺跡

所 在 地 西磐井郡平泉町平泉字祇園194-1ほか 遺跡コード・略号 N E 86-0006 · G O I -18  
 委 託 者 ネクスコ東日本 調査対象面積 2,945m<sup>2</sup>  
 事 業 名 平泉スマートインターチェンジ建設 調査終了面積 2,945m<sup>2</sup>  
 発掘調査期間 平成30年6月1日～8月24日 調査担当者 深 浩二郎・阿部勝則・藤田崇志

## 1 調査に至る経過

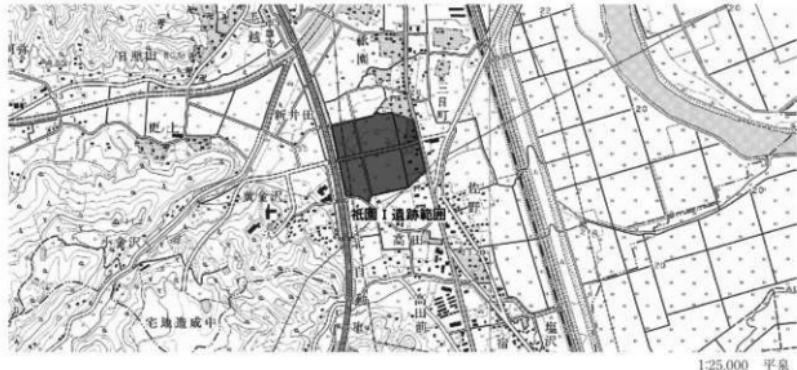
祇園 I 遺跡は、「東北自動車道 平泉スマートインターチェンジ建設事業」に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

平泉スマートインターチェンジは、東北自動車道の一関インターチェンジから4.4km、平泉前沢インターチェンジから7.1kmの位置に新設され、平泉町及び周辺地域の活性化、渋滞緩和が期待されている。運用時間は時間制限なしの24時間、利用可能な車種はETC車載器を搭載した全車種、青森方面・仙台方面の両方向からの出入口があるフルインターチェンジで、東北自動車道に直接接続する上下集約型の形となっている。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、東日本高速道路株式会社から平成29年2月27日付東高東支管第745号により岩手県教育委員会に対して取扱いについて照会した。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成29年4月17日から18日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成29年5月22日付け教生第280号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により回答してきた。

この間、対象地域の埋蔵文化財の取扱いについては県教育委員会が協議・調整を行い、本調査においては公益財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。その結果を踏まえて東日本高速道路株式会社東北支社は、岩手県教育委員会及び平泉町教育委員会と協議し、調整を受けて、平成30年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(NEXCO東日本高速道路株式会社東北支社)



第1図 遺跡位置図

## (1) 祇園Ⅰ遺跡

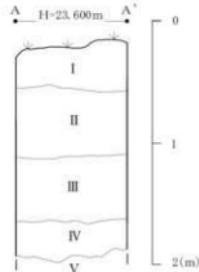
### 2 遺跡の位置と立地

遺跡は、平泉町役場から南へ約1.3kmに位置し、北上川右岸の氾濫平野上に立地する。調査区の標高は約23m前後を測り、現況は水田および道路である。

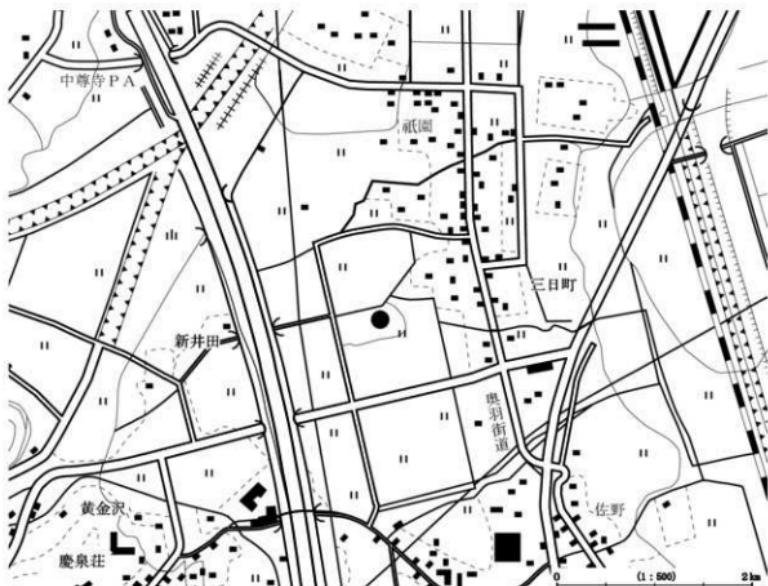
### 3 基本層序 (第2図)

基本土層は調査区内で土層が良好に残存する調査区南東側で観察を行い、I～V層に分層されることを確認した。表層からⅢ層までは水田に関わる堆積でIV層が沢の影響による堆積、V層は地山でIV・V層で遺構・遺物を確認した。

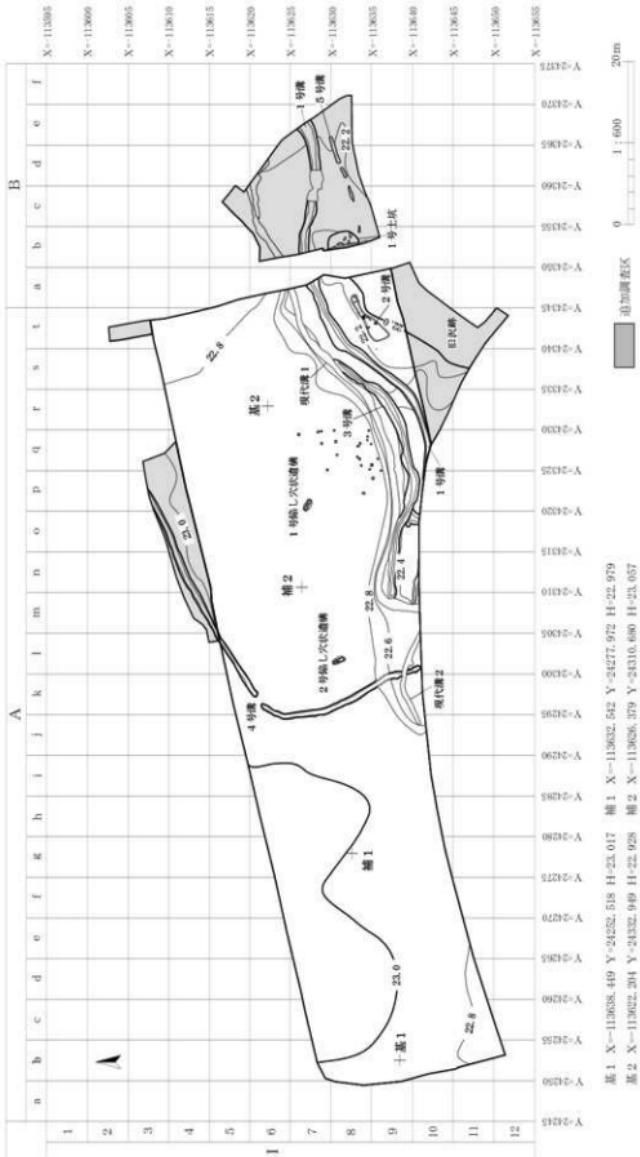
- I 10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱 しまり  
強 酸化鉄20～30%含む
- II 10YR4/1 暗灰色粘土 粘性強 しまり強 灰  
白色粘土 (10YR7/1) 10%含む
- III 10YR5/1 暗灰色粘土 粘性強 しまり強
- IV 2.5Y2/1 黒色粘土 粘性強 しまり中 沢の  
堆積
- V 7.5GY6/1 緑灰色粘土 粘性強 しまり中  
地山



第2図 基本土層



第3図 調査区位置



第4図 遺構配置図

#### 4 調査の概要

調査は全体の表土を重機で掘削、その後は人力で精査を行い、岩手県教育委員会の試掘レンチを確認した。調査区南東の沢地形の一部を除き、過去の造成工事による影響で地山まで掘削を受けた状況であるため、基本土層中のIV層を確認できるのは南東の沢地形に隣接する低い場所に限定される。

遺物の取り上げには調査区に設定した100×100mの大グリッドと5×5mの小グリッドの組み合わせを用いて行った。なお当初予定の調査対象面積は2,000m<sup>2</sup>であるが、事業地内の調査区外へ遺構が延びていたことから945m<sup>2</sup>を追加し、計2,945m<sup>2</sup>の調査を実施した。

##### (1) 遺構

今回の調査で12世紀の溝4条、近世の溝1条、他に古代の陥し穴状遺構2基、時期不明の土坑1基、柱穴23個を検出した。

###### 1号溝（第5図、写真図版2）

調査区南東側の旧地形の縁に沿って検出し、両端が調査区外へと延びる。検出した規模は長さ約45m、上端幅0.46～1.70m、下端幅0.41～0.79m、検出面（IV～V層）から底面までは最も深いところで27cmを測る。埋土から12世紀代のかわらけと陶磁器、他に縄文土器片、石器、種子、銭貨1点（政和通寶）出土した。

###### 2号溝（第6図、写真図版2・3）

調査区南東側の旧沢跡に近く、1号溝の南側に位置する。全長は6.58mで、上端幅0.60～1.95m、下端幅0.36～1.71m、検出面（IV層）から底面までは最も深いところで26cmを測る。また、溝の中心から南西側が北東側に比して広がった形状を呈する。遺物は全体から12世紀代のかわらけと陶器片、中央～南西側に広がる地点からは長さ15～25cmの礫と桃の種などが集中して出土した。遺構の形状や遺物の出土状況から用途は不明であるが、何らかの施設である可能性が考えられる。

###### 3号溝（第5図、写真図版3）

調査区南東側の旧地形の縁に沿って検出し、両端が現代の溝に切られている。規模は長さ約33m、上端幅0.69～1.25m、下端幅0.20～0.65m、検出面（IV～V層）から底面までは最も深いところで33cmを測る。埋土から12世紀代のかわらけと陶器片、近世の磁器、銭貨2点（永楽通寶・寛永通寶）、石器、種子（クルミ・桃）が少量出土した。

###### 4号溝（第6図、写真図版3・4）

調査区を中央南端から北西方向へ縱断するように延び、北端手前で北東方向に方向を変え、調査区外へと延びている。途中一部が途切れるが、検出した規模は長さ50.73m、上端幅0.47～0.99m、下端幅0.36～0.55m、検出面（V層）から底面までは最も深いところで18cmを測る。遺物は12世紀のかわらけと陶器が少量出土した。

###### 5号溝（第5図、写真図版4）

調査区東端の追加調査箇所で検出した。中央南端から北西方向へ縱断するように延び、北端手前で北東方向に方向を変え、調査区外へと延びている。途中一部が途切れるが、検出した規模は長さ12.29m、上端幅0.14～0.49m、下端幅0.07～0.38m、検出面（IV層）から底面までは最も深いところで5cmを測る。遺物は12世紀のかわらけと陶器が少量出土した。

###### 1号陥し穴状遺構（第7図、写真図版4）

調査区中央よりやや東側のIA7pグリッドに位置し、V層で検出した。平面形状は梢円形で、底面が溝状を呈する。規模は開口部径153×76cm、底部径134×21cm、検出面から底面までの深さは86cmを測る。埋土は自然堆積で4層に分かれる。底面は平坦で5箇所に木杭が刺さった状態で検出された。

他に遺物は剥片石器1点が出土した。時期は出土した木杭の一部について放射性炭素年代測定を行ったところ10世紀後半～11世紀前半という結果を得た。

#### 2号陥し穴状遺構（第7図、写真図版4・5）

調査区中央のIA 8 1グリッドに位置し、V層で検出した。平面形状は梢円形で、底面が溝状を呈する。規模は開口部径164×69cm、底部径138×39cm、検出面から底面までの深さは107cmを測る。埋土は自然堆積で4層に分かれる。底面は平坦で5箇所に木杭が刺さった状態で検出された。他に出土遺物はない。時期は出土した木杭の一部について放射性炭素年代測定を行ったところ10世紀後半～11世紀前半という結果を得た。

#### 1号土坑（第7図、写真図版5）

調査区東側の追加調査区、IB 8 bグリッドに位置し、IV層で検出した。遺構の西側は現代の水路の敷設時に掘削され、失われている。平面形状は円形で規模は開口部径378cm、底部径53cm、検出面から底面までの深さは144cmで、開口部から底面中心に向かって狭く、擂鉢状の形状を呈する。埋土は自然堆積で5層に分かれる。遺物が出土していないため、時期を特定するには至らなかった。

#### 柱穴状土坑（第8図、写真図版5）

調査区東側で23個検出した。規模は開口部径18～44cmで、配列に規則性はみられない。埋土から縄文土器、石器、かわらけが出土した。

#### （2）出土遺物

今回の調査で出土した遺物は縄文土器2324.4g、石器4266.5g、かわらけ1304.9g、陶磁器3674.0g、銭貨52.4g、種子41.6gで、他に陥し穴状遺構から木杭が10点出土した。このうち残存状況の良好な37点を図化・掲載し、特徴については観察表に記載した。1～7はかわらけでいずれも手すくねによる製法で作られている。8～18・20は国産陶器で8～12が常滑、13～15は渥美、16～18は須恵器系陶器、20は瀬戸口美濃産の丸皿である。9・10は壺で底部破片、11が片口鉢の口縁部、12が甕の肩～胴部で自然軸が掛かっている。13は片口鉢の底部、14は壺の肩部破片で「大」字銘が刻まれている。15は頸～肩部で頸部と肩部の内面の接合面が巻き込むように付けられている。16～18は甕の破片で外面にタタキ目が施されている。19は中国産の白磁皿の口縁部破片、21は肥前産の磁器碗の底部破片、22・23は縄文土器の破片でいずれも表面が著しく摩滅している。器種は22が注口土器、23が鉢で時期は晩期と考えられる。24～29は石器で24は長方体の形状で砥石の可能性が考えられる。26・27は磨石でいずれも一部に磨痕が認められる。30～32は銭貨、33～37は木杭で陥し穴の底面に刺さっている側の先端部分に金属によると考えられる加工痕が認められる。

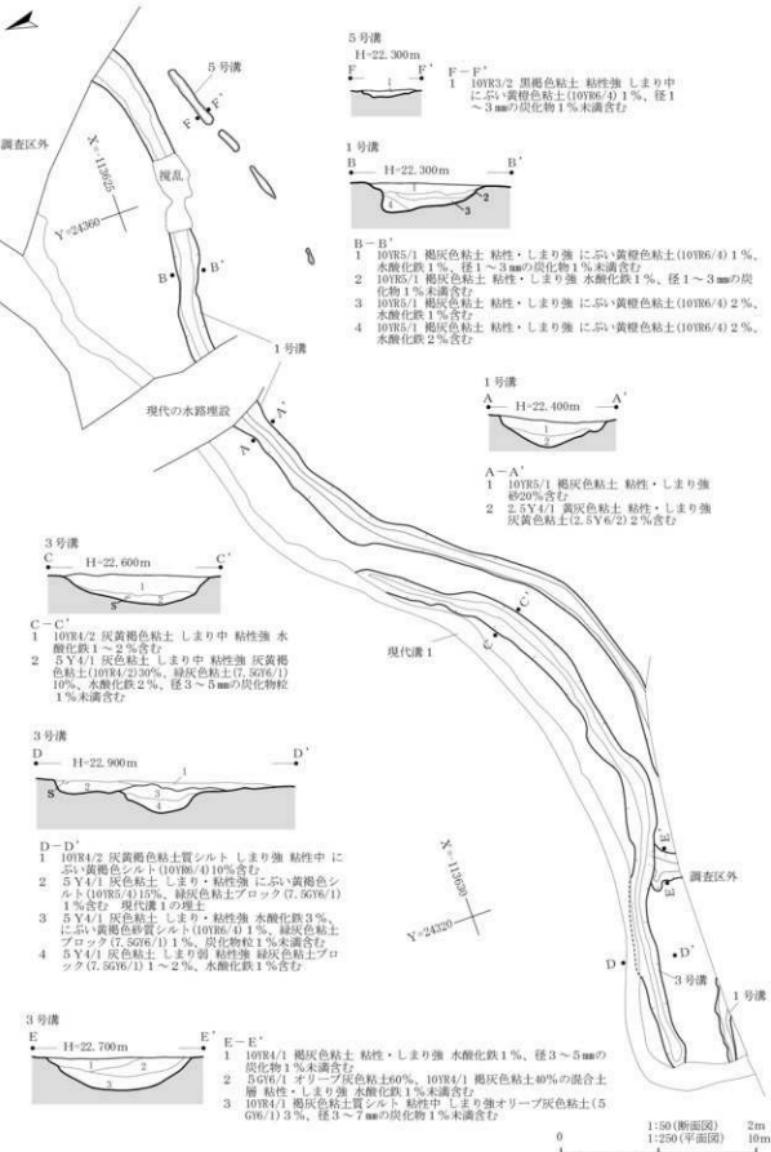
#### 5 まとめ

調査の結果、過去2回行われた水田の造成工事による影響で、調査区の大部分が削平を受けていることが判明した。

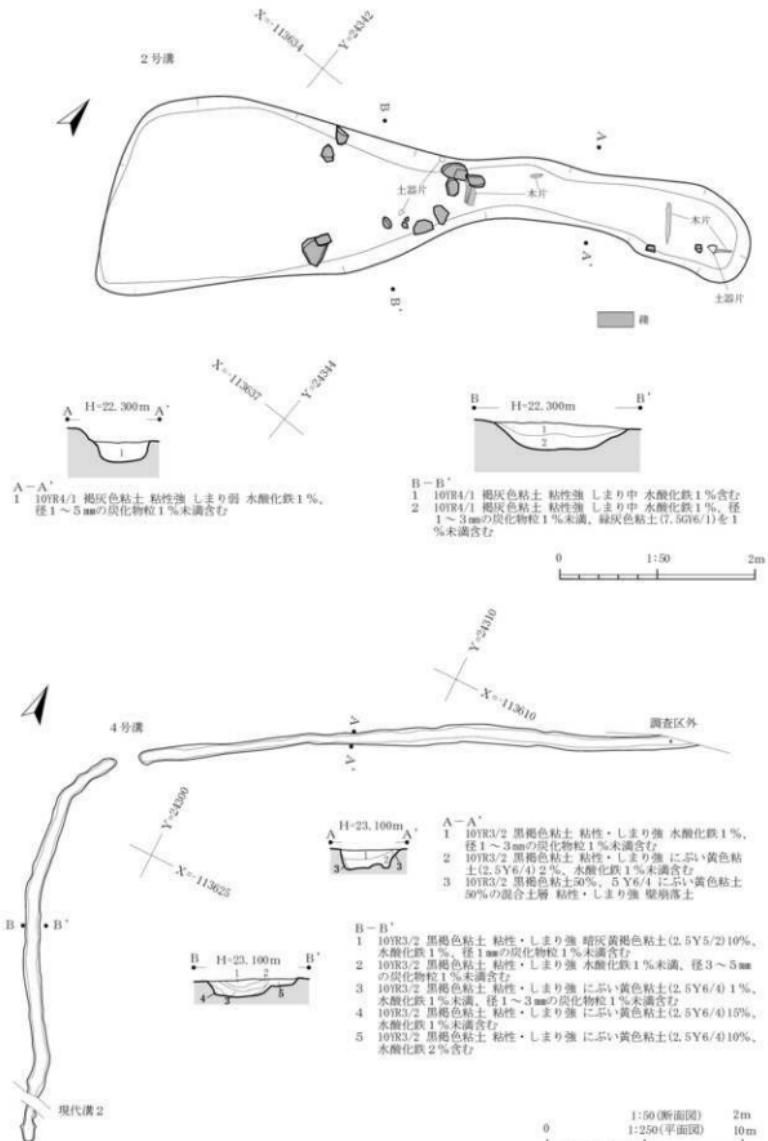
今回の調査によって縄文時代の遺物が少量ではあるが出土することから周辺域を含めて縄文時代の生活領域であったものと考えられる。また、10世紀後半～11世紀前半には陥し穴状遺構の存在から狩獵域としても活用されたことが明らかになった。12世紀と近世は溝を検出したことや遺物が出土することから生活領域であると考えられるが、遺構密度や出土遺物の量などから集落の中心域からは離れた場所であった可能性が高い。

なお、祇園I遺跡平成30年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

(1) 紙圖 I 遺跡



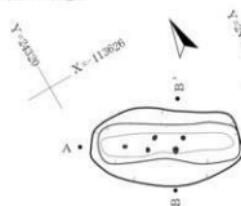
第5図 1・3・5号溝



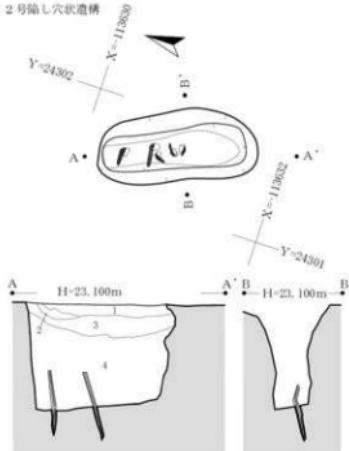
第6図 2・4号溝

(1) 紙図 I 通路

1号陥し穴状造構



2号陥し穴状造構



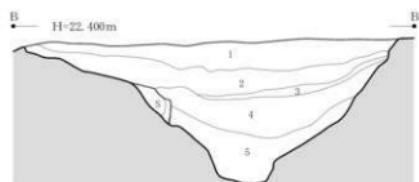
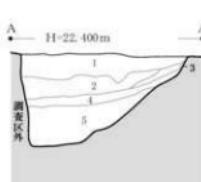
1号陥し穴状造構

- 1 10YR4/3 に近い黄褐色粘土 粘性・しまり強 径5mmの化粧物1%含む
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土50%、10YR4/3 に近い黄褐色粘土50%の混合土層 粘性・しまり強 淡黄橙色粘土(10YR8/4)を北壁面に5%含む
- 3 10YR3/2 黑褐色粘土 粘性・しまり強
- 4 2.5Y4/1 黄褐色粘土 粘性・しまり強

2号陥し穴状造構

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性・しまり強 酸化鉄10%含む
- 2 2.5Y4/1 明オリーブ灰色粘土 粘性・しまり強 水酸化鉄を10%含む
- 3 2.5Y4/1 黄褐色粘土 粘性・しまり強 径5~20mmの明オリーブ灰色粘土粒(2.5G17/1)を3~5%含む
- 4 10YR3/1 黑褐色粘土 粘性・しまり強 明黄褐色粘土(2.5Y7/6)を10~15%含む

1号土坑

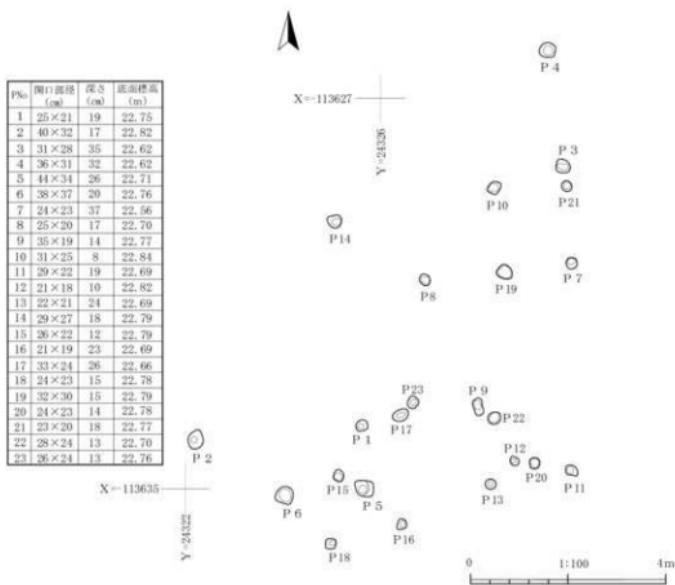


1号土坑

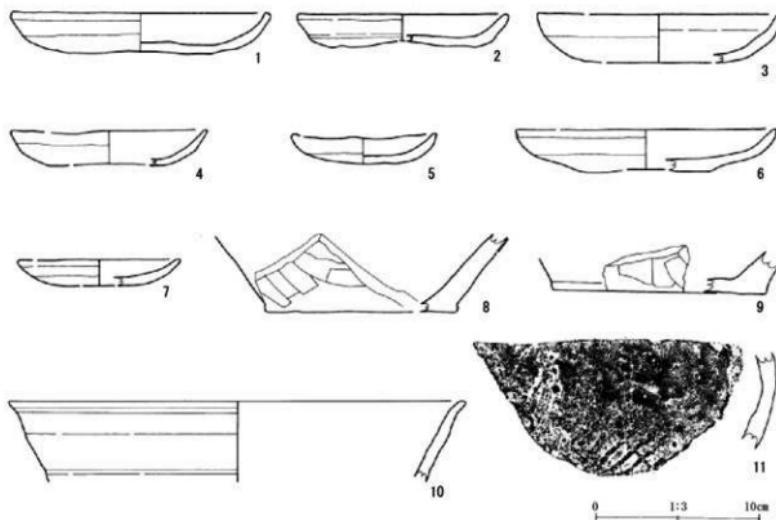
- 1 A-A' B-B' 2.5Y3/1 黑褐色粘土70%、2.5Y6/2 灰黄色粘土30%の混合土層 粘性・しまり強 径10mmの炭化物1%含む
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘土 粘性・しまり強 径5~7mmの炭化物1%含む
- 3 2.5Y4/1 黄褐色粘土質シルト 粘性中 しまり強 淡黄色粘土粒(2.5Y7/4)径7mm
- 4 10YR4/1 暗灰色粘土 粘性強 しまり中 黄褐色粘土(2.5Y5/1)20%含む
- 5 5Y4/1 黄褐色粘土 粘性強 しまり中 綠灰粘土ブロック(10G16/1 径7mm)を10~15%含む

0 1:50 2m

第7図 1・2号陥し穴状造構、1号土坑

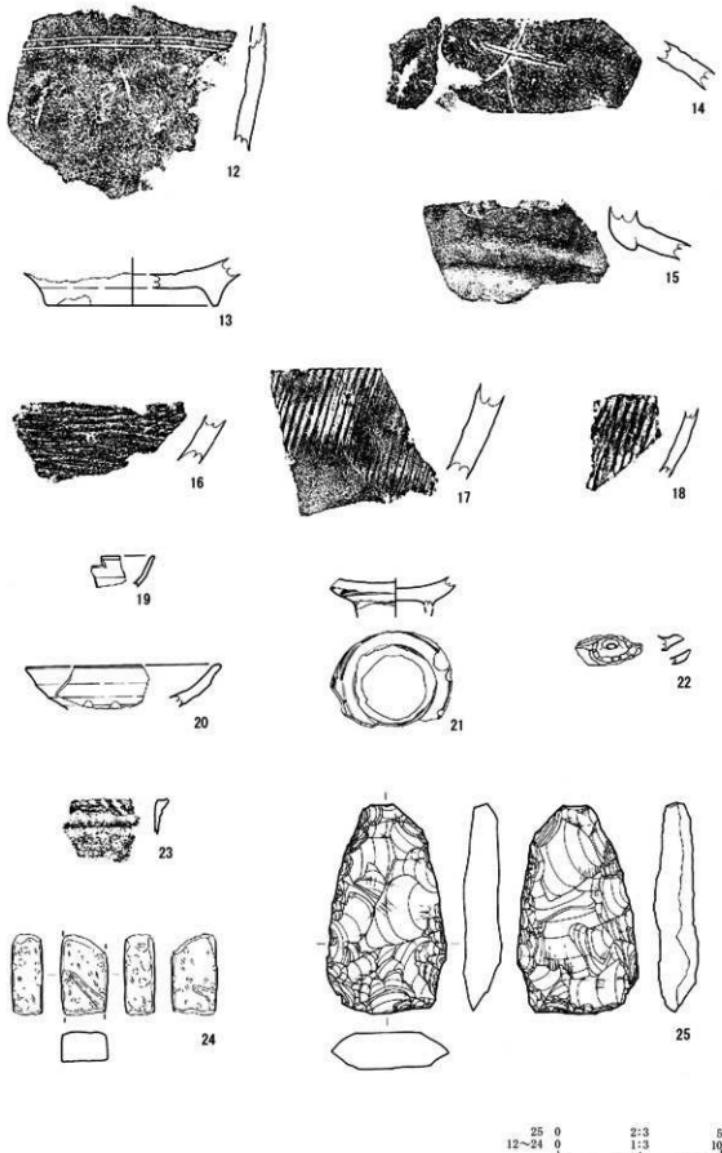


第8図 柱穴状土坑

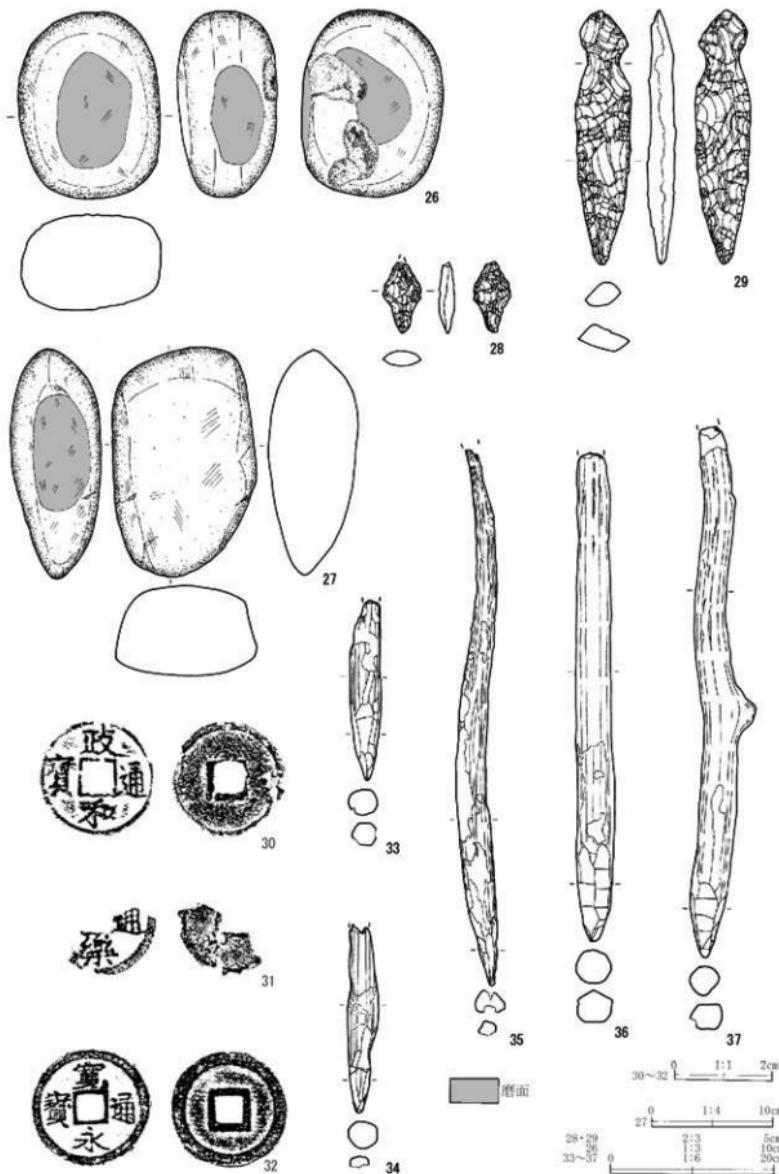


第9図 出土遺物 1

(1) 紙園 I 道跡



第10図 出土遺物2



第11図 出土遺物3

(1) 紙圖Ⅰ遺跡

かわらけ觀察表

No	出土地点・層位	種類	部位	口径(cm)	器高(cm)	重量(g)	備考
1	2号溝 塙土上位	かわらけ	口～底	(16.0)	2.5	59.7	
2	2号溝 塙土	かわらけ	口～底	(13.0)	<2.0>	33.5	
3	2号溝 塙土	かわらけ	口～底	(15.0)	<3.0>	25.8	
4	3号溝 塙土	かわらけ	口～底	(12.0)	<2.2>	21.8	
5	4号溝 底面	かわらけ	口～底	8.9	1.9	53.7	
6	4号溝 塙土	かわらけ	口～底	(16.0)	<2.6>	43.6	
7	5号溝 塙土	かわらけ	口～底	(10.0)	<1.6>	17.5	

陶磁器觀察表

No	出土地点・層位	種類	產地	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
8	1号溝 墓土	陶器	常滑	壺	胴下～底部	—	<4.8>	(11.6)	
9	2号溝 墓土	陶器	常滑	壺	底	—	<2.6>	(13.0)	内面自然釉。底面に砂付着
10	3号溝 墓土	陶器	常滑	片口鉢	口～体	(28.0)	<4.9>	—	
11	5号溝 墓土	陶器	常滑	便	肩～胴上	—	—	—	
12	1B9a V層上	陶器	常滑	壺	肩	—	—	—	二輪車
13	1号溝 墓土	陶器	湘美	片口鉢	底部	—	<2.9>	(10.6)	
14	3号溝 墓土	陶器	湘美	壺	胴上	—	—	—	「大」字款
15	1B9a V層上	陶器	湘美	便	頂～肩	—	—	—	外表面自然釉
16	1号溝 墓土	陶器	(須恵器系)	便	—	—	—	—	
17	2号溝 墓土	陶器	(須恵器系)	便	—	—	—	—	
18	3号溝 墓土	陶器	(須恵器系)	便	—	—	—	—	
19	2号溝 墓土	磁器	中国	白磁盤	口～体上	—	—	—	
20	3号溝 墓土	陶器	巣戸美濃	丸皿	体	(12.0)	<2.6>	—	
21	1A8 1V層上	磁器	肥前	碗	体下～底部	—	<2.4>	—	

縄文土器觀察表

No	出土地点・層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様等	時期	備考
22	1号溝 墓土	往口土器	—	—	—	—	後期	往口先端火
23	3号溝 墓土	鉢	—	<14.0>	—	沈線文	後期	

石器觀察表

No	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
24	1号溝 墓土	砥石？	(5.0)	2.9	1.8	23.28	灰岩質(浮遊)	新生代第四紀 奥羽山脈
25	1号溝 墓土	石鎚	6.4	3.6	1.2	31.55	頁岩	新生代新第三紀 奥羽山脈
26	1号溝 墓土	磨石	11.4	8.6	6.0	901.3	安山岩	新生代第四紀 奥羽山脈
27	2号溝 墓土中位	磨石	18.9	11.7	7.3	2447.6	デイサイト	新生代新第三紀 奥羽山脈
28	3号溝 墓土	石鐵	(2.2)	1.2	0.5	1.15	赤色頁岩	新生代新第三紀 奥羽山脈
29	3号溝 墓土	石鎚	7.8	1.7	0.8	11.03	頁岩	新生代新第三紀 奥羽山脈

錢貨觀察表

No	出土地点・層位	素材	銘名	相傳年造	錢径(A)/(B)mm	内徑(C)/D)mm	銛厚(mm)	銛目(g)	備考
30	1号溝 墓土	銅	政和通寶	1111年	21.04	23.69	21.74	21.87	1.28～1.38 1.95 北宋錢
31	3号溝 墓土	銅	永泰通寶	1408年	—	—	—	1.07	0.41 明錢。残存1/3
32	3号溝 墓土	銅	宣和通寶	1636年	24.21	24.19	19.99	20.28	1.23～1.29 2.89 江戶時代

木杭觀察表

No	出土地点・層位	長さ(cm)	径(cm)	材種	加工痕	樹皮	備考
33	1号躑躅穴状遺構 底面	22.0	1.8	サワダルミ	○	○	
34	1号躑躅穴状遺構 底面	23.2	0.5	■	○		
35	2号躑躅穴状遺構 底面	65.2	2.4	■	○		
36	2号躑躅穴状遺構 底面	59.9	3.3	■	○	○	
37	2号躑躅穴状遺構 底面	65.1	3.5	■	○		

\*長さはいずれも残存部。

## 放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

祇園 I 遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字祇園194-1 他に所在する。測定対象試料は、2基の陥し穴の底面から出土した逆茂木よりそれぞれ1点ずつ採取された木片2点である（表1）。逆茂木の年代は金属によると思われる先端の加工痕から、古代以降と推定されている。

### 2 測定の意義

陥し穴の年代を明らかにする。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸・アルカリ・酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから 1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）、<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。<sup>14</sup>C年代は  $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい (<sup>14</sup>Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も  $\delta^{14}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の<sup>14</sup>C年代はNo.1が $1020 \pm 20$ yrBP、No.2が $1050 \pm 20$ yrBPである。历年較正年代 ( $1\sigma$ ) はNo.1が995~1024cal ADの範囲、No.2が987~1016cal ADの範囲で示される。いずれも10世紀後半から11世紀前半頃の年代値を示し、推定年代である古代以降に含まれる。なお、試料の年代については以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された2点の試料はいずれも樹皮が確認されていないことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも58%の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1), 337-360  
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887  
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data. *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料	処理	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
			形態	方法	(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-180686	No.1	遺構:SK01(1号脇し穴)底面	木片	AAA	-29.83 ± 0.21	1,020 ± 20	88.08 ± 0.23
IAAA-180687	No.2	遺構:SK02(2号脇し穴)底面	木片	AaA	-31.25 ± 0.42	1,050 ± 20	87.74 ± 0.24

[IAA 登録番号 : #9165]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-180686	1,100 ± 20	87.21 ± 0.23	1,019 ± 21	995calAD - 1024calAD (68.2%)	986calAD - 1033calAD (95.4%)
IAAA-180687	1,150 ± 20	86.62 ± 0.23	1,051 ± 22	987calAD - 1016calAD (68.2%)	904calAD - 918calAD (3.5%) 966calAD - 1025calAD (91.9%)

[参考値]

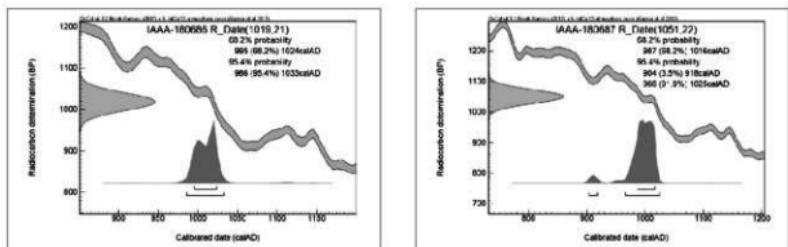
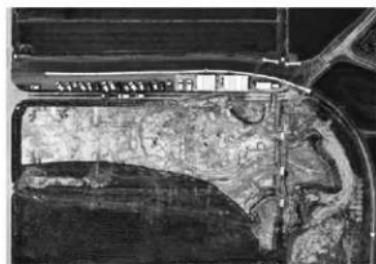


図1 暦年較正年代グラフ（参考）

(1) 紙園 I 道跡



遺跡全景・S→



調査区全景・北



調査前風景・W→



検出状況・W→



基本層序

写真図版1 航空写真、調査区、基本層序



1号溝西侧全景・W→



1号溝西侧断面・W→



1号溝東側全景・W→



1号溝東側断面・W→



2号溝全景・W→

写真図版2 1・2号溝

(1) 紙圖 I 遺跡



2号溝西側断面・W→



2号溝東側断面・W→



2号溝遺物出土状況・E→



3号溝全景・W→(左側は現代溝)



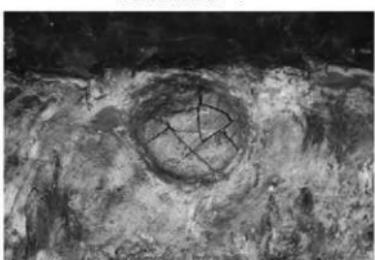
3号溝断面・W→



4号溝西侧全景・S→



4号溝北側全景・E→



4号溝遺物出土状況・S→

写真図版3 2~4号溝



4号溝南側断面・S→



4号溝北側断面・W→



5号溝全景・W→



5号溝断面・W→



1号陥し穴状遺構完掘・SE→



1号陥し穴状遺構木杭検出状況・NW→



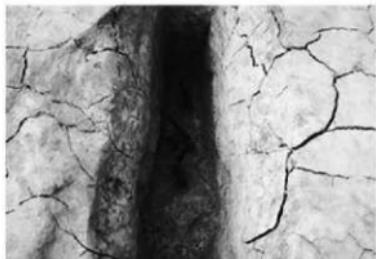
1号陥し穴状遺構断面・SW→



2号陥し穴状遺構完掘・SE→

写真図版4 4・5号溝、1・2号陥し穴状遺構

(1) 紙圖 I 遺跡



2号陥し穴状遺構木杭検出状況・SE→



2号陥し穴状遺構断面・SW→



1号土坑全景・E→

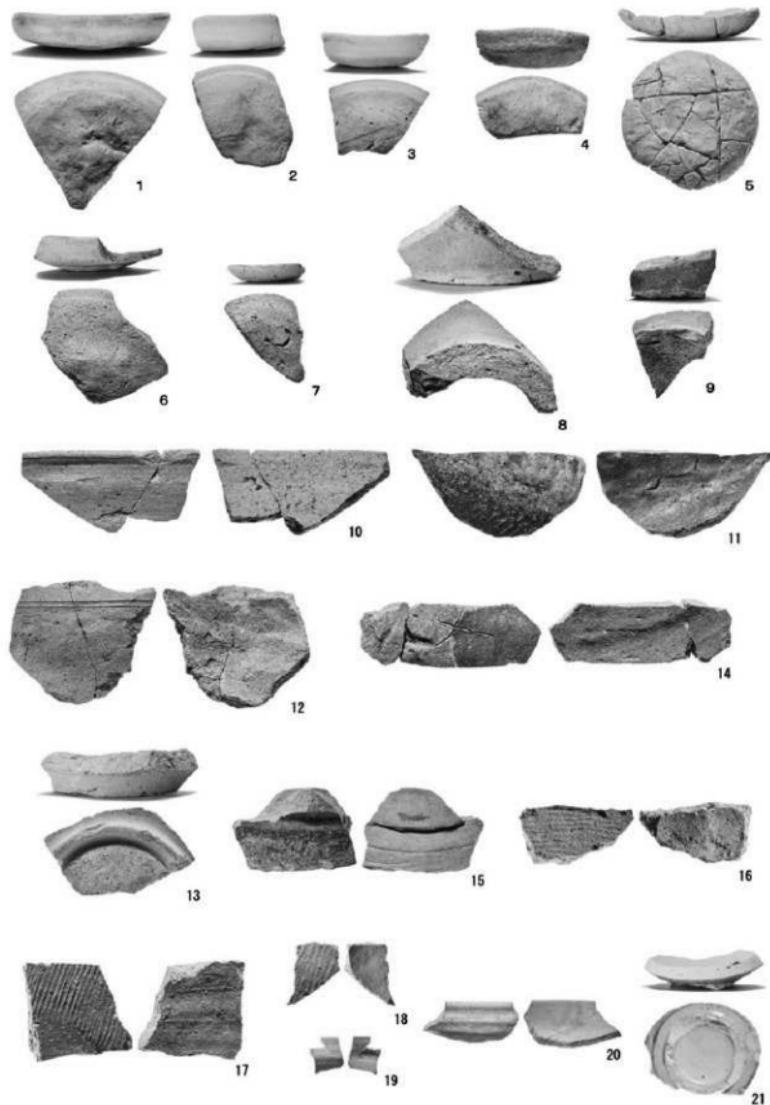


1号土坑断面・S→



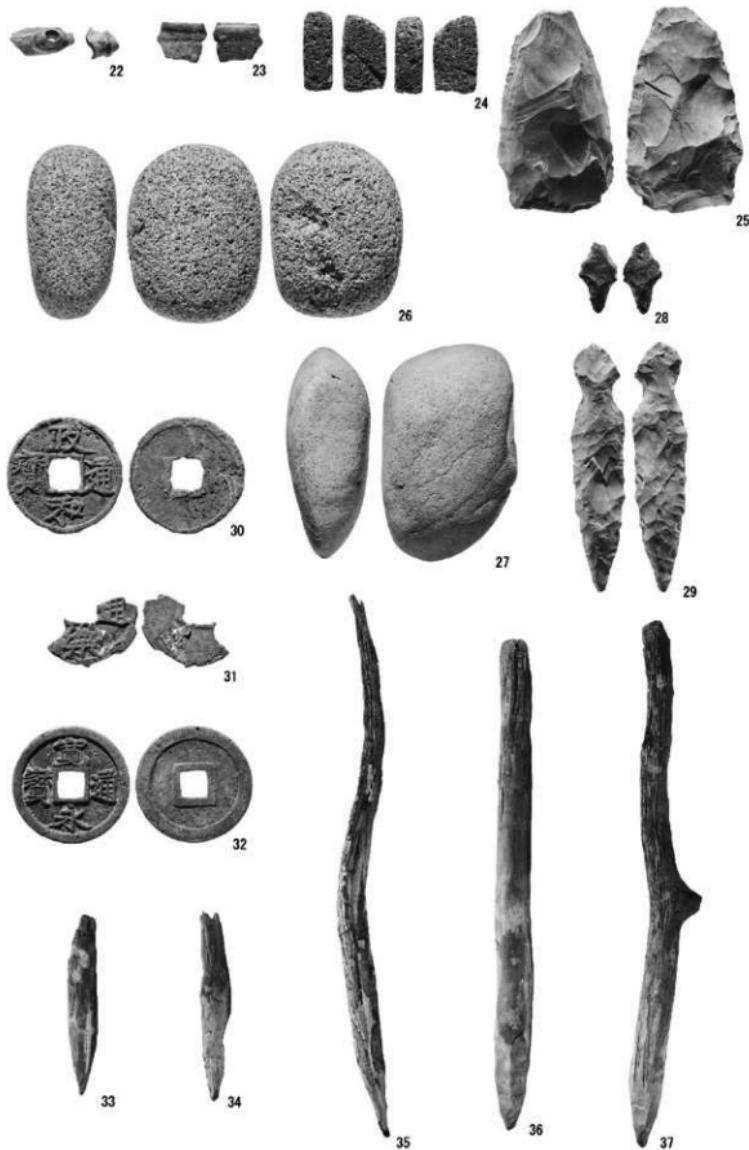
柱穴状土坑全景・E→

写真図版5 2号陥し穴状遺構、1号土坑、柱穴状土坑



写真図版6 出土遺物1

(1) 紙園 I 遺跡



写真図版7 出土遺物2

## (2) 岩洞湖E遺跡

所 在 地	盛岡市戸川字亀橋地内	遺跡コード・略号	KF60-0285・GDE-18
委 託 者	東北農政局岩手山麓農業水利事業所	調査対象面積	1,052m <sup>2</sup>
事 業 名	岩洞ダム貯水池護岸工事	調査終了面積	1,052m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成30年8月20日～9月27日	調査担当者	北田 純・藤田崇志・村上千華

## 1 調査に至る経過

「国営岩手山麓農業水利事業岩洞ダム貯水池浸食防止対策（その4工事）」予定地が岩洞湖E遺跡の一部に係ることから発掘調査をすることになった。

国営岩手山麓農業水利事業は、国営岩手山麓土地改良事業（昭和16年度～昭和43年度）により造成された基幹的な農業水利施設が、経年的な施設の劣化及び寒冷な気象条件の影響により、岩洞ダム、導水路及び幹線用水路のコンクリート構造物の欠損や鋼構造物の腐食等が発生し、漏水等により農業用水の安定供給に支障を来しているとともに、維持管理に多大な費用を要していることから、本事業では施設の機能監視を行いつつダム、導水路等の改修を適時に行い、併せて関連事業において、用水路の改修を行うことにより、農業用水の安定供給と施設の維持管理の軽減を図り、農業生産の維持及び農業経営の安定に資するために平成26年8月1日に事業着手したものである。

なお、本工事は、岩洞ダムの波浪による湖岸浸食が西南西風の影響により進行している左岸側の湖岸について、倒木がダム管理に支障となることや、浸食による市道への影響や民地境界を侵す恐れがあると共に、周囲は県立自然公園に指定されており、環境へ与える影響も懸念されることから、浸食の著しい区間について今後計画的に浸食防止対策を進めるものである。

当事業の工事施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、平成27年10月28日付27北和岩第8号-7「埋蔵文化財包蔵地（岩洞湖E遺跡）の分布調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を行って以降、数度の協議を実施して、平成30年度に岩洞湖E遺跡のうち1,052m<sup>2</sup>の調査を行ったものである。

（農林水産省東北農政局岩手山麓農業水利事業所）



第1図 遺跡位置図

## 2 遺跡の位置と立地

本遺跡は、盛岡市蔽川字亀橋地内に所在し、盛岡市役所玉山総合事務所から東へ約14km、岩洞湖家族旅行村から西に約1.6kmの位置にある。岩洞湖は、1960（昭和35）年に竣工した岩洞ダムによって堰き止められた人造湖で、それ以前は第1回国内の米軍写真の通り山林であり、遺跡は南西向きの緩斜面に立地していた。現在の遺跡の多くは、湖水面より下位にも広がっていると見られ、調査中の9月には水位が下がり、第2図に示した各時代の遺構が確認されている。岩洞湖の周辺遺跡については、平成29年度に調査を行った岩洞湖I・H遺跡の調査報告に詳しく述べられている（岩文埋 2018）。

## 3 基本層序

I～V層に大別される。I層：表土（20～40cm）、II層：黒褐色土（20～40cm）、III層：暗褐色土（20～40cm・上面が遺構検出面）、IV層：黄褐色粘土（30～50cm・地山・上部に黄橙色バミス含む）、V層：岩盤層（層厚不明・地山）である。調査区の大半は、湖水による浸食でIV層黄褐色粘土まで大きく削られており、V層岩盤が露出する箇所も多い。I～III層は、旧地形の残る調査区内の標高が高い箇所には存在するが、標高の低い部分はほぼすべて流出している。

## 4 調査の概要

調査区は①～④の4箇所で、護岸工事予定地部分に設定されている。現況は湖岸浸食を著しく受けている山の緩斜面部分で、ほぼ全ての箇所でII・III層は流出している。I層も立木が残る箇所では根によって浮いた状態となり、大きくオーバーハングしていた。表土を重機で掘削したが、浮いたI層を除去すると、写真図版に示した通り、波に洗われたIV層もしくはV層岩盤が垂直に近い形で残存する様子が確認された。このような状況から、崖部分より下位には遺構は残存せず、調査区の中でも旧地形が残る上部のみに浸食を免れた遺構が残存する可能性が考えられた。調査区のうち、唯一遺構が確認された調査区③と①の一部を除き、旧地形の残存はなく遺構は認められなかった。

### （1）遺構

P1（第2図、写図1） 調査区③南側のX=-18860・Y=42075付近に位置する。浸食された崖部分の黄褐色粘土層で確認した。遺構南側を失っており、長径0.2m、短径0.18m以上、深さは0.16mである。埋土は黄橙色バミス混じりの暗褐色シルトの単層であることから、調査区③基本層序2～3層から掘り込まれたと見られる。何らかの遺構を構成する柱穴状土坑と考えられるが、調査区内では確認できなかった。出土遺物もないため、時期は不明である。

### （2）遺物

調査区内からは出土していない。浸食された湖岸からは、縄文時代前期初頭～晩期中葉の土器・石器のほか、近世～近代の陶磁器、寛永通寶、昭和初期の大日本ビール瓶など各時期の遺物を表面採集することができた。

## 5 まとめ

今回の調査では、著しい湖水の浸食作用により柱穴状土坑1個のみを確認するに留まったが、浸食された湖岸からは多くの遺構・遺物を確認し、遺跡の一端を窺い知ることができた。また、湖の水位が下がった9月には第1図に示した旧野田街道の一部が現れ、盛岡方面から大橋一里塚を通って岩泉へと向かうルートも認められ、各時代にわたって山深い土地が利用されてきたことが分かった。

なお、岩洞湖E遺跡平成30年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

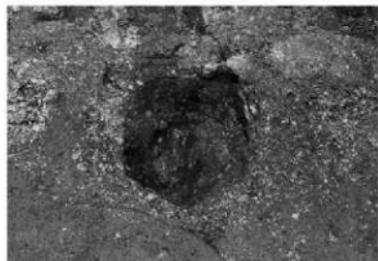
## 参考文献

岩文埋 2017 「(1)岩洞湖I遺跡」『平成28年度発掘調査報告書』 岩文埋調報第676集 p7-10

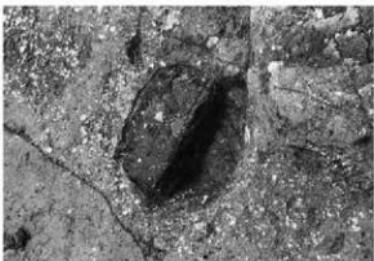
岩文埋 2018 「(1)岩洞湖I・H遺跡」『平成29年度発掘調査報告書』 岩文埋調報第692集 p5-20



(2) 岩洞湖 E 遺跡



P1 全景 (西から)



P1 断面 (南西から)



調査区①全景 (南東から)



調査区②全景 (北西から)



調査区③全景 (南から)



調査区④全景 (西から)



調査区全景 (西から)



旧野田街道と街道沿いの建物跡 (北東から)

写真図版 1 検出遺構

## (3) 八幡館跡

所 在 地 盛岡市芋田字下武道69ほか 調跡コード・略号 KE57-1101・THMD-18  
 委 託 者 盛岡広域振興局農政部農村整備室 調査対象面積 3.317m<sup>2</sup>  
 事 業 名 農地整備事業(経営体育成型)武道地区 調査終了面積 3.317m<sup>2</sup>  
 発掘調査期間 平成30年5月1日～8月9日 調査担当者 北田 純・遠藤 修・村上千華

## 1 調査に至る経過

農地整備事業(経営体育成型)武道地区は、盛岡市旧玉山区の西部に位置する一級河川北上川の左岸沿いに広がる水田地帯で、岩洞ダムを用水源とし水稻を主体に大豆・小麦等複合的な営農を行っている地域である。

当地区においては、区画整理、農道及び用排水路の一体的な整備により、営農効率の向上及び農事組合法人への農地集積の促進による高生産性農業の実現を目指すこととして、平成27年度から事業を実施しているところである。

今般、工事の実施にあたり、八幡館跡が区域内に存在することから、関係者と協議・調整を重ね、発掘調査を実施することとなったものであり、経過については下記のとおりである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、田面については平成27年11月12日付盛広農整第484号、用水路(パイプライン)及び排水路については平成29年11月17日付盛広農整第499号により、盛岡広域振興局農政部農村整備室から岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成27年11月16日～20日(田面)、平成29年11月27日、28日(用排水路)に試掘調査を実施した。

その結果、工事を着手するには八幡館跡の発掘調査が必要となる旨が、平成27年12月7日付教生第1370号(田面)、平成29年12月11日付教生第1215号(用排水路)により回答があった。

この回答を受け、当農村整備室は、平成30年1月31日付盛広農整第660号により、盛土工法による保存箇所と発掘調査による記録保存箇所についての工法等協議を行った。

その結果を踏まえて、当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、平成30年4月1日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになったものである。

(岩手県盛岡広域振興局農政部農村整備室)



第1図 遺跡位置図

## 2 遺跡の位置と立地

本遺跡は、盛岡市芋田字下武道に所在する。IGRいわて銀河鉄道とJR東日本花輪線が乗り入れる好摩駅の南約1.9kmにあり、北上川東岸の河岸段丘上に立地している。遺跡全体の標高は198~207mで、今回の調査地点である現況が水田部分は198~200mとほぼ平坦に造成されている。

## 3 基本層序

I ~ VI層で構成される。I層：耕作土・盛土（30~100cm）、II層：黒褐色土（20~40cm・南側調査区のみ残存）、III層：黒褐色土（20~40cm・部分的に残存）、IV層：暗褐色土（20~40cm・漸移層で部分的に残存）、V層：にぶい黄褐色粘土（20~30cm・地山）、VI層：黄褐色粘土（層厚不明・地山）。

調査地点は、昭和40年代に大規模な水田造成が行われており、調査区の多くでV層上面にブルドーザーなどの重機によるキャタピラ痕を確認している。これを受け、昭和40年代以前の状況を見ると、写真図版2に示した1948（昭和23）年には、北東側が小高く、南西側の北上川に向かって標高が下がる地形で3本の谷が深く入り込んでいたが、写真図版1の現在では谷が埋め立てられ、標高の高い北東側を削平して南西側を平坦に造成していることが確認できる。これによって、調査区の大半は水田造成の影響を多分に受けていると判断される。

## 4 調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、平安時代の竪穴住居1棟と溝2条、古代以降の溝4条・土坑17基・柱穴状土坑18個・自然流路(谷)3条、中世の堀3条、出土した遺物は縄文時代の土器ビニール1袋、平安時代の土師器小コンテナ1箱・須恵器4片、中世陶器1片、近世以降の陶磁器ビニール1袋である。次に遺構・遺物を種類ごとに記載する。

### （1）遺構

<古代>

**竪穴1**（第3・4図、写図3） 調査区⑥中央南のX=-15976・Y=28827付近に位置する。L字形に曲がる調査区の角部分で確認した。遺構南側と西側は調査区外、遺構東側は中世と考えられる堀に切られて失われている。遺構の形状・規模は、隅丸方形で1辺が5m前後と考えられ、北東に35°傾いている。埋土は計16層で構成される。1層に水田耕作土（表土）、2・3層が堀3埋土、4~12層が竪穴1埋土、13~16層が自然堆積層である。竪穴1埋土の4~12層の内訳は、4・5層が黒色シルト主体、埋土下位の6層にはTo-aテフラの二次堆積層、7~10層は黒色~黒褐色シルト主体の初期堆積層、11層はp10埋土、12層にはにぶい黄褐色粘土質シルトと黒色シルトの混合土で貼床を施している。北東壁の中央やや東側にカマド1基が設けられており、調査区を一部拡張して調査を行った。ただし、県生文課トレンチ及び掘削によって、煙道上部まで失われている。残存した煙出し部分の様子から、刎り抜き式の素掘りの煙道と考えられる。煙道の規模は約1.7mと長く、煙出し部分まで断面L字形に掘られている。煙道入口部分には、廃絶後に煙道天井部分から崩落した赤褐色焼土が堆積し、煙出し部分の底にも褐色焼土が堆積していた。燃焼面は50×45cmの不整な方形で、床面が赤褐色に強変している。燃焼面の両脇には各々2箇所の窪みがあり、カマド芯材の礫などが設置されていたと考えられるが、礫やカマドを構築していた粘土の大半は確認されなかったことから、人為的に抜き取った可能性もある。カマド内にp11を確認したが、カマド使用時には埋め戻されていたと見られる。床面からは、p1~10のピットを確認した。このうち、カマド東側にあるp4とやや南側にあるp9は貯蔵用の土坑と考えられる。その他は柱穴状土坑であるが、いずれも浅く明確に主柱穴と認められるものは見つからなかったことから、浅い坑を利用した上屋建築がなされていたのかもしれない。

埋土下位～床面及びカマド、柱穴状土坑から出土した1～7の計7点を掲載した。1はp4などから出土した須恵器壺、2はp9などから出土した内外面にタタキ目のある丸底壺、3・4はカマド付近から出土した非クロロ壺、5～7は床面・カマド付近から出土したロクロロ壺である。これらの出土した遺物は、9世紀前半の範疇に捉えられ、これ以降に廃絶した堅穴住居と見ることができる。

**溝4・5（第6図、写図9）** 調査区③のX=-15950・Y=28911付近に位置する。溝4・5ともに検出面の幅は約0.5m、断面から推定される使用時の幅は約1mと見られる。断面観察から溝4より溝5がやや新しい。埋土2層にTo+テフラ二次堆積層が認められることから、堅穴1とはほぼ同じ9世紀前半に機能していた溝と考えられる。

<古代以降>

**土坑1（第4図、写図4）** 調査区①東側のX=-16113・Y=28975付近に位置する。長径0.9m、短径0.8mの楕円形、深さ0.15mの規模である。出土遺物なし。

**土坑2（第4図、写図4）** 調査区①中央東側のX=-16106・Y=28907付近の調査区境界に位置する。長径0.85m、短径0.32m以上の不整円形で、深さは0.34mである。出土遺物なし。

**土坑3（第4図、写図4）** 調査区①中央のX=-16134・Y=28846付近に位置する。長径2.0m、短径1.54mの不整楕円形で、深さは0.53mである。不整形で、倒木痕の可能性もある。出土遺物なし。

**土坑4（第4図、写図4）** 調査区①中央のX=-16131・Y=28843付近に位置する。長径1.95m、短径1.52mの不整楕円形で、深さは0.47mである。不整形で、倒木痕の可能性もある。出土遺物なし。

**土坑5（第4図、写図5）** 調査区①中央のX=-16131・Y=28846付近に位置する。長径2.5m、短径1.8mの不整形で、深さは0.23mである。不整形で、倒木痕などの可能性がある。出土遺物なし。

**土坑6（第4図、写図5）** 調査区①中央西側のX=-16116・Y=28820付近に位置する。長径0.9m、短径0.76mの円形で、深さは0.24mである。出土遺物なし。

**土坑7（第5図、写図5）** 調査区①西側のX=-16074・Y=28833付近に位置する。長径1.41m、短径1.20mの不整楕円形で、深さは0.28mである。出土遺物なし。

**土坑8（第5図、写図5）** 調査区①中央のX=-16126・Y=28841付近、調査区境界に位置する。長径2.47m、短径1.35m以上の不整楕円形で、深さは0.22mである。出土遺物なし。

**土坑9（第5図、写図6）** 調査区②西側のX=-16056・Y=28869付近、調査区境界に位置する。長径2.90m、短径1.78m以上の円形で、深さは0.70mである。地下水位が高く、素掘りの井戸の可能性もある。出土遺物なし。

**土坑10（第5図、写図6）** 調査区②西側のX=-16061・Y=28883付近、調査区境界に位置する。長径2.35m、短径1.25mの不整形で、深さ0.35mである。溝2・3の間にあり、これに繋がる可能性もある。出土遺物なし。

**土坑11（第5図、写図6）** 調査区②西側のX=-16044・Y=28850付近に位置する。長径3.70m、短径3.0mの不整円形で、深さは0.12mである。堅穴を想定したが、性格は不明。出土遺物なし。

**土坑12（第5図、写図6）** 調査区②西側のX=-16049・Y=28867付近に位置する。長径・短径ともに3.0mの円形で、深さは0.20mである。堅穴を想定したが底面が平坦ではなく、性格不明。出土遺物なし。

**土坑13（第6図、写図6）** 調査区③西側のX=-15942・Y=28891付近に位置する。長径2.0m、短径1.90mの楕円形で、深さは0.30mである。出土遺物なし。

**土坑14（第6図、写図7）** 調査区③西側のX=-15944・Y=28894付近に位置する。長径1.50m、短径1.35mの不整円形で、深さは0.50mである。出土遺物なし。

**土坑15（第6図、写図7）** 調査区③西側のX=-15954・Y=28918付近、調査区境界に位置する。長

径1.65m、短径1.0m以上の不整梢円形で、深さは0.37mである。出土遺物なし。

**土坑16** (第6図、写図7) 調査区⑥中央のX=-15936・Y=28837付近に位置する。北側を搅乱されているが、長径2.50m以上、短径2.30mの円形で、深さは0.35mである。出土遺物なし。

**土坑17** (第6図、写図7) 調査区⑥中央南側のX=-15983・Y=28839付近に位置する。断面袋状の土坑で、長径1.0m、短径0.90mの円形、深さは0.20mである。形状からは縄文時代に属すると思われるが、不明。出土遺物なし。

**溝1** (第6図、写図9) 調査区①中央のX=-16149・Y=28866付近に位置する。幅0.52m、深さ10cmで、北東から南西に向かって走る溝である。出土遺物なし。

**溝2・3** (第7図、写図9) 調査区②西側のX=-16050~16061、Y=28875~28889付近に位置する。南側では各々分かれているが、北側で大きな溝となる遺構である。調査範囲からは溝としたが、自然流路の可能性もある。溝2は幅1.9m、深さ0.1m、溝3は幅1.5m、深さ0.1mの規模で、北西から南東に向かって走っている。出土遺物なし。

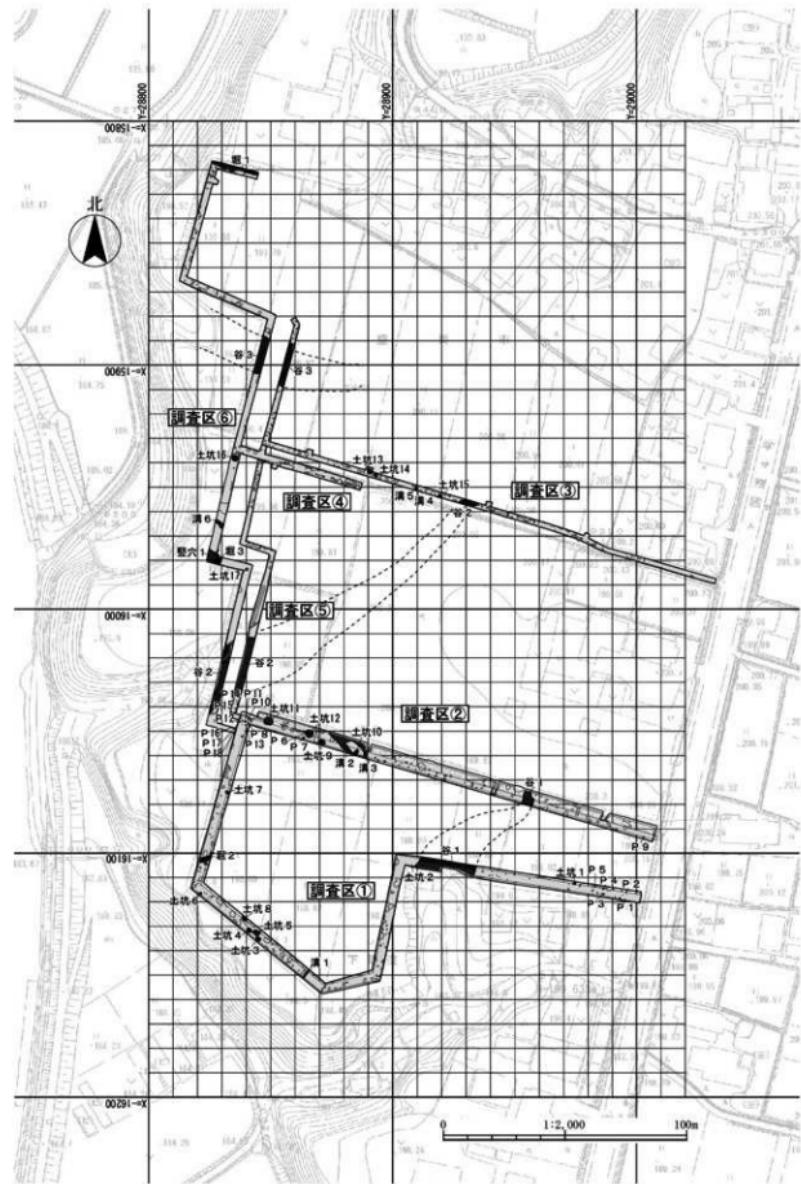
**溝6** (第8図、写図10) 調査区⑥中央のX=-15964・Y=28830付近に位置する。北西から南東に向かって走る溝で、溝幅1.15mで南東では幅1.85mに変化する。深さは断面Aで0.8mあり、断面逆台形の形状である。埋土は砂層を挟むことから、水成堆積しており、水路として利用された可能性もある。位置的に堀3と繋がる可能性もあり、断面形状が異なるがL字形に曲がる堀とも考えられる。出土遺物なし。

<中世以降>

**堀1** (第7図、写図8) 調査区⑥北端のX=-15818~-15820・Y=28826~28844付近に位置する。東西に走る堀の南側肩部分のみを検出した。堀は、約19mある調査区の西端から東端まであり、調査区外へと延びていく遺構で、後述するが現地形の確認から農道沿いにL字形に巡って段丘北側に張り出す小丘陵を区画すると考えられる。埋土は最終的に昭和40年代の大規模な埋め立てによって1層が形成されており、これ以前の2~5層が堀埋土である。深さは大半を調査区外とするため不明であるが、断面Bから急傾斜を呈することが分かる。出土遺物はなく、時期は特定できなかった。

**堀2** (第8図、写図8) 調査区①西側のX=-16101・Y=28822付近に位置する。調査区内を東西に横切る堀で、断面がV字形を呈する。検出時で堀幅1.8mであるが、断面からは幅2.5mほど残存していたと見られる。断面A・Bの2箇所で記録したが、本来の規模を示すのは断面Aである。埋土は計9層で構成され、1層は水田耕作土(表土)、2~7層が堀埋土、8・9層は構築以前の自然堆積層・地山である。堀埋土の内訳は、2層が最終堆積層、3層は水成堆積によって埋まった砂層、4~7層は黒色~黒褐色シルト主体の堆積層となる。堀は東西に走っていることから、調査区①もしくは②に延長部分が確認されることを期待したが、検出されなかった。また、出土遺物はなく、遺構の時期は特定できなかった。

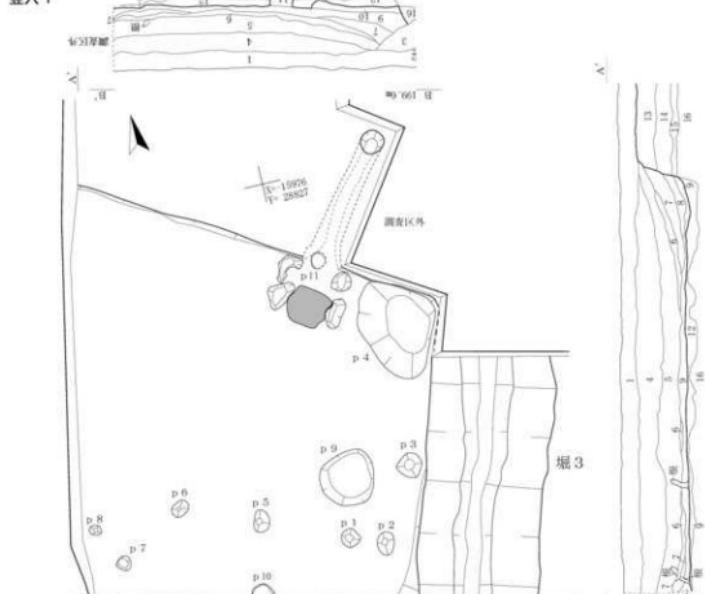
**堀3** (第8図、写図8) 調査区⑥中央のX=-15980・Y=28830付近に位置する。堅穴1と西側で重複しているが、本遺構が新しい。堀は南北に走っており、調査区内から約3m分を検出した。検出時の堀幅は約1.5mだが、断面から見る本来の幅は2.5~3.0mであったと見られる。断面形はV字形を呈しており、急斜度に立ち上がる形状である。断面は南北2箇所で記録しており、層位共通の計15層で構成される。1層は水田耕作土(表土)、2~8層は堀埋土、10~13層は堅穴1埋土、9・14・15層は堀構築以前の自然堆積層・地山である。堀埋土の内訳は、2~6層が黒色シルトと砂質シルトの堆積層、7層は壁面崩落層、8層は初期堆積層である。南北に延びる本遺構は、L字形に曲がって溝6と連絡する可能性もあるが規模・形状が異なり、不明である。出土遺物はなく、時期を特定することは出来



第2図 調査全体図

(3) 八幡館跡

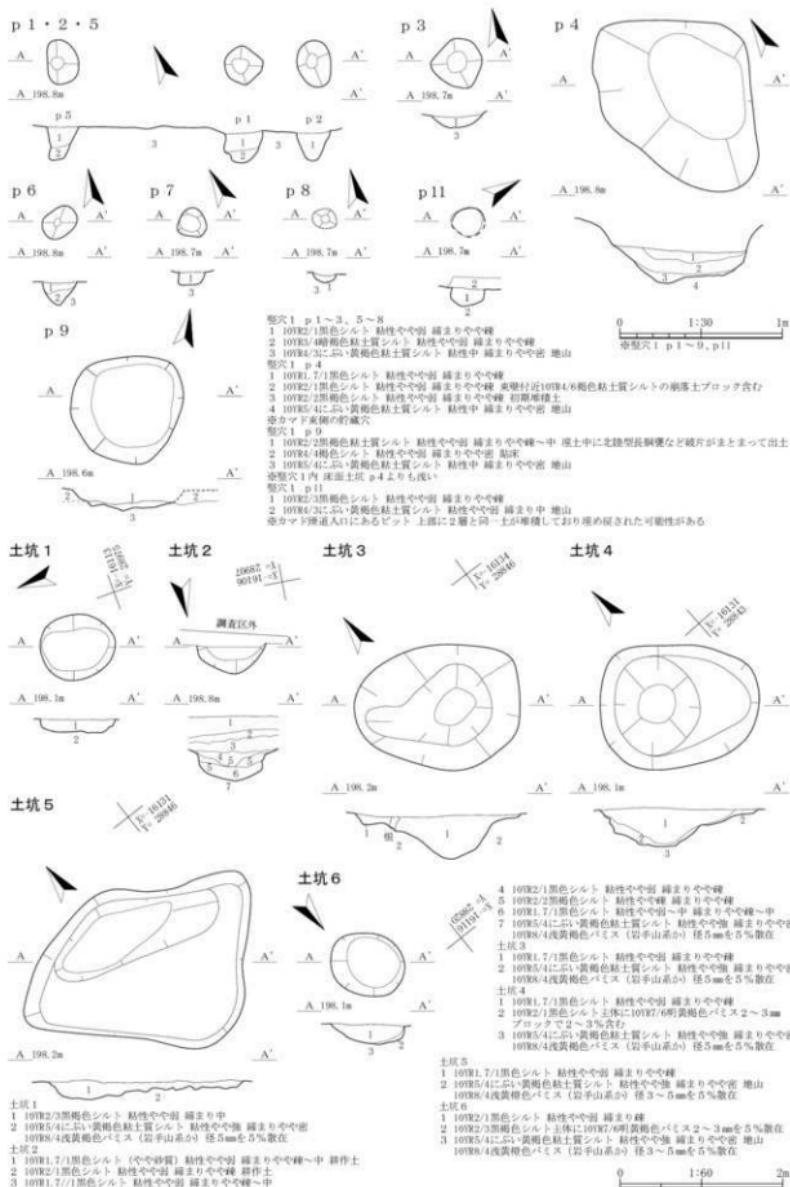
豊穴 1



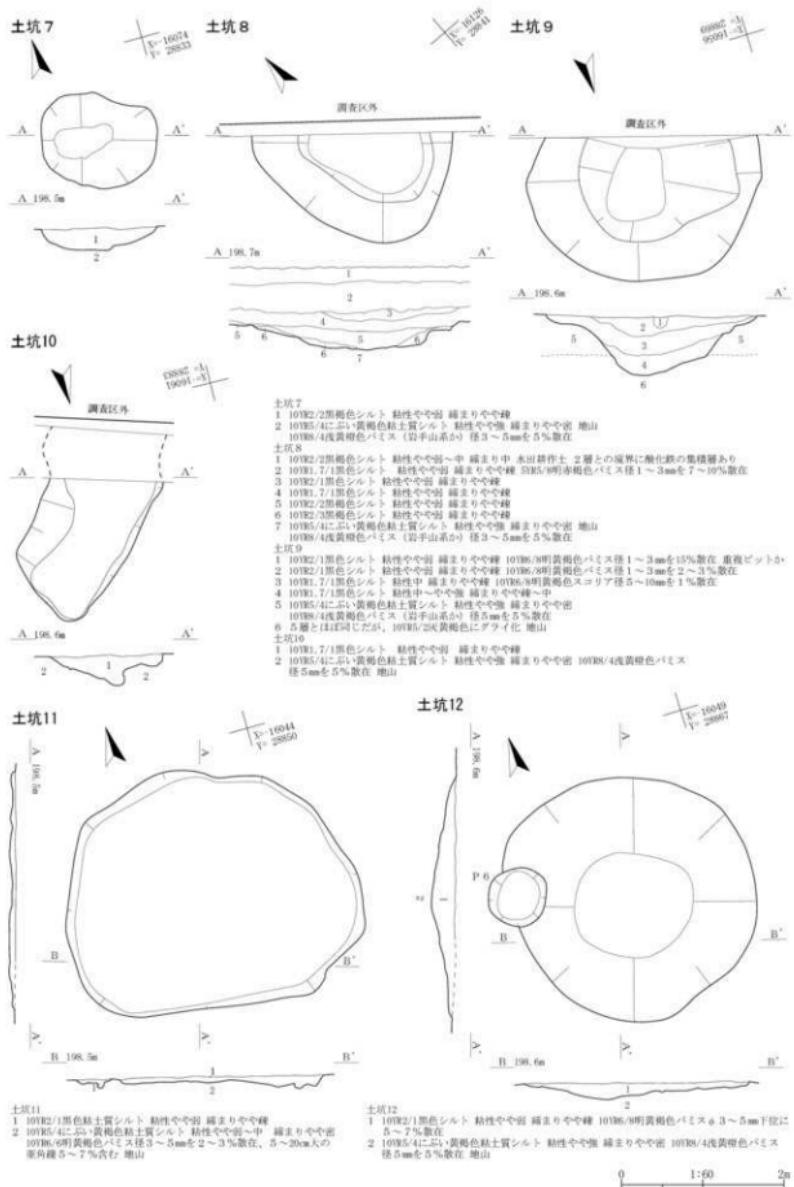
豊穴 1 カマド



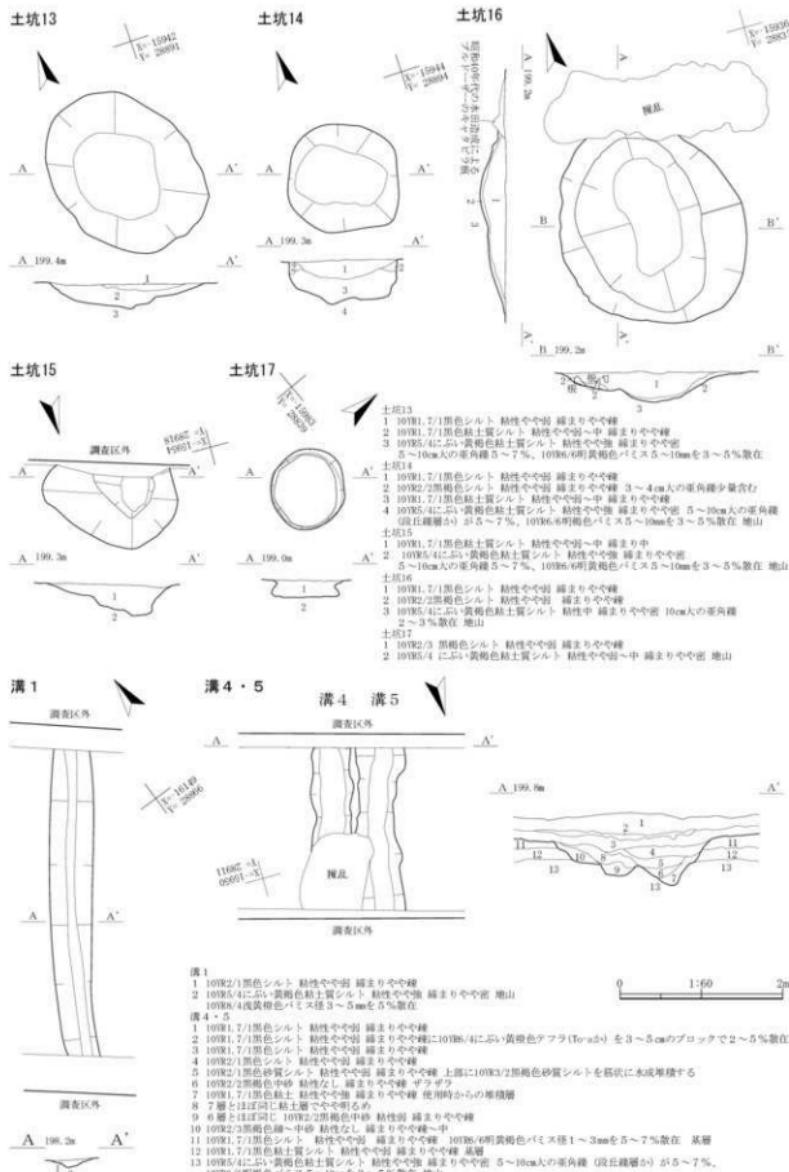
第3図 豊穴 1(1)



### (3) 八幡館跡



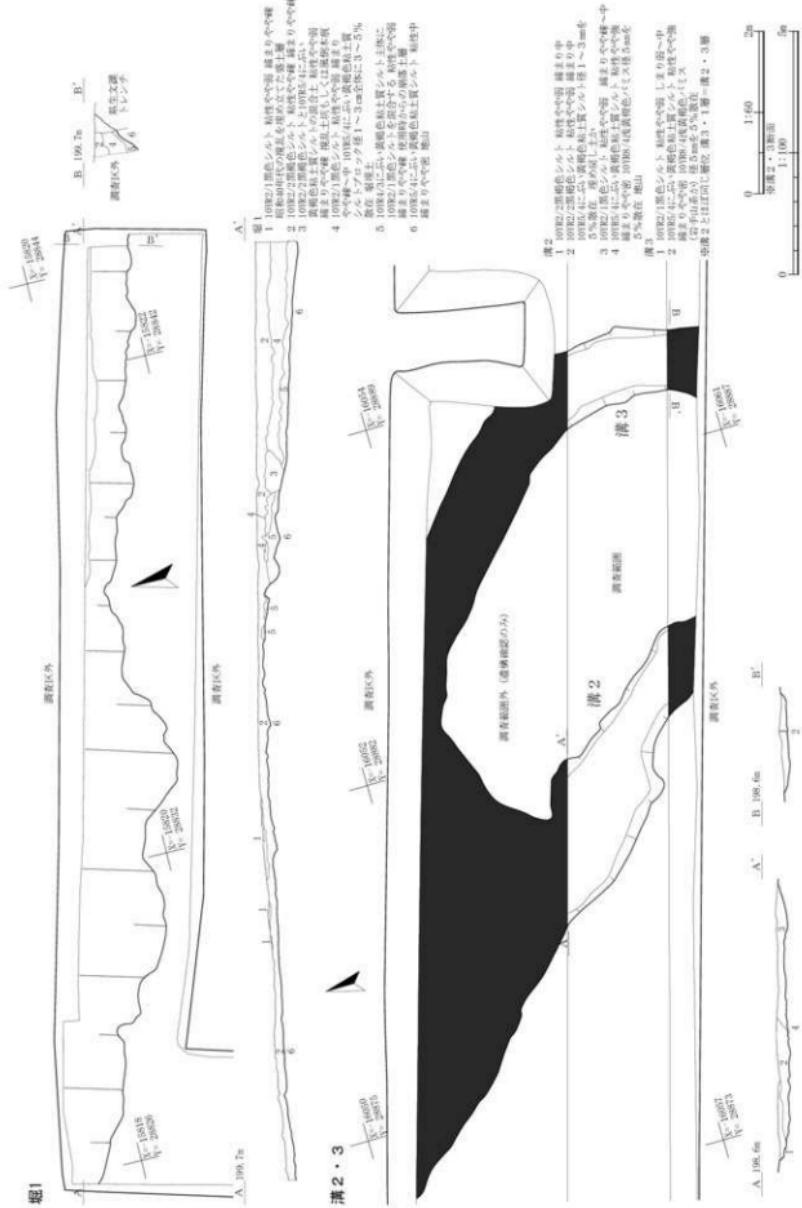
第5図 土坑7~12



1	10B2/1黒色シルト 粘性やや強 織まりやや細	0	1:60	2m
2	10B2/54/2-5-1 黄褐色土質シルト 粘性やや強 織まりやや粗 基層			
3	10B2/8/1 黄褐色地帯バーミクスト 3~5mmを5%以上			
4	5cm			
4-5	4			
1	10B2/1.7/1黒色シルト 粘性やや弱 織まりやや細			
2	10B2/1.7/2 黑褐色地帯シルト 粘性やや強 織まりやや粗			
3	10B2/1.7/1 黒色シルト 粘性やや弱 織まりやや細			
4	10B2/2 黒色シルト 粘性やや弱 織まりやや細			
5	10B2/2 黑色砂質シルト 粘性やや強 織まりやや粗 上限に10B3/1黒色地砂質シルトを底層に水成堆積する			
6	10B2/2 黑色地砂質シルト 粘性なし 織まりやや粗 ガザラ			
7	10B2/2 黑色地砂質シルト 粘性なし 織まりやや粗 使用時からの堆積層			
8	10B2/2 黑色地砂質シルト 粘性なし 織まりやや粗			
9	10B2/2 黑色地砂質シルト 粘性なし 織まりやや粗			
10	10B2/2 黑色地砂質シルト 粘性なし 織まりやや粗			
11	10B2/2 黑色地砂質シルト 粘性なし 織まりやや粗			
12	10B2/1.7/1 黑色土質シルト 粘性やや強 織まりやや粗 基層			
13	10B2/8/1 黄褐色地帯バーミクスト 1~3mmを5~7%散在 基層			
14	10B2/54/2-5-1 黄褐色土質シルト 粘性やや強 織まりやや粗 5~10cm大の堆積層(設丘堆积層)が5~7%。			

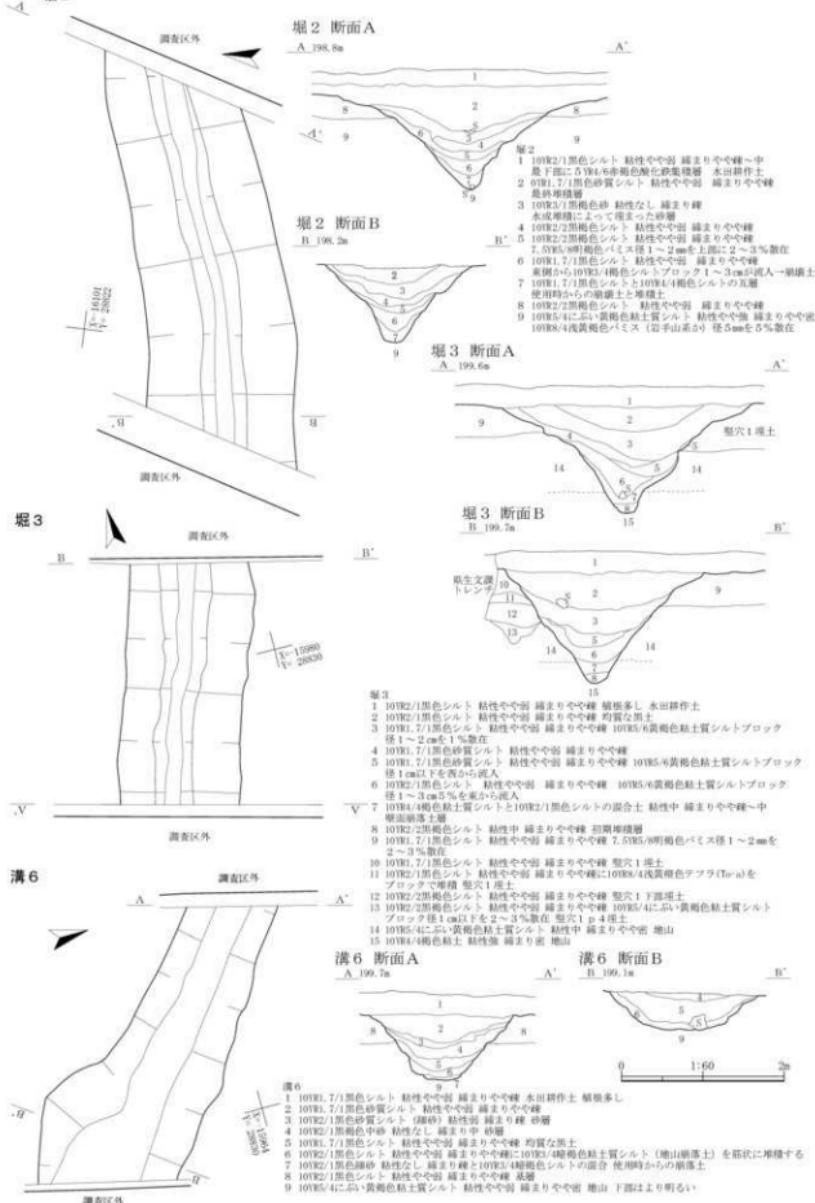
第6図 土抗13~17-溝1:4:5

### (3) 八幡館跡

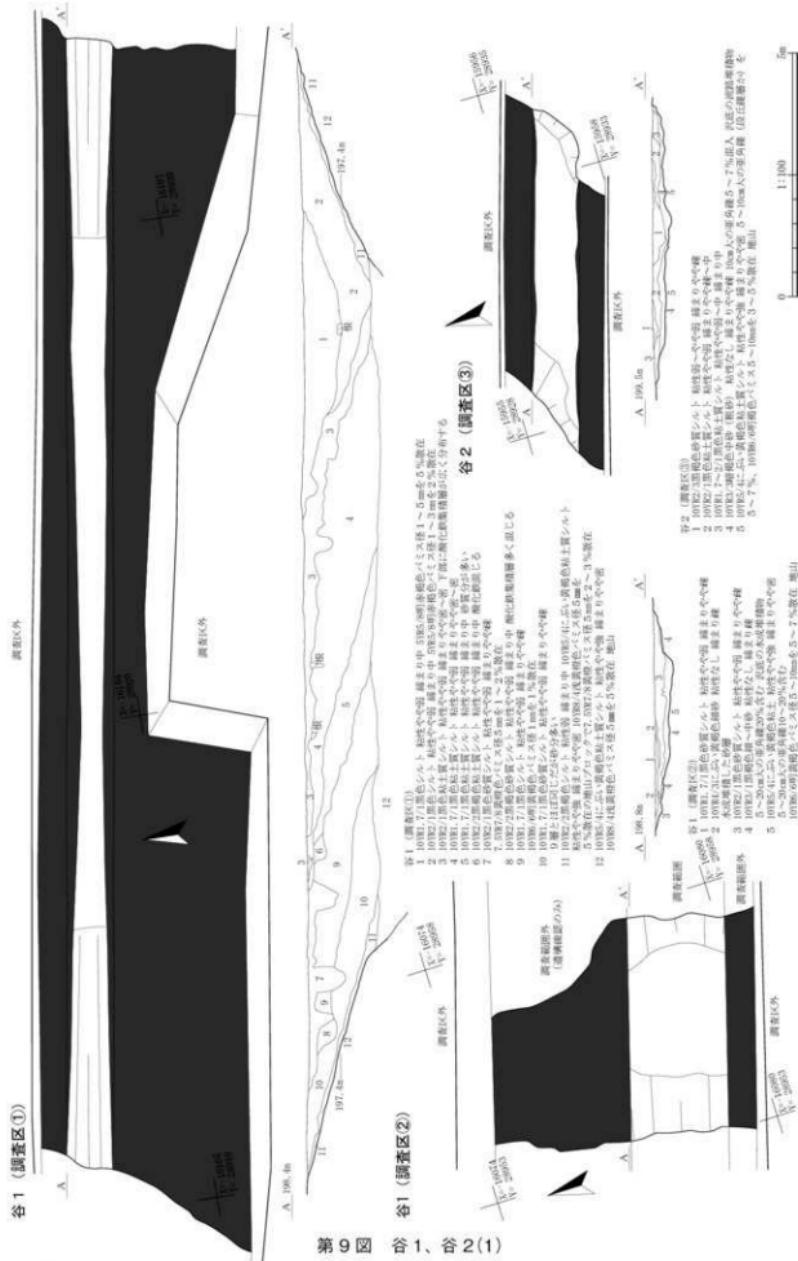


第7図 堀1、溝2・3

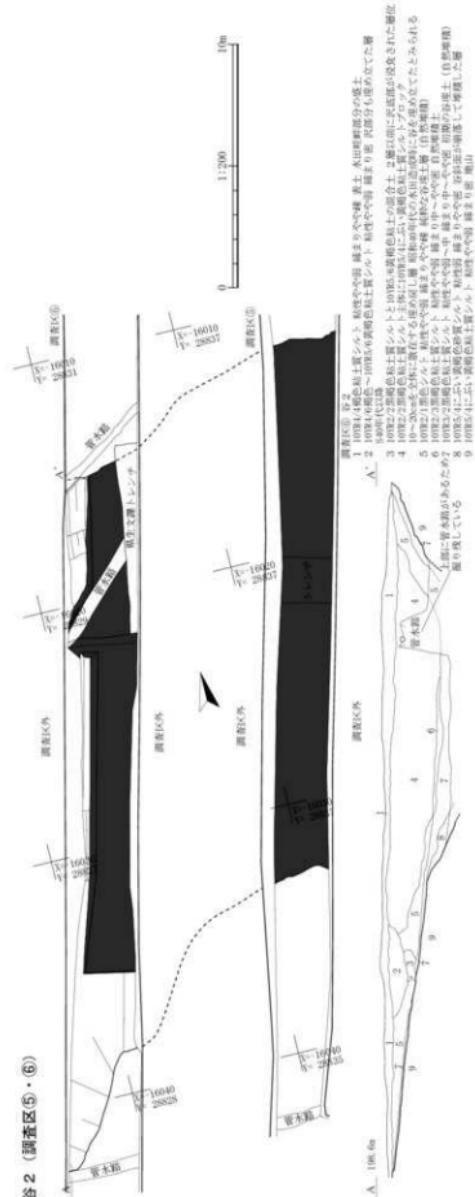
图 2



第8図 堀2・3、溝6



第9図 谷1、谷2(1)



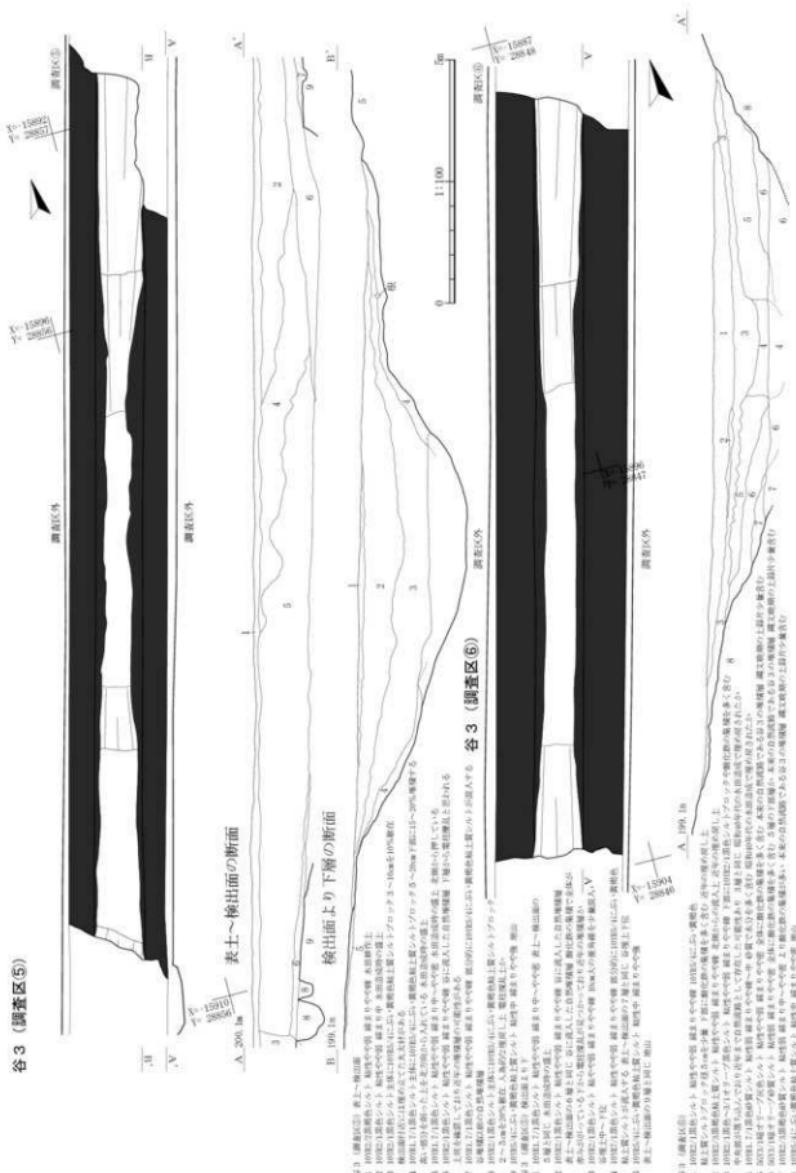
第10図 谷2(2)

なかつた。

谷①(第9図、写真10) 調査区①東側のX=-16102~ -16107・Y=28910~28930と、調査区②東側のX=-16074~ -16080・Y=28953~28958の2地点で確認した。①では幅約23m、②では幅2.7mまで狭くなる。埋土は、①で12層、②で5層で構成されるが、①はトレチの深さ1.5mまで掘削したが底に到達できなかった。トレチ底面から検土杖で深さ1mまで確認したが、底面に達せず安全を考慮して下層の調査を断念した。幅や傾斜から、自然の小谷地形と判断した。

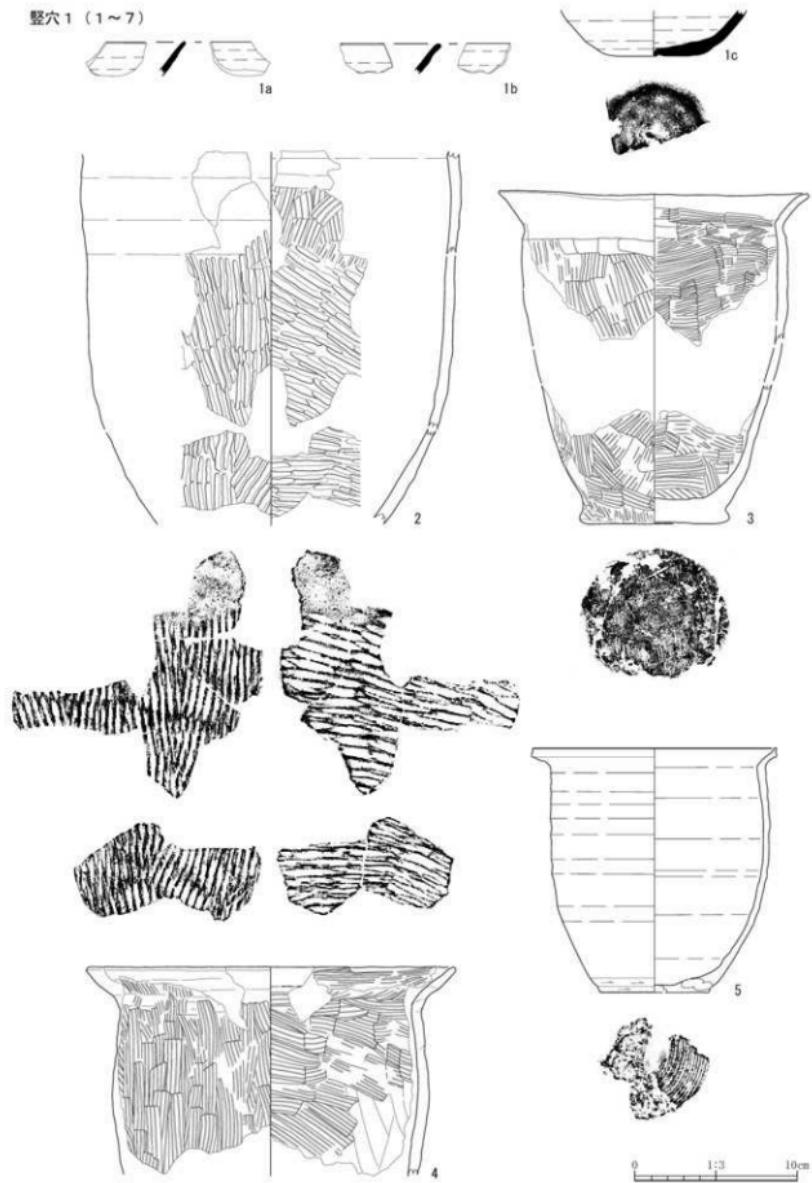
谷2(第9・10図、写真10・11) 調査区③のX=-15955・Y=28928ft付近と、調査区⑤・⑥のX=-16010～-16040・Y=28827～28837の2地点で確認した。⑤・⑥では約27m、③では幅6.0mまで狭くなる。埋土は、③が5層、⑤・⑥が9層で構成されるが、⑥はトレンチの深さを地表面から約3mまで掘削したが底に到達できなかった。調査区の幅から安全を考慮して、これ以下の下層の調査を断念した。⑥断面4層から、昭和40年代に大きく埋め立てていることを確認した。幅や傾斜から、本遺構は自然の小谷地形と考えられる。

谷③(第11図、写真11) 調査区⑤のX=-15892~-15910・Y=28856~28857付近と、調査区⑥のX=-15887~-15904・Y=28846~28848付近の2地点で確認した。⑤と⑥は隣接する調査区のため、谷幅はほぼ変わらず、約16~18mである。埋土は、⑤が9層、⑥が8層で構成されるが、⑥については深さ1.5m近く掘削しても底に達せず、調査区の幅から安全を考慮して下層の調査を断念した。ただし、トレンチ底を検土杖で深さ1mまで確認している。幅や傾斜、

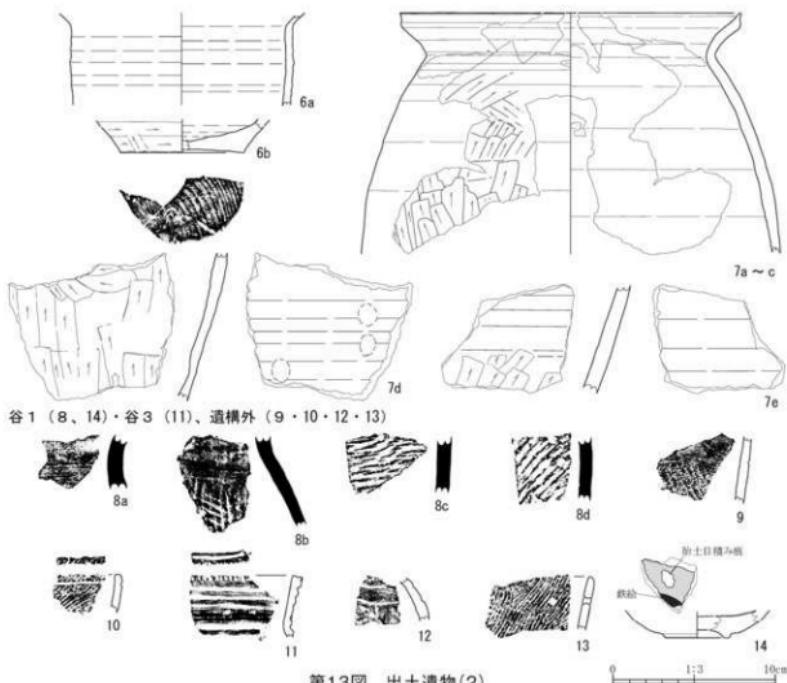


第11回 谷3

竪穴 1 (1~7)



第12図 出土遺物(1)



第13図 出土遺物(2)

⑤底の断面形から、自然の小谷地形と判断した。

柱穴状土坑（第2図） 計18個を確認した。調査区①東側にP 1～5、調査区②東側にP 9、調査区②西側と調査区⑤・⑥南端にP 6～8・12～18が分布している。建物を構成するかは、調査区が狭く確認に至らなかった。

## (2) 遺物（第12・13図、写真図版12）

<縄文時代>

9～13の計5点を掲載した。9・10・13が後期前葉、11・12が晩期と考えられる。縄文時代の明確な遺構は確認しておらず、各調査区から少量ずつ出土している。

<古代>

竪穴1出土の1～7、谷1（調査区①）出土の8の計8点を掲載した。いずれも平安時代中期の9世紀前半に属すると考えられる。1は底部回転ヘラ切りの須恵器壺、2は底部丸底の土師器壺で内外面にタタキ目を有する北陸型長胴壺、3・4は口縁に最大径を持つ非クロコロ成形の土師器壺、5・6は口縁に最大径を持つクロコロ成形の壺、7は体部上半に最大径を持つ土師器壺でロクロ後にケズリで器面調整をしている。8は須恵器大壺の破片で、a～dは同一個体と考えられる。

<中世>

谷1（調査区①）出土の14陶器1点を掲載した。底部破片で、内面に鉄絵を描き、透明釉で仕上げ

ており、胎土目積みの痕跡も認められる。安土桃山時代（16世紀末）の唐津焼の碗と考えられる。

<近世以降>

不掲載だが、18世紀の瀬戸や大堀相馬、肥前の碗類など近世陶器をビニール1袋出土している。

第1表 遺物観察表

No.	分類	出土場所	地名	鉢形	縦横	横径	底径	底脚	底脚	内面底脚・底足など	外面底脚・底足など	底	色調	備考
1	セラミック	1号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
2	セラミック	2号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
3	セラミック	3号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
4	セラミック	4号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
5	セラミック	5号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
6	セラミック	6号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
7	セラミック	7号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
8	セラミック	8号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
9	セラミック	9号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
10	セラミック	10号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
11	セラミック	11号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
12	セラミック	12号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
13	セラミック	13号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色
14	セラミック	14号	田中	平底	3	3	10.0	—	—	—	—	白	1.5mm以上の厚さの 白色の板状の底	白色

## 5 まとめ

今回の調査から、平安時代の堅穴住居や溝、中世と考えられる堀を確認した。日本城郭大系によれば、「館跡は北上川に浸蝕された標高約200mの段丘が北方に突き出した先端にあり、周辺の斜面の唐松林に囲まれた土壘状の中心郭は東西25m×南北約13mの長方形」で、「比高約30mの斜面の北東角の中腹には棚状の削平地がみられ、それは西側の斜面にも設けられている」と記載されている（本堂ほか 1980）。現在も頂部には武道八幡神社が祀られており、第14図に示した通り、曲輪1～3が確認できる。また、今回確認した堀1の位置から、北東方向へL字形に巡る堀の位置を推定している。現在は農道と民家の出入り口として利用されているが、おそらく曲輪3の南から東側を遮断する役割を持っていたと考えられる。確認した堀2・3については、城館本体から南にやや離れており、現況からは想定できないが平時の居館を区画していたとも考えられる。調査区内には自然の谷地形も3箇所認められることから、これらを利用した区画が施されていたのではないかと推察される。

八幡館跡は、源義家・義經に関わる伝承や「中世には東根河村六館の一つとして、玉山氏の一族浜民助市秀明の居館」であったとされているが、詳細は不明である（本堂ほか 1980）。周辺には、岩手郡を治めた河村氏の一族である玉山氏、日戸氏、下田氏の城館が点在しており、これに繋がる在地有力者の城館と考えられる。

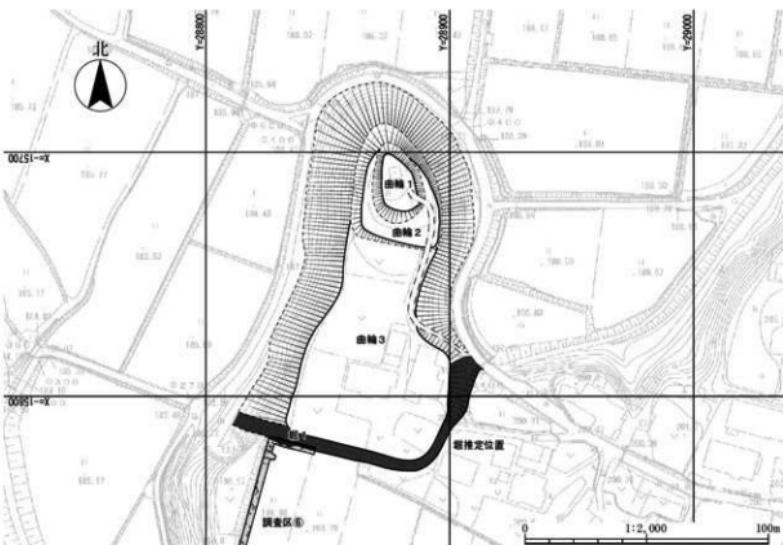
見つかった遺構・遺物から、北上川東岸の低い段丘面まで平安時代の集落の広がりが確認され、また、少なくとも16世紀末まで存在する城館及びこれに関わる平時の居館の存在が推定される。

なお、八幡館跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

## 参考文献

本堂寿一ほか編 1980 『日本城郭大系2 青森・岩手・秋田』 新人物往来社 p239

岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』 岩手県文化財調査報告書第82集



第14図 八幡館跡城館範囲



俯瞰遠景(東から)



直上近景(右が北)

(3) 八幡館跡



直上全景(上が北)



遺跡拡大(上が北)

写真図版2 米極東空軍航空写真（1948年5月15日撮影・国土地理院提供）



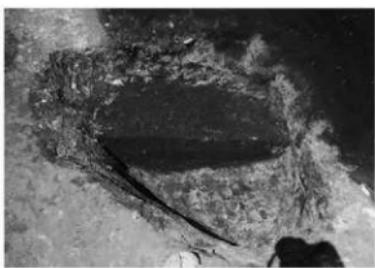
全景(南西から)



断面(北から)



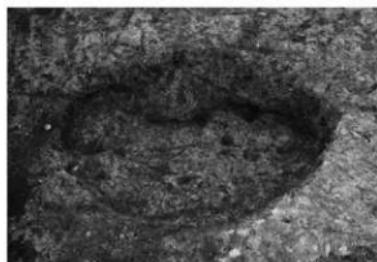
カマド完振(南西から)



p4断面(南から)

写真図版3 竪穴1

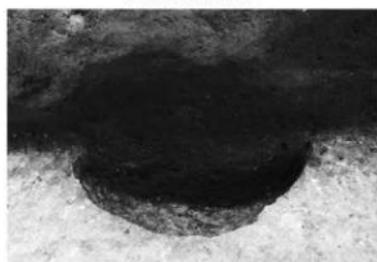
(3) 八幡館跡



土坑1全景(西から)



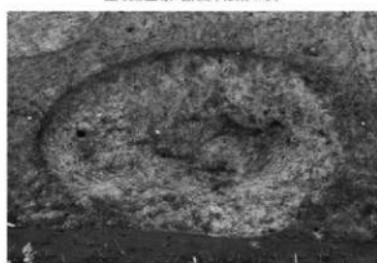
土坑1断面(西から)



土坑2全景・断面(北東から)



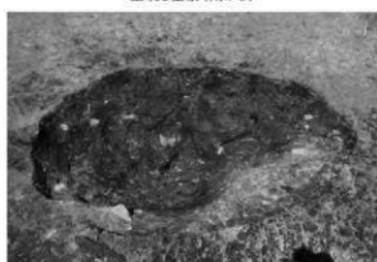
調査区①東側全景(西から)



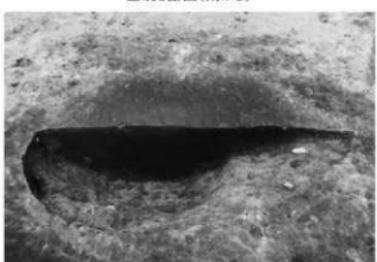
土坑3全景(南から)



土坑3断面(南から)

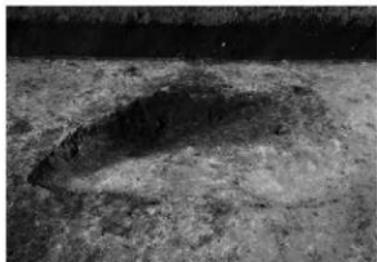


土坑4全景(南から)



土坑4断面(南から)

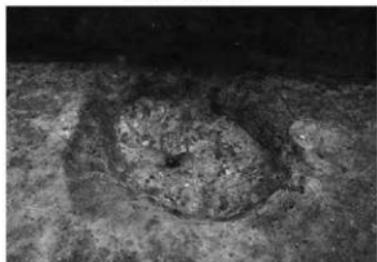
写真図版 4 土坑1～4



土坑5全景(南から)



土坑5断面(南から)



土坑6全景(北から)



土坑6断面(北から)



土坑7全景(南から)



土坑7断面(南から)



土坑8全景(南から)



調査区②西側全景(西から)

写真図版5 土坑5~8

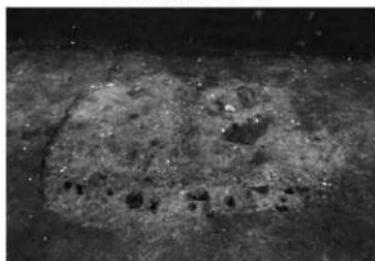
(3) 八幡館跡



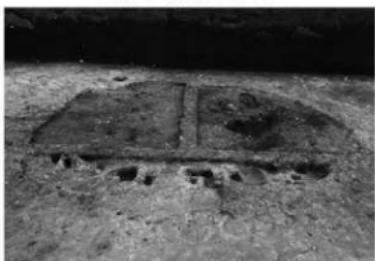
土坑9全景・断面(北から)



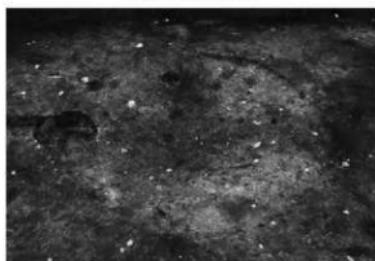
土坑10全景・断面(北から)



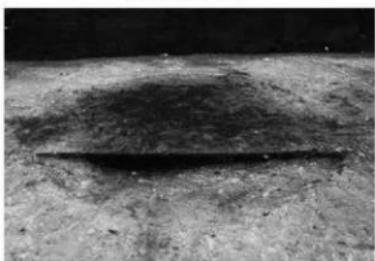
土坑11全景(南から)



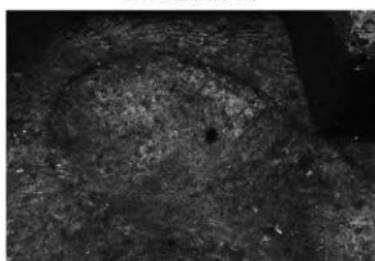
土坑11断面(南から)



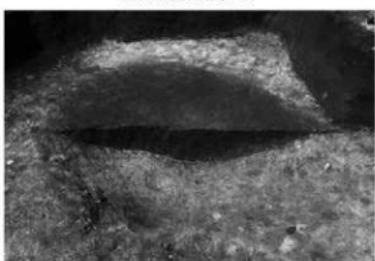
土坑12全景(南から)



土坑12断面(南から)

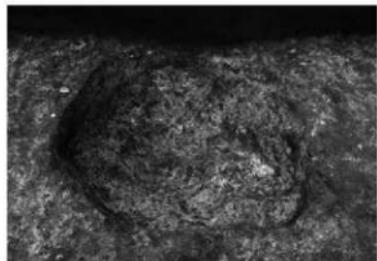


土坑13全景(南から)

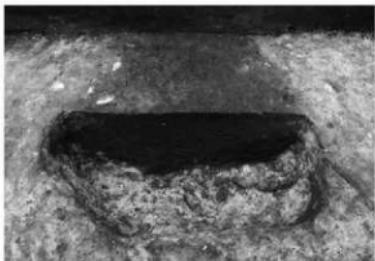


土坑13断面(南から)

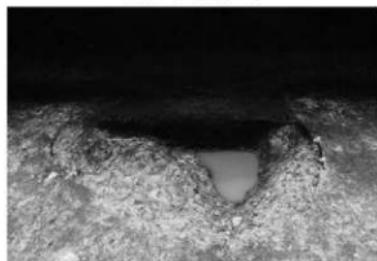
写真図版6 土坑9～13



土坑14全景(南から)



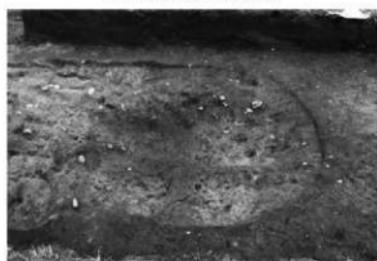
土坑14断面(南から)



土坑15全景・断面(北から)



調査区③西侧全景(西から)



土坑16全景(西から)



土坑16断面(南から)



土坑17全景(南東から)



土坑17断面(南東から)

写真図版7 土坑 14～17

(3) 八幡館跡



堀1全景(西から)



堀1断面(南東から)



堀1断面(西から)



調査区④東側全景(西から)



堀2全景(西から)



堀2断面(東から)



堀3全景(北から)

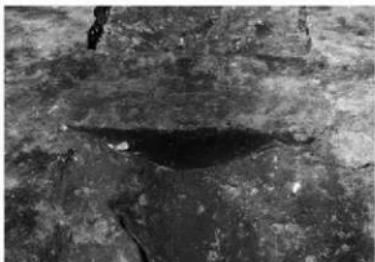


堀3断面A(南から)

写真図版8 堀1～3



溝1全景(南から)



溝1断面(南から)



溝2・3全景(西から)



溝2断面(南から)



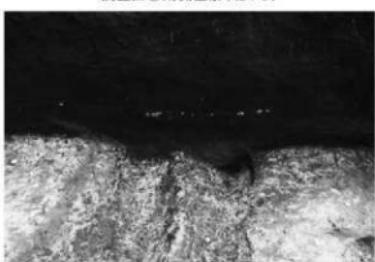
溝3断面(北から)



調査区⑤南側全景(北から)



溝4・5全景(北から)



溝4・5断面(北から)

(3) 八幡館跡



溝6全景(東から)



溝6断面B(西から)



調査区①谷1全景(西から)



調査区①谷1断面(南東から)



調査区②谷1全景(西から)



調査区②谷1断面(南から)



調査区③谷2全景(南東から)



調査区③谷2断面(南西から)

写真図版10 溝6、谷1・2 (1)



調査区⑤谷2検出(北西から)



調査区⑥谷2断面(南東から)



調査区③谷3全景(南から)



調査区③谷3断面(南西から)



調査区⑥谷3全景(南から)



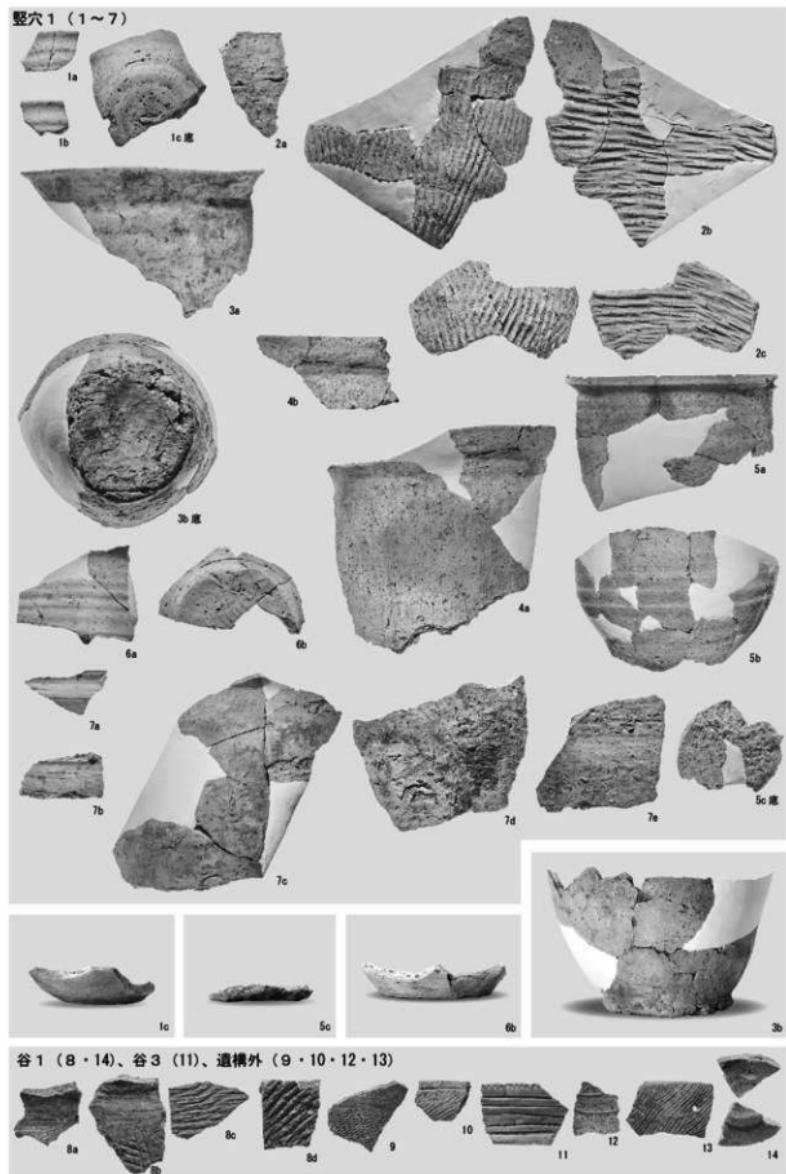
調査区⑥谷3断面(南西から)



調査区⑤現況(南から)



武道八幡神社(南東から)



写真図版12 出土遺物

## (4) 沖遺跡

所 在 地	九戸郡九戸村長興寺地内	遺跡コード・略号	JF12-1251・OKI-18
委 託 者	県北広域振興局土木部二戸土木センター	調査対象面積	1,742m <sup>2</sup>
事 業 名	地域連携道路一般国道340号長興寺地区	調査終了面積	1,742m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成30年9月3日～10月30日	調査担当者	村木 敬・船渡耕己・藤田崇志

## 1 調査に至る経過

沖遺跡は、一般国道340号長興寺地区道路改良工事の施工に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

国道340号は、岩手県内陸部の北上山地を南北に縦断する幹線道路であり、当該区間は、二戸市へ分岐する主要地方道二戸戸戸線との交差点として、重要な役割を担っている。地域の物流だけでなく、久慈地方から新幹線二戸駅へのアクセス道路の一部であり、また近接する長興寺小学校の通学路などの生活道路でもある。

当該区間は、変則的な三叉路交差点であるうえ幅員狭小で、歩道が未整備であるため、交差点形状の改良及び十分な車道幅員と歩道設置により、幹線道路及び生活道路としての機能向上を図るものである。

当該地点は、岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳に登録された周知の遺跡である沖遺跡の隣接地に位置し、埋蔵文化財包蔵地の可能性があることから、当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、岩手県県北広域振興局二戸土木センターから岩手県教育委員会に対し、平成30年4月5日付二土セ第83号「埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)」により試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教育委員会は平成30年4月26日に試掘調査を実施し、事業予定地内に埋蔵文化財が確認されたことから、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成30年5月8日付教生第235号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により回答した。

また、平成30年5月14日の県教育委員会と九戸村教育委員会の協議により、当該地点は沖遺跡の一部として取り扱うこととした。

その結果を踏まえて当センターは岩手県教育委員会と協議を行い、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受諾事業とすることとした。これにより平成30年8月31日付けで県北広域振興局長と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、沖遺跡の発掘調査を実施することとなった。

(岩手県県北広域振興局二戸土木センター)



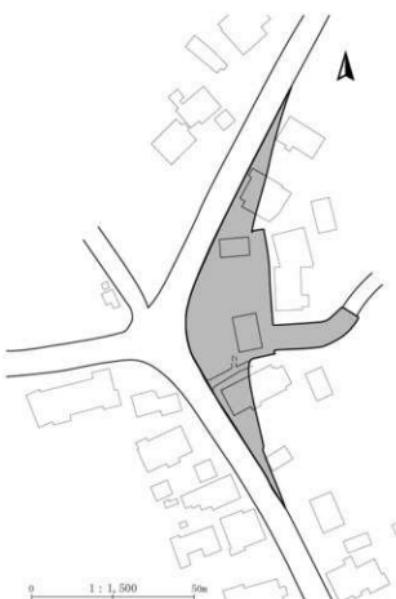
第1図 遺跡位置図

## 2 遺跡の位置と立地

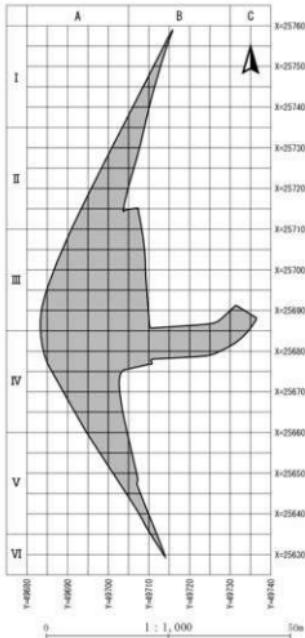
遺跡は九戸郡九戸村長興寺地内に所在し、IGRいわて銀河鉄道一戸駅から東方約10.5kmの距離にある。九戸村西部の折爪岳・小倉岳から延びる沖積段丘の先端部に位置し、瀬月内川西岸に形成された、標高269~270mの段丘上に立地する。遺跡の北側には瀬月内川の支流が流れる。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「伊保内」NK-54-18-11-2(八戸11号-2)の図幅に含まれ、40度13分47秒、東経141度25分2秒付近にあたる。

今回の調査区は瀬月内川とはほ並行して村の中央を走る国道340号線と、九戸村と二戸市を結ぶ県道24号線の交点付近に位置する。調査前は宅地、畠地、道路であった。周辺には縄文時代の遺跡が多く、本遺跡のような古代の遺跡は比較的少ない。

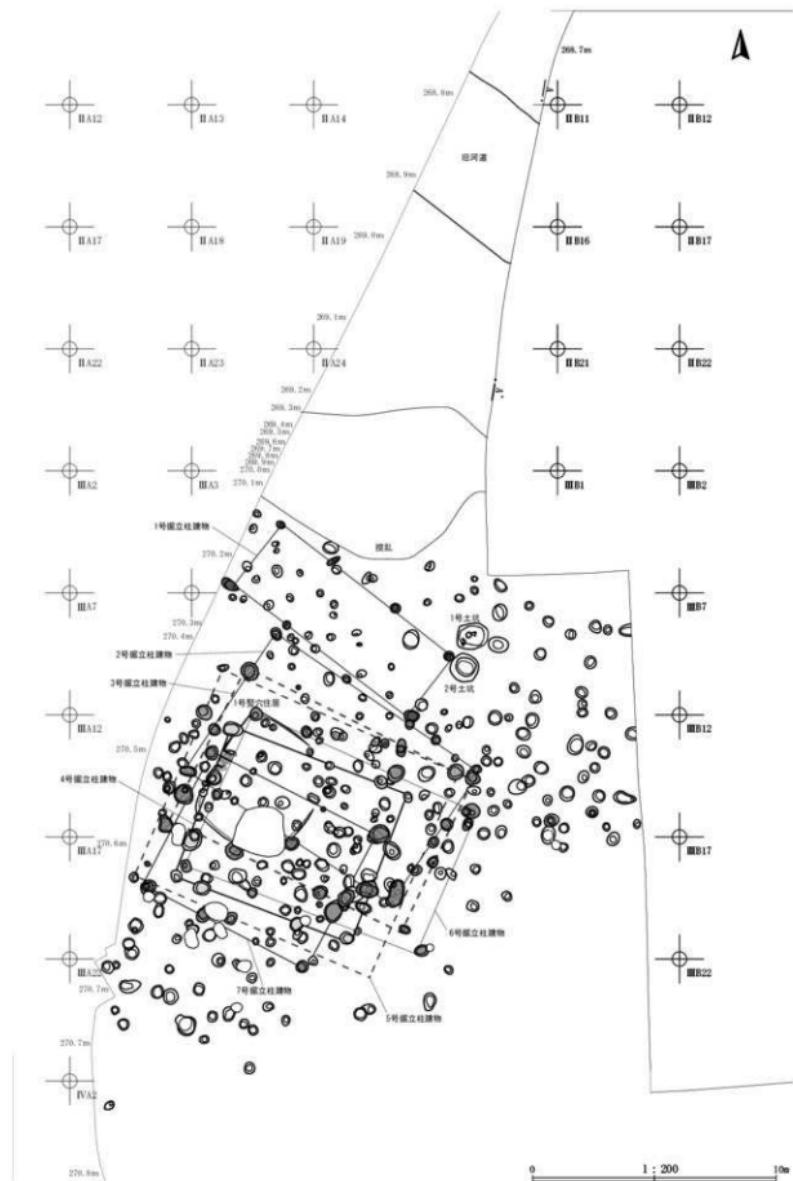
本調査区は、IV A13グリッド付近を頂点とし、三方向へ緩やかに標高を下げていく地形となっている。III A 3グリッドからIII A 5グリッドの北側に段丘の境が認められ、一段低くなっている。この面は現在水田として利用されている段丘面と同一と考えられる。北側のII A15グリッド付近には、旧河道(第7図断面参照)が確認された。また、IV A 2グリッドからIV A 5グリッドより南側は、現代の宅地や下水道、道路などによる擾乱が激しく、遺構は検出されなかった。そのため丘陵頂部の北側、III A 8~20グリッド、III B 6・11・16グリッド付近に遺構が集中している。



第2図 調査範囲



第3図 グリッド配置図



第4図 遺構配置図

### 3 基本層序

調査範囲内における基本層序はⅠ～Ⅲ層に大別される。各層の詳細は以下のとおりである。

Ⅰ層：褐色シルト（10YR4/6）表土・盛土層。層厚は20～70cmである。粘性なし、しまり強い。

Ⅱ層：黒褐色粘土質シルト（10YR3/2）層厚は10～20cmである。粘性やや強い、しまりやや強い。

Ⅲ層：にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）層厚は不明である。十和田南部火山灰を含む。粘性やや弱い、しまり強い。

### 4 調査の概要

遺構検出はⅢ層上面で行った。その結果、竪穴住居1棟、掘立柱建物7棟（1～7号）、土坑2基（1・2号）、柱穴状土坑311個、旧河道1条が確認された。

#### （1）遺構

##### 1号竪穴住居（第5図、写真図版2）

【位置・検出状況・重複関係】調査区中央部のⅢ A13、14グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出した。

2～4・6・7号掘立柱建物と重複し、いざれも本遺構より新しい。

【形状・規模】長辺約4.5m、短辺約3.9mの長方形を呈する。南側は擾乱を受け削平されている。また、東側の壁面は確認されなかった。

【埋土】上下2層に区分でき、黒褐色土を主体とする。自然堆積と考えられる。

【壁面・床】壁面はやや外傾しながら立ち上がる。北東側の壁面は残存部分が僅かであり、最も残存している部分の壁高は約10cmである。床面は北に向かって緩やかに傾斜する。貼床は確認されなかった。

【カマド】北西壁のはば中央に1基設置されており、袖部と燃焼部が残存している。軸線は北西方向であり、住居の軸線とはほぼ一致している。袖部は残存状態が悪いものの、白色粘土を貼り付けて構築していたことが確認できた。燃焼部は長径約43cmの不整円形をしており、厚さは約5cmである。壁面に向かってやや傾斜している。煙道、煙出しは確認できなかった。燃焼部の検出状況から削平されたと考えられる。

【柱穴】柱穴は3個確認された（P167、P178、P187）。それぞれ住居の四隅に位置している。近世の掘立柱建物に伴う柱穴状土坑が遺構内に多く存在するため、判別が難しいが、住居内の位置関係から判断した。

【遺物】土師器片1点が出土した（第5図1）。器種は甕で、確認できた体部の外面には細かいミガキが施されている。

【時期】出土した土師器から、8世紀代と推測される。

##### 1～7号掘立柱建物（第6図、写真図版3）

掘立柱建物は整理作業の段階で7棟を復元した。ここでは作業の都合上、掘立柱建物の概要をまとめて記述する。検出した柱穴状土坑311個のうち、掘立柱建物を構成するものは81個である。個別の記載は第5表のとおりである。

【位置】Ⅲ A3、4、8、9、12、13、14、15、17、18、19、20、23、24グリッドの範囲内にある。

【重複関係】1号→2号→3号→5号、6号→7号

【軸方向】N-55°-WからN-69°-Wの範囲であり、国道340号線にはほぼ直行する方向に建てられている。また、軸方向は等高線と概ね並行している。

【規模】梁間1~3間、桁行2~5間の範囲であり、桁行3間×梁間3間が主体である。

【遺物】陶器（9）、寛永通宝（16、23）、土師器などが柱穴状土坑から出土している。9は肥前産の碗であり、内外面に銅緑釉が施されている。17世紀後半から18世紀前半のものである。

【時期】出土した遺物から、およそ近世に属すると考えられる。

#### 1号土坑（第7図、写真図版2）

【位置・検出状況・重複関係】調査区中央部のⅢA10グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出した。

【形状・規模】平面形は楕円形を呈する。長辺約1.2m、深さ約28cmである。

【埋土】3層に区分でき、黒褐色土を主体とする。自然堆積とみられる。

【壁面・底面】壁面はやや外傾しながら立ち上がる。底面はやや傾くが概ね平坦である。

【遺物】出土していない。

【時期】不明である。

#### 2号土坑（第7図、写真図版3）

【位置・検出状況・重複関係】調査区中央のⅢA10グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出した。

【形状・規模】平面形は楕円形を呈する。長辺約1.2m、深さ約44cmである。

【埋土】5層に区分でき、黒色土を主体とする。自然堆積とみられる。

【壁面・床】壁面は直立気味に立ち上がり、開口部で外傾する。底面は概ね平坦である。

【遺物】出土していない。

【時期】不明である。

#### 柱穴状土坑（第6表）

柱穴状土坑は全部で311個検出し、そのうち掘立柱建物に伴わないものは230個である。平面形状は正円形、楕円形、不整円形があり、楕円形のものが多い。前述のとおり掘立柱建物は調査区中央部西側に分布しているが、調査区東側にも柱穴状土坑が多数存在する。そのため、東側の未調査部分を含め別に建物跡が存在し、居住域がさらに東へ広がっていた可能性がある。

#### 遺構外遺物

土師器（第8図、写真図版4）：土師器は2点掲載した。2は壺の体部である。外面は細かいミガキ、内面は黒色処理が施されている。3は壺の口縁部から体部である。1号堅穴住居を切る搅乱内から出土したものであることから、1号堅穴住居に帰属する可能性がある。外面は2と同様に細かいミガキ、内面は黒色処理が施されている。また、口縁部と体部の境に段を有するものである。

陶磁器（第8図）：陶器3点、磁器5点を掲載した。陶器は4~6が相馬産の碗である。磁器は全て肥前産であり、器種は7、8、11が碗、10が皿、12が瓶である。時期はいずれも18世紀代と考えられる。

銭貨（第9図、写真図版4）：寛永通宝12点、永楽通宝1点、不明銅錢1点を掲載した。14~17、19、22、23は古寛永であり、18、20、21は新寛永である。

石製品（第9図、写真図版4）：石臼1点を掲載した。

#### (4) 沖遺跡

##### 5まとめ

今回の調査で、本遺跡は奈良と近世の複合遺跡であることが明らかになった。堅穴住居は出土した土師器の様相から8世紀代に建てられたと考えられる。当該期の遺構は今回の調査区内では確認できなかったため、近隣に集落が形成されていた可能性がある。その後、18世紀代になると掘立柱建物が建てられるようになり、現代に至るまで居住域として利用されていたことが確認できた。

今回の調査では確認された遺構・遺物がともに少なかったものの、調査事例が少ない当該地域においては貴重な成果を得ることができた。依然として未解明な事象が多いことから、今後の調査に期待したい。

なお、沖遺跡平成30年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

第1表 土器観察表

No.	器種	部位	出土地点	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整
1	便器	体部～底部	S101	床面付近	—	[8.6]	7.0	外面：ヘラケズリ、ミガキ 外面：ヘラナデ
2	便器	体部	P281	埋土	—	[8.2]	—	外面：ミガキ 内面：ヘラナデ・黒色処理
3	便器	口縁～体部	機乱(S101側)	埋土	14.0	[5.9]	—	外面：ミガキ 内面：ヘラナデ・黒色処理

第2表 陶磁器観察表

No.	器種	部位	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	破付	釉薬	産地	年代	備考	
4	陶器	碗	口～底	表様	14.0	4.3	—	透明	相馬	18 c		
5	陶器	碗	口～底	表様	—	[3.6]	4.2	透明	相馬	18 c		
6	陶器	碗	口～底	機乱	[11.4]	5.2	[2]	鉄・透明	相馬	18 c		
7	磁器	碗	口～底	表様	—	[2.4]	3.7	透明	肥前	18 c	【屈】器?	
8	磁器	碗	口～底	機乱	7.0	[2.8]	—	草花文	透明	肥前		
9	陶器	瓶	口～底	P140	13.0	[3.2]	4.8	鋼緑	肥前	17 c 後～ 18 c	内面糊の日輪ハギ	
10	磁器	瓶	口～底	P271	—	[2.2]	7	草花文	透明	肥前	18 c	内面五弁花のみコシニヤク剤、内面蛇の目輪ハギ
11	磁器	瓶	口～底	表様	9.2	[4.5]	6	透明	肥前(放佐見)	18 c	高台蛇の日輪ハギ	
12	磁器	瓶	口～底	表様	—	[3.1]	5.8	透明	肥前		内面糊なし	

第3表 銭貨観察表

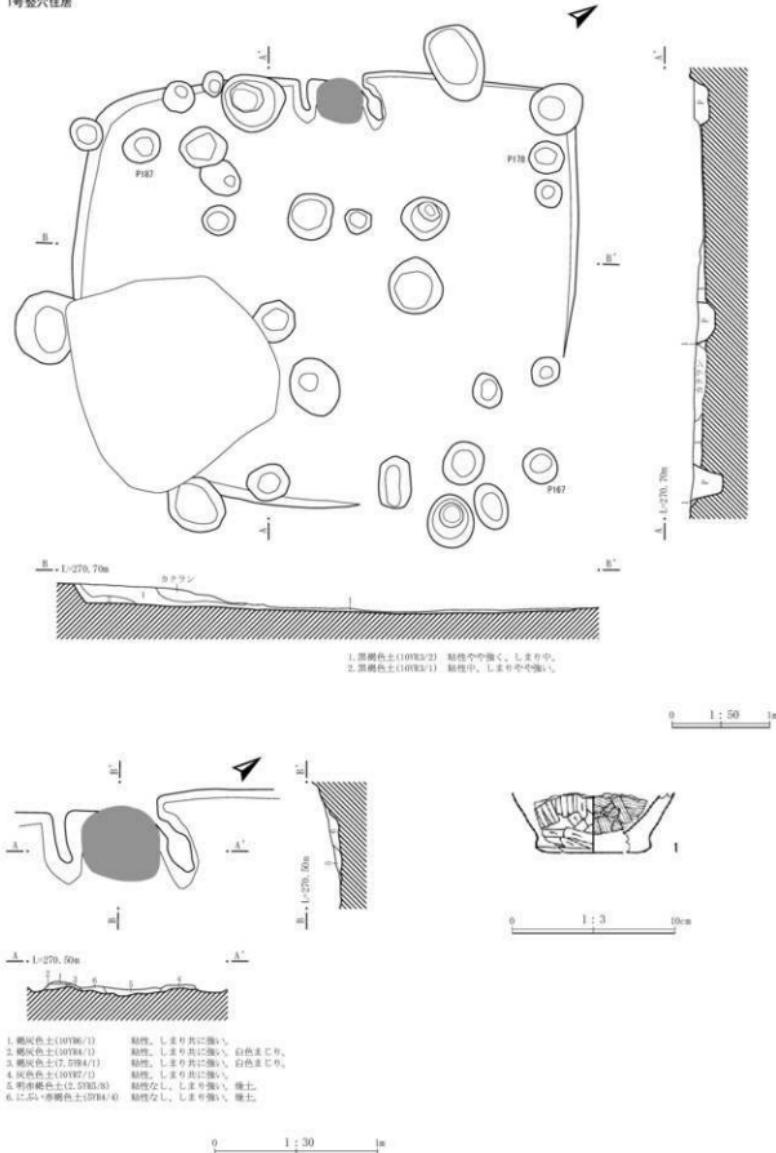
No.	器種	出土地点	層位	重積(g)	備考
13	永樂通宝	機乱	埋土	0.7	
14	寛永通宝	機乱	埋土	2.5	
15	寛永通宝	機出面	埋土	2.9	
16	寛永通宝	P231	埋土	1.9	
17	寛永通宝	P251	埋土	2.9	
18	寛永通宝	機出面	表土	2.4	
19	寛永通宝	P231	埋土	3.8	
20	寛永通宝	P231	埋土	3.0	文銘
21	寛永通宝	機乱	埋土	2.5	
22	寛永通宝	P231	埋土	3.0	
23	寛永通宝	P115	埋土	3.1	文銘
24	不明(編錢)	機乱	埋土	2.1	
25	寛永通宝	表様		6.0	2枚接着
26	寛永通宝	機出面	I層	1.7	

第4表 石製品観察表

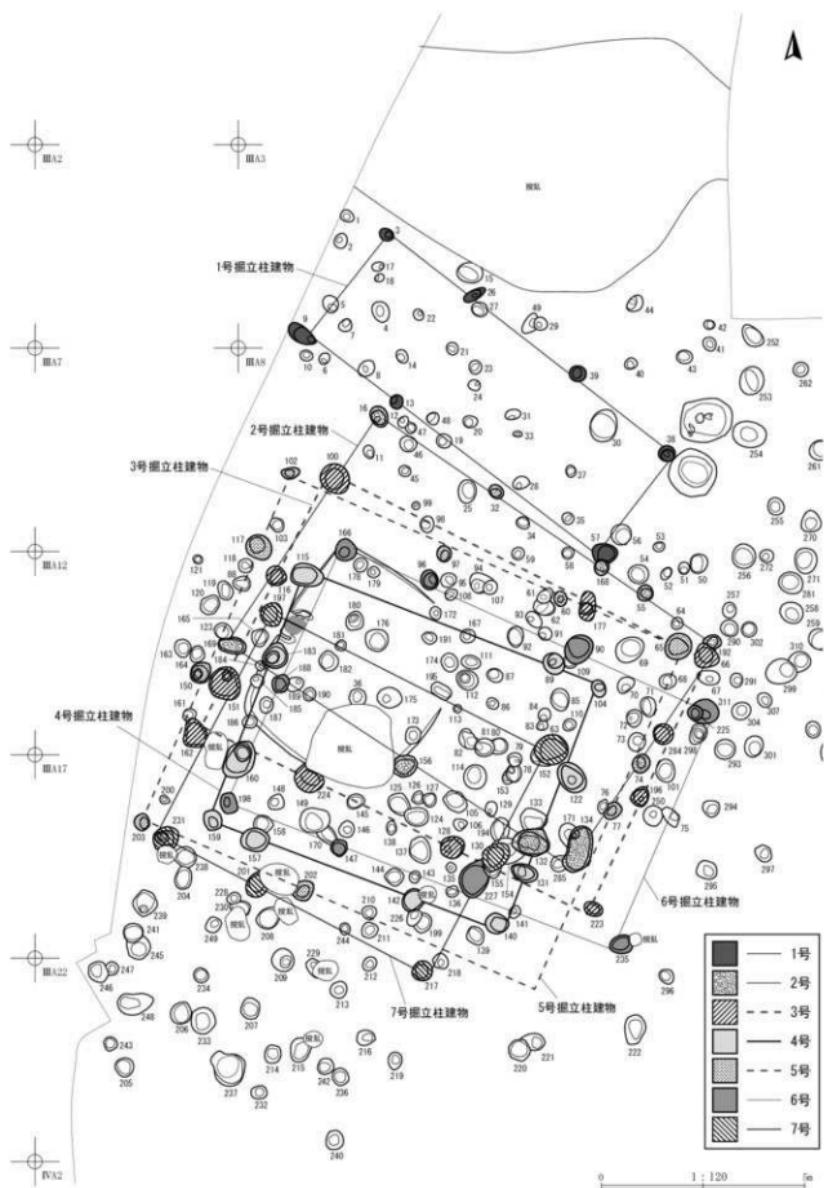
No.	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材料
27	石臼	機乱	[4.7]	[10.5]	[3.9]	225.8	安山岩

〔○〕残存値

## 1号竪穴住居



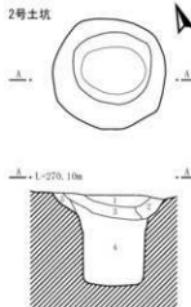
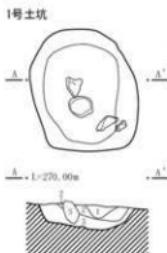
第5図 1号竪穴住居



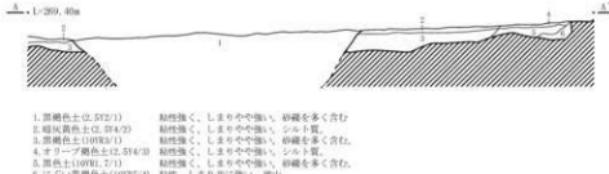
第6図 1~7号掘立柱建物

第5表 挖立柱建物一覧

遺構名	位置	構成ピット	軸向(度)	全長(尺)	柱間(尺)	梁間(尺)	全長(尺)	柱間(尺)	軸線方向
SB01	図A3, 4, 8, 9	3, 9, 13, 27, 28 38, 39, 57	北 南	3 北 29	9・10・10 9・12・8	東 西	9.5 10	9.5 10	N-55°-W
SB02	図A8, 9, 14, 15, 19, 29	16, 32, 46, 55, 74, 83, 129, 134, 156, 168, 169, 190, 192	北 南	6 北 33	3・9・10・4・7	東 西	22 22	12・10 22	N-57°-W
SB03	図A8, 12, 13, 14, 15, 19, 20	66, 98, 109, 116, 128, 145, 151, 162, 176, 177, 196, 223, 224, 283	北 南	2 北 35	9・15・10 10・5・8・12	東 西	23 23	7・6・10 9・10・4	N-63°-W
SB04	図A8, 13, 17, 18, 19	89, 104, 115, 122, 131, 140, 142, 157, 158, 165, 183	北 南	2 北 26	22・3・5 4・14・8	東 西	21 22	7・7・7 7・9・6	N-69°-W
SB05	図A8, 9, 12, 13, 14, 15, 17, 18, 19	60, 65, 71, 73, 77, 88, 97, 102, 104, 117, 123, 150, 161, 202, 203, 210	北 南	3 北 35	14・10・11 14・6・15	東 西	15 31	5・4・6・- 6・4・4・4・3・10	N-65°-W
SB06	図A13, 14, 15, 17, 18, 19, 20	75, 90, 96, 146, 166, 175, 188, 198, 227, 235, 311	北 南	3 北 33	7・13・13 9・11・13	東 西	21 21	9・12 12・9	N-50°-W
SB07	図A13 17 18 20 23 24	63, 181, 197, 201, 217, 221, 231, 244, 250	北 南	4 北 35	6・11・8・10 9・8・7・11	東 西	26 20	9・11 20	N-62°-W



旧河道



1. 黑褐色土(0W5/7)  
粘性やや強い。しまりやや強い。
2. 黄褐色土(0W2/2)  
粘性。しまりやや強い。
3. 黑色土(0W2/1)  
粘性。しまりやや強い。
4. 黑色土(0W5/1)  
粘性。しまりやや強い。
5. 黄褐色土(0W5/1)  
粘性。しまりやや強い。

0 1:50 1m

0 1:100 2m

第7図 1・2号土坑、旧河道

第6表 柱穴状土坑一覧

遺構名	位置	色調	長軸 (cm)	深さ (cm)	獨立柱 建物
P01	III A 3	黒褐色土	34.0	26.2	
P02	III A 3	黒褐色土	39.2	42.7	
P03	III A 3	黒褐色土	34.0	30.8	SB01
P04	III A 3	黒褐色土	49.0	11.8	
P05	III A 3	黒褐色土	42.4	21.4	
P06	III A 8	黒褐色土	29.0	11.5	
P07	III A 3	黒褐色土	35.9	36.7	
P08	III A 8	黒褐色土	42.6	25.4	
P09	III A 3	黒褐色土	77.7	31.9	SB01
P10	III A 8	黒褐色土	32.3	10.3	
P11	III A 8	黒褐色土	30.3	20.6	
P12	III A 8	黒褐色土	31.2	22.4	
P13	III A 8	黒褐色土	38.7	18.1	SB01
P14	III A 8	黒褐色土	38.9	23.8	
P15	III A 4	黒褐色土	69.0	25.2	
P16	III A 8	黒褐色土	56.9	38.8	SB02
P17	III A 3	黒褐色土	30.1	19.2	
P18	III A 3	黒褐色土	21.4	26.8	
P19	III A 9	黒褐色土	35.1	28.8	
P20	III A 9	黒褐色土	33.3	37.0	
P21	III A 4, 9	黒褐色土	32.4	21.4	
P22	III A 3	黒褐色土	43.1	55.5	
P23	III A 9	黒褐色土	30.3	45.8	
P24	III A 9	黒褐色土	28.1	37.9	
P25	III A 9	黒褐色土	54.8	22.9	
P26	III A 4	黒褐色土	57.2	65.5	
P27	III A 4	黒褐色土	42.5	32.2	SB01
P28	III A 9	黒褐色土	37.0	27.3	SB01
P29	III A 4	黒褐色土	33.3	42.6	
P30	III A 9	黒褐色土	86.8	9.4	
P31	III A 9	黒褐色土	37.8	14.5	
P32	III A 9	黒褐色土	32.4	24.2	SB02
P33	III A 9	黒褐色土	21.0	8.7	
P34	III A 9	黒褐色土	27.1	8.2	
P35	III A 9	黒褐色土	29.7	18.9	
P36	III A 13	黒褐色土	41.1	12.2	
P37	III A 9	黒褐色土	30.9	12.9	
P38	III A 10	黒褐色土	38.9	40.1	
P39	III A 9	黒褐色土	39.9	20.1	SB01
P40	III A 9	黒褐色土	27.9	15.6	
P41	III A 5	黒褐色土	31.8	21.0	
P42	III A 5	黒褐色土	25.0	11.7	
P43	III A 5	黒褐色土	38.6	8.7	
P44	III A 4	黒褐色土	44.7	53.4	
P45	III A 8	黒褐色土	28.8	13.0	
P46	III A 8	黒褐色土	43.7	31.4	SB02
P47	III A 8	黒褐色土	26.3	22.9	
P48	III A 8	黒褐色土	33.6	40.7	
P49	III A 4	黒褐色土	32.5	35.5	
P50	III A 15	黒褐色土	51.1	29.8	
P51	III A 15	黒褐色土	32.6	17.1	
P52	III A 15	黒褐色土	35.7	5.1	
P53	III A 10	黒褐色土	32.0	14.6	
P54	III A 14, 15	黒褐色土	49.9	23.4	
P55	III A 14, 15	黒褐色土	44.2	25.6	SB02
P56	III A 9	黒褐色土	52.9	14.3	
P57	III A 9, 14	黒褐色土	67.5	14.3	SB01
P58	III A 9, 14	黒褐色土	31.1	13.7	
P59	III A 9, 14	黒褐色土	31.4	22.2	
P60	III A 14	黒褐色土	20.4	21.5	SB05
P61	III A 14	黒褐色土	38.8	15.4	
P62	III A 14	黒褐色土	56.9	25.3	
P63	III A 14, 19	黒褐色土	82.4	35.0	SB07
P64	III A 15	黒褐色土	30.2	19.1	
P65	III A 15	黒褐色土	65.9	37.9	SB05

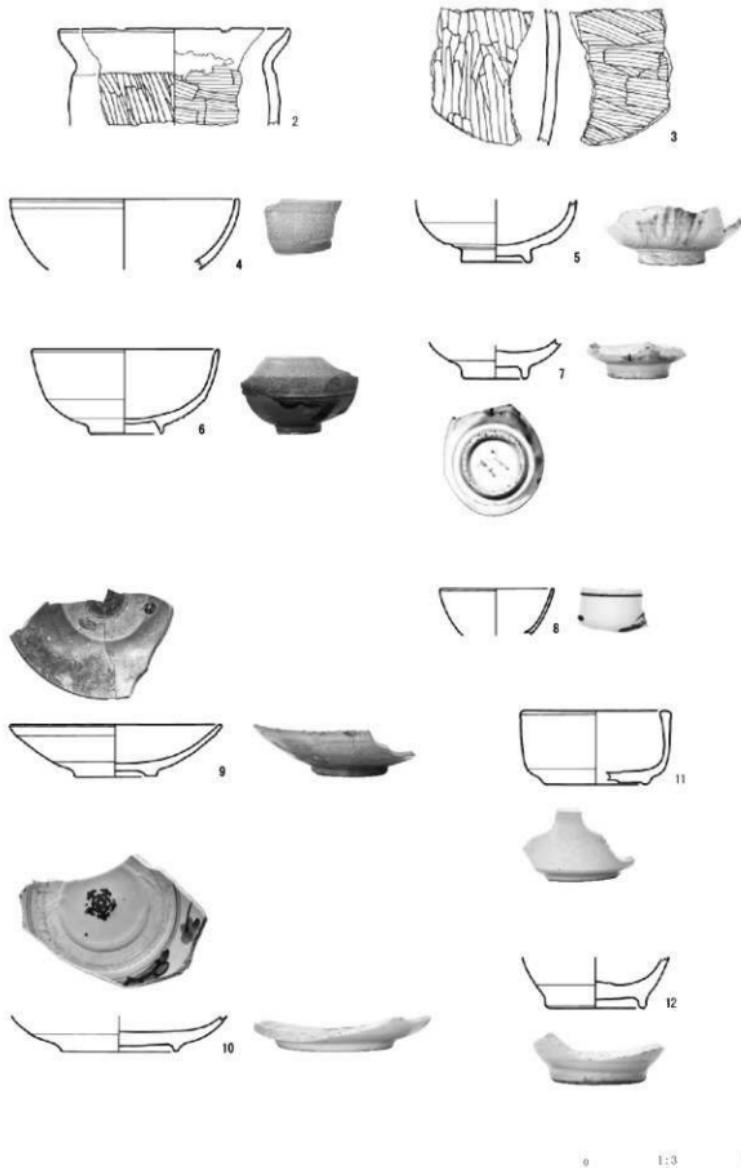
遺構名	位置	色調	長軸 (cm)	深さ (cm)	獨立柱 建物
P66	III A 15	黒褐色土	61.7	54.3	SB03
P67	III A 15	黒褐色土	31.7	39.9	
P68	III A 15	黒褐色土	46.2	26.2	
P69	III A 14	褐灰色土	73.4	52.4	
P70	III A 14	黒褐色土	45.9	4.5	
P71	III A 14, 15	黒褐色土	54.4	44.4	SB05
P72	III A 14	黒褐色土	42.0	31.2	
P73	III A 14, 15	黒褐色土	47.7	43.4	SB05
P74	III A 19, 20	黒褐色土	48.2	47.4	SB02
P75	III A 20	黒褐色土	54.6	55.4	SB06
P76	III A 19	黒褐色土	37.2	71.0	
P77	III A 19	黒褐色土	47.7	19.9	SB05
P78	III A 19	黒褐色土	35.4	16.4	
P79	III A 14, 19	黒褐色土	38.6	26.9	
P80	III A 14	黒褐色土	47.9	39.2	
P81	III A 14	黒褐色土	45.5	26.6	
P82	III A 14	黒褐色土	44.4	47.9	
P83	III A 14	黒褐色土	28.3	12.7	
P84	III A 14	黒褐色土	34.2	16.4	
P85	III A 14	黒褐色土	57.7	29.1	SB02
P86	III A 14	褐灰色土	33.1	50.8	
P87	III A 14	褐灰色土	41.0	20.9	
P88	III A 12, 13	黒褐色土	47.3	27.2	SB05
P89	III A 14	黒褐色土	60.7	31.8	SB04
P90	III A 14	黒褐色土	70.6	22.1	SB06
P91	III A 14	黒褐色土	58.1	48.1	
P92	III A 14	黒褐色土	33.4	25.0	
P93	III A 14	黒褐色土	46.2	22.8	
P94	III A 14	黒褐色土	75.6	37.3	
P95	III A 14	黒褐色土	40.6	38.0	
P96	III A 13	黒褐色土	51.4	24.1	SB06
P97	III A 8, 9, 13, 14	黒褐色土	39.2	15.8	SB05
P98	III A 8	黒褐色土	38.7	38.1	SB03
P99	III A 8	黒褐色土	19.2	20.9	
P100	III A 8	黒褐色土	77.6	29.2	SB03
P101	III A 20	黒褐色土	54.1	17.1	
P102	III A 8	黒褐色土	10.2	44.9	SB05
P103	III A 8	黒褐色土	38.5	27.6	
P104	III A 14	黒褐色土	43.2	39.6	SB04
P105	III A 19	黒褐色土	67.0	16.4	
P106	III A 19	黒褐色土	34.1	18.0	
P107	III A 14	黒褐色土	56.0	30.0	
P108	III A 13	黒褐色土	34.3	31.9	
P109	III A 14	黒褐色土	35.5	12.9	
P110	III A 14	黒褐色土	26.8	22.8	
P111	III A 14	黒褐色土	50.4	12.1	
P112	III A 14	黒褐色土	31.1	55.0	
P113	III A 14	黒褐色土	13.3	19.6	
P114	III A 19	黒褐色土	61.4	25.7	
P115	III A 13	黒褐色土	86.3	30.9	SB04
P116	III A 13	黒褐色土	48.1	24.0	SB03
P117	III A 8, 13	黒褐色土	66.6	43.2	SB05
P118	III A 13	褐灰色土	32.6	24.7	
P119	III A 12	黒褐色土	46.3	33.4	
P120	III A 12	黒褐色土	52.0	24.9	
P121	III A 12	黒褐色土	24.9	17.1	
P122	III A 19	黒褐色土	81.5	59.8	SB04
P123	III A 12	暗褐色土	46.4	26.5	SB05
P124	III A 18	黒褐色土	57.9	21.9	
P125	III A 18	黒褐色土	58.3	43.0	
P126	III A 18	黒褐色土	20.9	32.5	
P127	III A 18	黒褐色土	35.8	19.0	
P128	III A 18, 19	黒褐色土	62.9	48.8	SB03
P129	III A 19	黒褐色土	36.6	35.3	SB02
P130	III A 19	黒褐色土	44.3	78.5	

遺構名	位置	色調	長軸 (cm)	深さ (cm)	掘立柱 建物
P131	III A19	黒褐色土	70.4	62.5	SB04
P132	III A19	黒褐色土	94.2	52.2	
P133	III A19	黒褐色土	65.4	75.2	
P134	III A19	黒褐色土	117.0	44.6	SB02
P135	III A19	黒褐色土	25.6	48.4	
P136	III A19	黒褐色土	33.0	17.7	
P137	III A18	黒褐色土	43.9	37.6	
P138	III A18	黒褐色土	31.6	27.8	
P139	III A19	黒褐色土	49.4	37.8	
P140	III A19	黒褐色土	52.1	32.4	SB04
P141	III A19	黒褐色土	30.6	58.5	
P142	III A18	黒褐色土	43.9	37.6	SB04
P143	III A18	黒褐色土	29.6	22.0	
P144	III A18	黒褐色土	45.2	46.4	
P145	III A18	黒褐色土	43.6	15.9	SB03
P146	III A18	黒褐色土	40.7	42.2	SB06
P147	III A18	黒褐色土	40.8	24.9	
P148	III A18	黒褐色土	41.8	42.3	
P149	III A18	黒褐色土	71.8	43.9	
P150	III A12	褐灰色土	58.7	54.3	SB05
P151	III A12	黒褐色土	80.9	35.3	SB03
P152	III A14, 19	褐灰色土	15.3	31.4	
P153	III A19	褐灰色土	14.7	26.4	
P154	III A19	褐灰色土	63.1	45.3	
P155	III A19	褐灰色土	83.3	40.6	
P156	III A18	褐灰色土	43.1	12.3	SB02
P157	III A18	褐灰色土	70.2	35.0	SB04
P158	III A18	褐灰色土	33.8	34.1	
P159	III A17	褐灰色土	53.1	47.6	SB04
P160	III A12, 13, 17, 18	褐灰色土	99.8	54.9	SB04
P161	III A12	褐灰色土	33.9	18.1	SB05
P162	III A12	黑色土	67.9	31.4	SB03
P163	III A12	黑色土	42.9	26.2	
P164	III A12	褐灰色土	39.9	22.5	
P165	III A13	黑色土	46.7	21.5	
P166	III A8, III A13	黑色土	57.4	49.7	SB06
P167	III A14	黑色土	25.3	32.4	
P168	III A14	褐灰色土	12.3	41.9	
P169	III A12, III A13	黑色土	69.1	26.4	SB02
P170	III A18	黒褐色土	33.6	18.9	
P171	III A19	黒褐色土	26.1	30.3	
P172	III A13	黑色土	33.3	16.1	
P173	III A13	褐灰色土	45.2	47.7	
P174	III A13, 14	黑色土	47.3	35.3	
P175	III A13	褐灰色土	61.4	25.7	SB06
P176	III A13	褐灰色土	57.8	16.1	
P177	III A14	褐灰色土	41.1	12.2	SB03
P178	III A13	黒褐色土	35.5	12.0	
P179	III A13	黑色土	26.3	24.0	
P180	III A13	黒褐色土	48.5	30.1	
P181	III A13	褐灰色土	26.9	9.8	SB07
P182	III A13	褐灰色土	49.7	9.4	
P183	III A13	褐灰色土	64.1	43.4	SB04
P184	III A13	黑色土	25.4	15.5	
P185	III A13	黑色土	31.4	33.0	
P186	III A13	黑色土	33.0	24.7	
P187	III A13	黒褐色土	33.7	8.5	
P188	III A13	黒褐色土	48.6	12.5	SB06
P189	III A13	暗褐色土	33.6	38.3	
P190	III A13	褐灰色土	35.8	19.3	SB02
P191	III A13	黒褐色土	35.3	4.9	
P192	III A15	褐灰色土	47.7	66.8	SB02
P193	III A15	黒褐色土	50.6	55.3	
P194	III A19	黒褐色土	50.7	40.4	
P195	III A13, 14	黑色土	54.3	10.3	
P196	III A19, 20	黒褐色土	50.9	66.8	SB03
P197	III A13	黒褐色土	57.3	16.7	SB07
P198	III A17	黒褐色土	48.5	37.3	SB06
P199	III A18	黒褐色土	48.0	33.2	
P200	III A17	黒褐色土	55.3	51.2	
P201	III A18	黒褐色土	42.5	30.9	SB07
P202	III A18	黒褐色土	42.4	43.2	SB05
P203	III A17	黒褐色土	39.2	34.1	SB05
P204	III A17	黒褐色土	55.1	20.1	
P205	III A22	黒褐色土	44.4	17.3	
P206	III A22	黒褐色土	52.9	20.0	
P207	III A23	黒褐色土	53.2	36.2	
P208	III A18	黒褐色土	50.0	49.2	
P209	III A18, 23	黒褐色土	53.6	27.5	
P210	III A18	黒褐色土	33.9	18.5	SB05
P211	III A18	黒褐色土	40.6	39.6	
P212	III A18, 23	黒褐色土	38.2	21.3	
P213	III A23	黒褐色土	42.6	35.3	
P214	III A23	黒褐色土	45.3	47.4	
P215	III A23	黒褐色土	49.8	31.7	
P216	III A23	黒褐色土	45.6	51.2	
P217	III A23	黒褐色土	51.0	24.5	SB07
P218	III A18, 19, 23, 24	黒褐色土	41.7	28.9	
P219	III A23	黒褐色土	42.6	33.4	
P220	III A24	黒褐色土	53.2	24.7	
P221	III A24	黒褐色土	37.1	23.3	SB07
P222	III A24	黒褐色土	70.8	63.4	
P223	III A19	黒褐色土	46.2	18.6	SB03
P224	III A18	黒褐色土	73.5	48.9	SB03
P225	III A15	褐灰色土	40.8	76.0	
P226	III A18	褐灰色土	41.3	38.3	
P227	III A19	褐灰色土	83.3	43.2	SB06
P228	III A17, 18	褐灰色土	33.4	28.8	
P229	III A23	黒褐色土	20.3	41.1	
P230	III A17, 18	黒褐色土	20.7	22.7	
P231	III A17	褐灰色土	52.5	43.1	SB07
P232	III A23	褐灰色土	21.3	17.6	
P233	III A22	褐灰色土	66.5	35.1	
P234	III A22	褐灰色土	39.1	34.2	
P235	III A19	褐灰色土	50.8	42.9	SB06
P236	III A23	褐灰色土	91.2	50.2	
P237	III A22, 23	褐灰色土	50.3	38.9	
P238	III A17	黒褐色土	41.5	44.9	
P239	III A17	褐灰色土	66.2	41.5	
P240	III A23	黒褐色土	49.4	22.6	
P241	III A17	褐灰色土	47.1	40.7	
P242	III A23	褐灰色土	37.2	37.9	
P243	III A22	黒褐色土	37.7	23.9	
P244	III A18	黒褐色土	28.8	12.1	SB07
P245	III A17	黒褐色土	57.5	49.4	
P246	III A22	黒褐色土	53.2	37.4	
P247	III A22	黒褐色土	26.1	42.6	
P248	III A22	褐灰色土	87.8	51.2	
P249	III A17	黒褐色土	41.9	55.3	
P250	III A20	黒褐色土	44.1	41.0	SB07
P251	IV A 2	暗褐色土	44.1	41.0	
P252	III A 5	暗褐色土	63.2	22.1	
P253	III A 10	暗褐色土	71.3	56.5	
P254	III A 10	黒色土	76.9	61.6	
P255	III A 10	黒褐色土	44.4	31.2	
P256	III A 10, 15	黒褐色土	40.5	25.0	
P257	III A 15	黒色土	57.3	24.9	
P258	III A 15	黒褐色土	43.6	24.4	
P259	III A 15	黒褐色土	61.7	20.5	
P260	III A 15	黒褐色土	46.6	38.9	

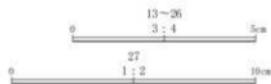
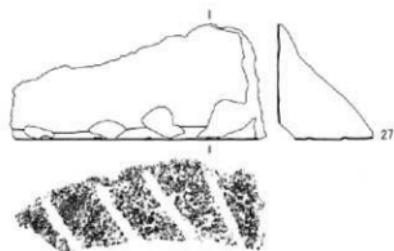
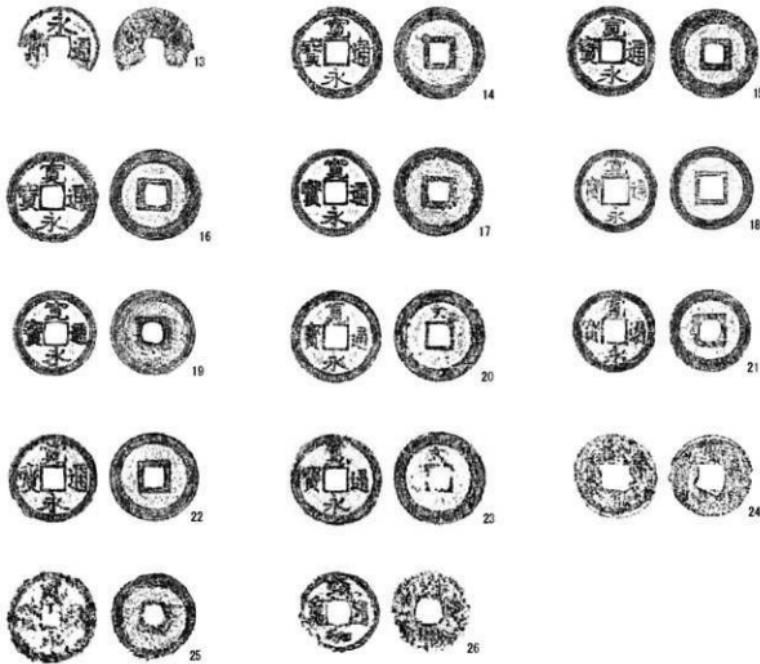
## (4) 沖遺跡

遺構名	位置	色調	長軸 (cm)	深さ (cm)	掘立柱 建物
P261	III A10	黒褐色土	47.9	57.9	
P262	III A10	暗褐色土	39.8	18.3	
P263	III A5	暗褐色土	46.7	25.9	
P264	III B6	暗褐色土	43.1	27.2	
P265	III B6	黒褐色土	51.1	39.8	
P266	III B6	暗褐色土	39.5	35.0	
P267	III B6	黒褐色土	51.8	45.4	
P268	III B6	黒褐色土	53.5	22.7	
P269	III B6	黒褐色土	42.2	35.3	
P270	III A10	黒褐色土	56.5	36.4	
P271	III A10, 15	暗褐色土	61.9	25.8	
P272	III A10, 15	黑色土	32.6	30.9	
P273	III B11	褐色土	79.7	48.2	
P274	III B11	暗褐色土	45.4	31.3	
P275	III B6, 11	黑色土	53.2	49.3	
P276	III B11	黑色土	41.3	41.5	
P277	III B11	黑色土	51.5	39.7	
P278	III B11	黑色土	47.1	20.3	
P279	III B11	暗褐色土	52.7	50.9	
P280	III B11	黒褐色土	92.4	31.8	
P281	III A15	黑色土	58.1	25.7	
P282	III B11	黒褐色土	49.4	35.1	
P283	III B11	黒褐色土	40.3	37.5	SB03
P284	III A15	褐色土	54.4	44.4	
P285	III A19	褐色土	29.0	30.5	
P286	III B6	黒褐色土	54.0	20.2	

遺構名	位置	色調	長軸 (cm)	深さ (cm)	掘立柱 建物
P287	III B11	黒褐色土	34.5	12.5	
P288	III B11, 16	黒褐色土	59.4	39.4	
P289	III B11	褐色土	63.1	48.0	
P290	III A15	黒褐色土	43.3	25.3	
P291	III A15	黒褐色土	32.9	29.9	
P292	III B11	黒褐色土	44.8	24.7	
P293	III A15, 20	黒褐色土	56.8	21.7	
P294	III A20	黒褐色土	44.5	35.3	
P295	III A20	黒褐色土	49.7	58.2	
P296	III A25	黒褐色土	38.8	43.5	
P297	III A20	褐色土	45.1	13.2	
P298	III A15	褐色土	48.4	31.5	
P299	III A15	褐色土	67.2	57.0	
P300	III B16	黒褐色土	42.9	20.0	
P301	III A15, 20	黒褐色土	53.8	28.8	
P302	III A15	黒褐色土	37.9	14.8	
P303	III A15	黒褐色土	37.0	14.1	
P304	III A15	黑色土	46.6	41.5	
P305	III A11	黒褐色土	49.1	28.3	
P306	III A15	黑色土	40.9	31.6	
P307	III A15	黒褐色土	35.5	22.5	
P308	III A15, 20	黒褐色土	66.3	16.5	
P309	III A15, III B11	黒褐色土	59.6	27.6	
P310	III A15	黑色土	47.5	27.3	
P311	III A15	褐色土	36.4	54.5	SB06



第8図 遺構外出土遺物（1）



第9図 遺構外出土遺物 (2)



遺跡遠景



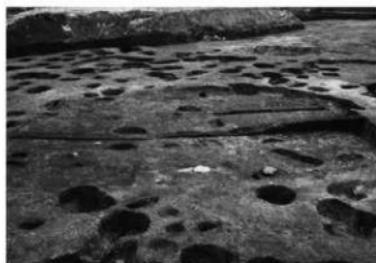
遺跡全景

写真図版 1 遺跡遠景・全景

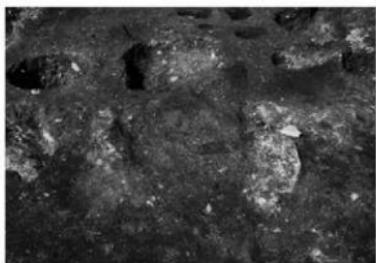
(4) 沖遺跡



1号竪穴住居 平面



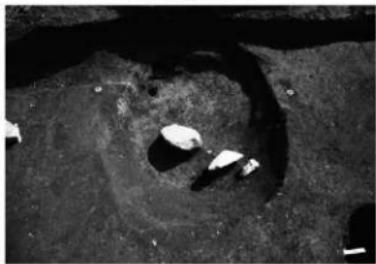
1号竪穴住居 断面



1号竪穴住居 カマド



1号土坑 断面

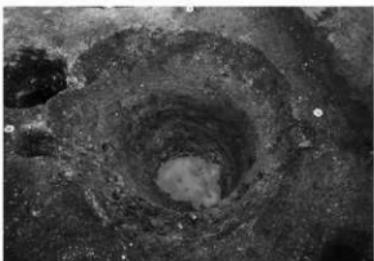


1号土坑 平面

写真図版2 1号竪穴住居、1号土坑



2号土坑 断面



2号土坑 平面



柱穴状土坑 平面

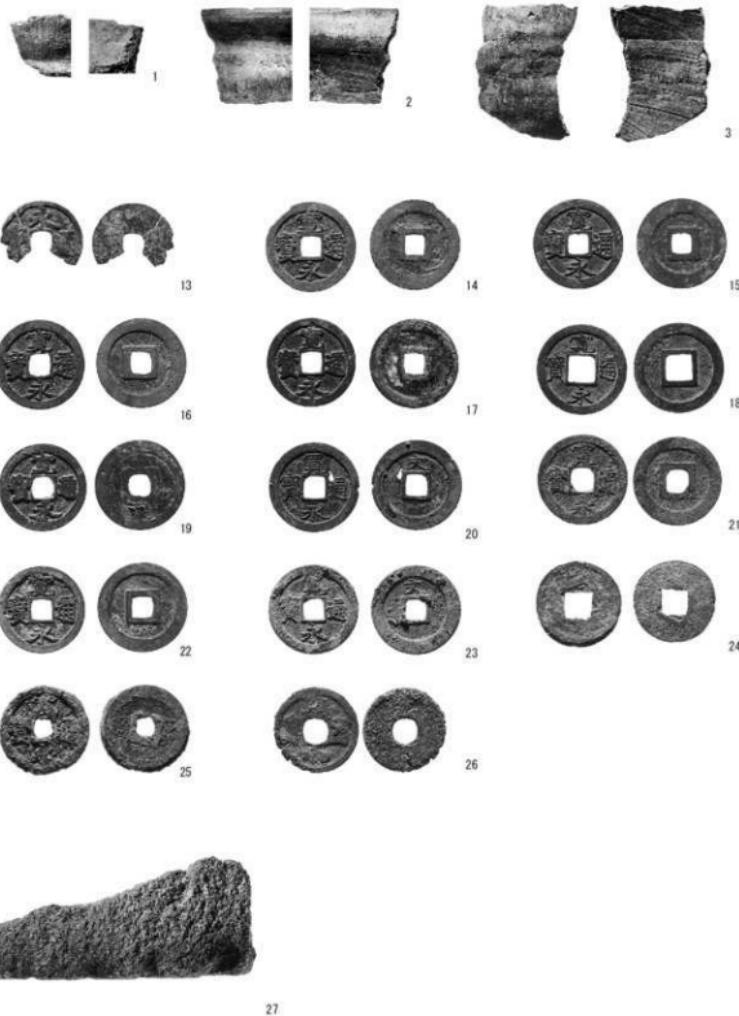


作業風景



作業風景

写真図版 3 2号土坑、作業風景



写真図版4 出土遺物

## (5) 森の越遺跡第36次

所 在 地	下閉伊郡岩泉町岩泉字三本松26-1	遺跡コード・略号	KG50-1375・MK-18
委 託 者	岩泉町復興課	調査対象面積	300m <sup>2</sup>
事 業 名	岩泉町災害公営住宅整備事業	調査終了面積	300m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成30年5月1日～5月31日	調査担当者	福島正和・川村英

## 1 調査に至る経過

平成29年6月、岩泉町役場復興課から平成28年台風10号豪雨災害に係る災害公営住宅整備事業の事業計画が提示され、事業予定地が町内複数の遺跡内にあったことから、岩手県教育委員会、岩泉町教育委員会、岩泉町役場復興課の3者で協議を行った。

災害公営住宅整備事業は、平成28年台風10号豪雨災害にて被害を受けた住民の生活再建を第一に、社会生活基盤の復旧に取り組むため、町内で災害公営住宅66戸整備を予定しているものであり、そのうち三本松東地区には15戸を整備する事業である。

協議の結果、該当する箇所については試掘調査を実施することとし、三本松東地区についても森の越遺跡の範囲内にあったことから、試掘調査を実施することとした。調査については復興課から町教育委員会に依頼し、人的不足からさらに県教育委員会に協力依頼したものである。

平成29年10月11日～10月13日にわたり試掘調査を行い、2本のトレンチから土坑と思われる土色の変化が確認され、縄文時代の土器片も少量出土した。その結果を受け、遺構が確認された事業予定地の一部が発掘調査を必要とする箇所となったことから、関係者で協議を行い、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団に委託することとし、調査は5月に着手してもらうこととして調整を行った。

平成30年4月27日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結するに至った。

(岩泉町復興課)



第1図 遺跡の位置

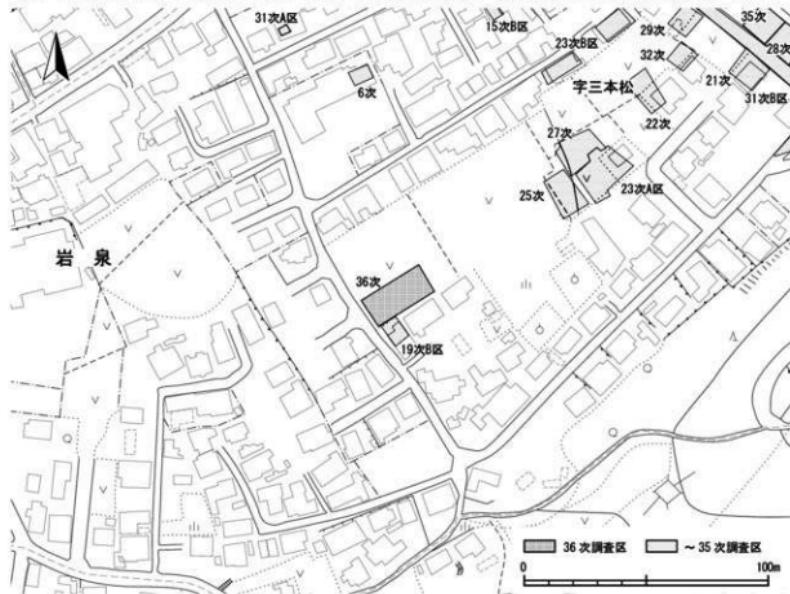
## 2 遺跡の立地と環境

森の越遺跡は、岩手県北東部に位置する岩泉町の中心部に所在する。岩泉町は太平洋に面する東側を除き、大半が山林でまれ、広大な町域は約1,000km<sup>2</sup>に及ぶ。町内には多くの洞穴遺跡が確認されており、地質学的な特性と考古学的な遺跡との関係が注目される地域である。遺跡の北には、日本三大鍾乳洞の一つとして知られる龍泉洞が開口している宇霧羅山がそびえ、遺跡が立地する河岸段丘は小本川とその支流である清水川によって形成されている。今回の調査区は調査前に畠地として利用されており、調査前の現況地盤は平坦で標高約107mである。調査区周辺は宅地化されている。

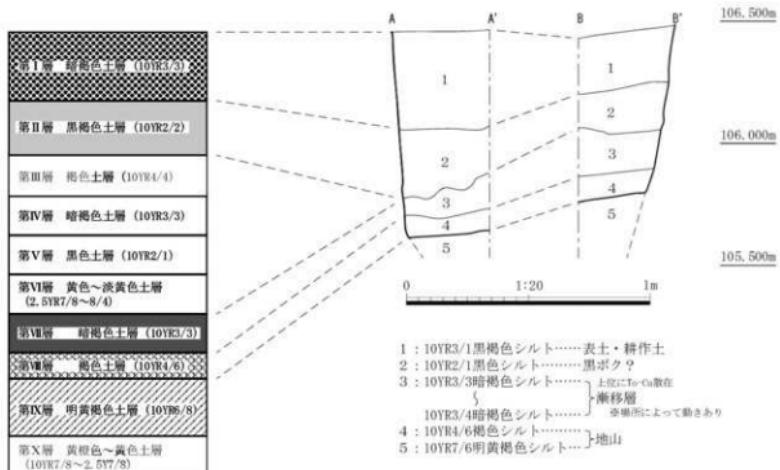
### 3 基本層序

森の越遺跡は岩泉町教育委員会によって過去35次の調査がなされており、地点はそれぞれ異なるものの遺跡内の基本的な層序については一貫して通有の区分がなされている（第3図）。この区分によると第I層から第X層と層名が付与されており、第I層が表土や近現代の耕作土、第II～V層が遺物包含層、第VI層は十和田中振火山灰の堆積層である。第V層より下位の面ではそれぞれ遺構が構築されているようであるが、最下層の第X層では遺構が構築されていない地山とされている。

今回の第36次発掘調査地点での層序を既存の区分に比定すると、第III～VI層が確認されず、第I層、第II層、第VII～IX層を確認した。第I層は大半が耕作土で構成されている。第II層は極少量の遺物が出土したが、礫の混入は認められない点で他の調査地点とは異なる。過去の調査で第III～VI層とされた遺物包含層が認められないので、今次調査で遺物出土量が少なかったものと考えられる。今次調査では第VII層上面で遺構を検出し、この面での遺構の調査を終えた後に、第VIII層上面での最終確認の検出作業をおこなった。結果として、第VIII層上面で新たに検出された遺構は、本来第VII層上面で検出されるべきものであることを確認した。なお、第VI層とされている火山灰層は層状にみられず、第II層



第2図 第36次調査区の位置



第3図 遺跡の基本層序と第36次調査の基本層序

および第Ⅶ層にわずかに混入が認められたのみである。特に第Ⅶ層中の火山灰は植物の擾乱や根跡などに混入したものである可能性が高い。

#### 4 調査成果

##### (1) 検出遺構

###### 掘立柱建物1（第5図、写真図版4・5）

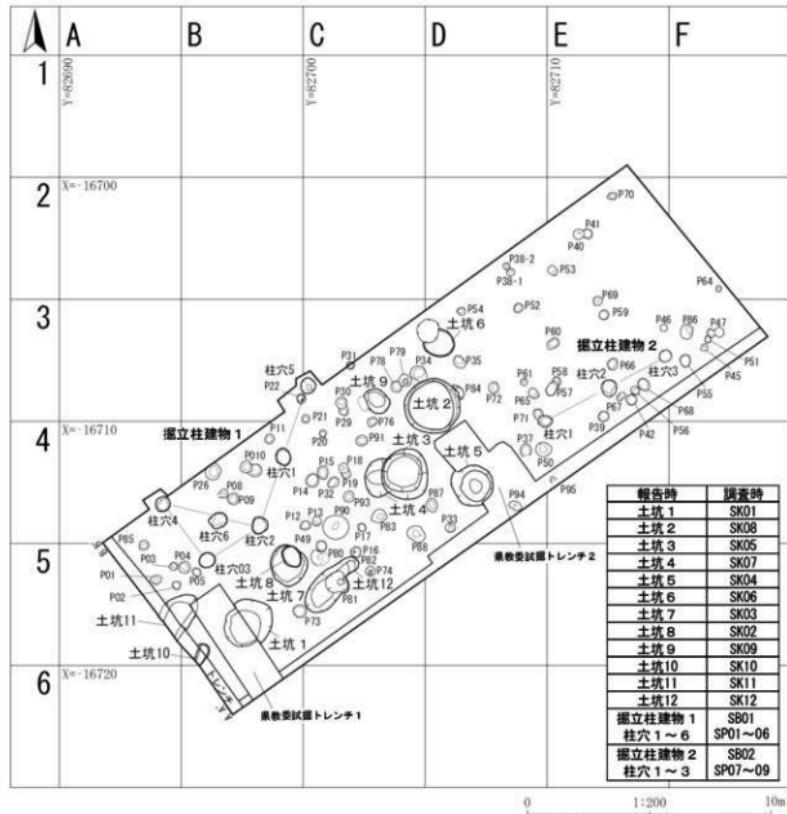
調査区北西、今次調査区端に位置する。6個の柱穴（掘立柱建物1柱穴1～6）から構成されており、各柱穴とも第Ⅶ層上面で検出した。その他の構成柱穴が調査範囲外に存在する可能性が考えられるため建物全体の規模および形態は不明であるが、建物の主軸方向は南北であり、柱配置から推定される平面形態は、柱配置から6角形（いわゆる亀甲形）を呈すると考えられる。ただし、北辺の大部分は調査範囲外に該当するため全容不明である。調査範囲内で確認できた2間の桁行は、柱穴2・5柱痕跡、芯々間5.6m、2間の梁行は柱穴2・4の柱痕跡芯々間3.8mである。建物の機能および性格は不明であるが、遺構の特徴や出土遺物などから縄文時代中期であると推定される。

###### 掘立柱建物2（第6図、写真図版5）

調査区南東側、今次調査区端に位置する。共通の特徴を有する3個の柱穴から構成されている。柱穴は、いずれも第Ⅶ層上面で検出した。これら以外の構成柱穴は調査範囲外に存在するとみられ、建物全体の規模および形態は不明である。3個の柱穴列は東西方向に並び、柱穴1・3の芯々間で5.3mである。詳細な機能・時期等不明であるが、縄文時代の建物である可能性が考えられる。

###### 土坑1（第7図、写真図版5）

調査区南西隅に位置し、平成29年度岩手県教育委員会による事前の試掘トレンチ1で西側約半分が確認されていた遺構である。第Ⅳ層上面で黒～黒褐色の円形プランを検出した。平面形態は円形で、開口部の直径1.8mである。深さは51cmで、底面は小規模な凹凸が認められるものの概ね平坦である。壁は底面から丸みをもって立ち上がり、上方に向けて外側にやや開く。埋土は黒褐色シルトを主体と



第4図 第36次調査区全体平面図

しているが、底面付近は褐色シルトが水平に堆積している。出土遺物が無く、時期を特定できないが、縄文時代の貯蔵穴であると考えられる。

#### 土坑 2 (第7図、写真図版6)

調査区中央に位置し、直接的な切り合いは認められないが、土坑3と隣接する。検出面は第IV層上面である。検出状況は、第IV層に3重の土色変化を呈する円形プランを確認した。この土色は、土坑外縁から中心部に向かう均等に黒褐色、褐色、黒色と変化しており、埋没過程を示す状況であると考えた。この状況は隣接する土坑3とも共通する。規模は、開口部直径2.25m、底面直径2.04m、深さ98.5cmである。底面は平坦で、壁は下端部がわずかに外方に張り出し、上方は外方に開くいわゆるプラスコ形の土坑である。埋土は、大別すると、最上層、上層、下層、最下層に区分される。最下層は、底面外周にのみ認められる自然堆積層である。これは第IV層に酷似しており、土坑壁上部が崩落したものと考えられ、壁上部の開く形状はこの崩落に起因すると推測される。最上層は黒色シルト主体の

表 1 柱穴状土坑観察表

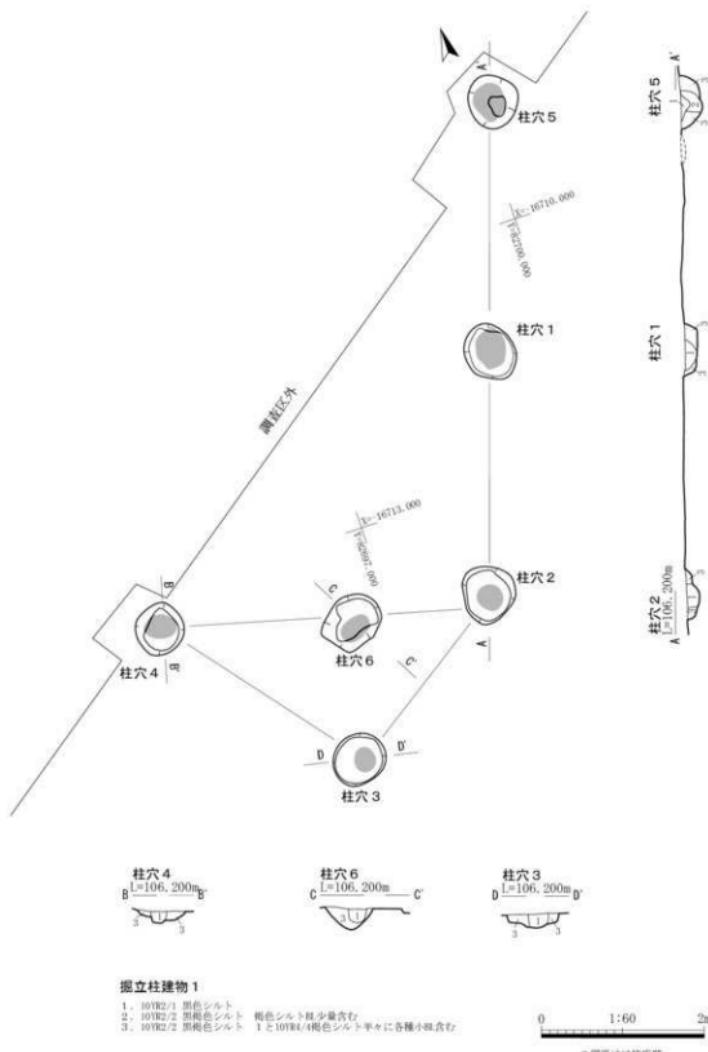
No.	埋土色調	長径(cm)	短径(cm)	底面標高(m)	No.	埋土色調	長径(cm)	短径(cm)	底面標高(m)	No.	埋土色調	長径(cm)	短径(cm)	底面標高(m)
P01	黒褐色	48.1	38.4	105.7	P34	黒褐色	72.6	59.5	105.9	P65	暗褐色	46.3	36.9	105.8
P02	暗褐色	36.2	34.7	105.7	P35	黒褐色	57.8	43.1	105.9	P66	暗褐色	49.8	43.2	105.8
P03	暗褐色	34.0	33.0	105.8	P37	黒褐色	51.5	46.8	105.8	P67	暗褐色	42.0	25.8	105.8
P04	暗褐色	50.5	49.2	105.7	P38-1	黒褐色	34.5	31.9	105.9	P68	黒褐色	54.9	46.6	105.9
P05	黒褐色	39.5	33.3	105.9	P38-2	黒褐色	30.8	27.8	105.9	P69	黒褐色	40.4	37.7	105.8
P08	黒褐色	38.1	38.3	105.9	P39	暗褐色	45.1	41.8	105.9	P70	暗褐色	41.4	30.4	106.0
P09	黒褐色	48.3	45.2	105.9	P40	黒褐色	45.3	43.1	105.9	P71	黒褐色	44.2	40.6	105.8
P10	暗褐色	51.3	50.4	105.9	P41	黒褐色	40.9	39.8	106.0	P72	暗褐色	48.1	44.0	105.9
P11	黒褐色	41.3	38.8	105.8	P42	黒褐色	45.8	44.4	105.9	P73	暗褐色	56.2	52.5	105.6
P12	黒褐色	44.7	35.9	105.8	P45	黒褐色	53.1	44.3	106.0	P74	暗褐色	42.4	40.1	105.7
P13	黒褐色	39.7	37.0	105.6	P46	黒褐色	30.8	29.5	106.1	P76	暗褐色	43.6	35.3	105.7
P14	暗褐色	57.1	52.8	105.8	P47	黒褐色	38.1	31.3	106.0	P78	暗褐色	47.3	46.5	105.9
P15	黒褐色	56.0	44.4	105.8	P49	暗褐色	46.7	42.4	105.8	P79	黒褐色	53.2	49.5	105.8
P16	暗褐色	46.0	43.8	105.8	P50	暗褐色	66.2	59.9	105.8	P80	黒褐色	57.4	51.6	105.7
P17	暗褐色	36.3	32.4	105.9	P51	黒褐色	29.4	26.4	106.0	P81	黒褐色	95.0	92.2	105.5
P18	黒褐色	43.5	40.0	105.8	P52	黒褐色	41.2	35.4	105.9	P82	黒褐色	—	—	105.7
P19	黒褐色	40.0	35.7	105.9	P53	黒褐色	43.7	38.2	105.8	P83	黒褐色	66.0	53.7	105.7
P20	暗褐色	30.5	29.8	105.9	P54	黒褐色	36.0	33.5	106.0	P84	暗褐色	67.3	33.9	105.8
P21	暗褐色	35.3	33.8	105.9	P55	黒褐色	31.9	28.6	106.0	P85	黒褐色	43.1	38.8	105.8
P22	暗褐色	41.2	37.7	105.7	P56	黒褐色	40.1	34.3	105.8	P87	暗褐色	62.0	52.0	105.8
P26	黒褐色	70.5	60.3	105.8	P57	黒褐色	64.3	41.7	106.0	P88	黒褐色	58.1	46.7	105.7
P29	暗褐色	39.1	36.0	105.8	P58	暗褐色	44.6	31.7	105.9	P90	黒褐色	77.8	64.2	105.7
P30	黒褐色	45.0	44.3	105.9	P59	黒褐色	41.5	37.9	106.0	P91	暗褐色	108.9	97.9	105.6
P31	黒褐色	32.5	31.5	105.8	P60	黒褐色	55.3	39.5	106.0	P93	黒褐色	47.7	43.5	105.8
P32	暗褐色	52.3	39.4	105.8	P61	黒褐色	29.8	28.5	105.9	P94	黒褐色	66.5	35.8	105.6
P33	黒褐色	42.5	36.7	105.7	P64	黒褐色	26.9	24.1	106.0	P95	暗褐色	24.7	21.5	105.7

\* 調査の過程で擾乱があると判断した柱穴状土坑については欠番としている。

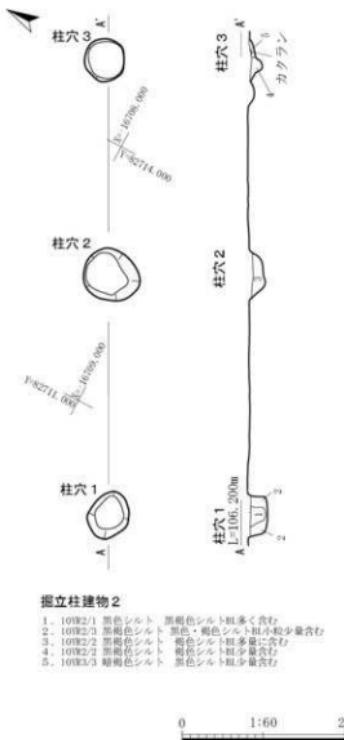
自然堆積層で最終的な埋没を示している。埋土上層と最上層の層界付近には蓋あるいは屋根と思われる有機質の材がV字形に落ち込んだ痕跡が認められる。埋土上層の褐色シルトは地山起源（第Ⅷ層）であると考えられ、土坑外周より流入した状況を示している。このことは土坑掘削土を土坑外周に積み上げていた可能性が考えられ、土坑外周に土手状の高まりが築かれていたことを示唆している。壁上部が崩落したことにより開口部が広がり土手の構築土が流入する一因となったと推測される。埋土下層より縄文時代中期とみられる土器片が1点出土した。検出面や遺構の特徴などからも縄文時代中期の貯蔵穴である可能性が高い。

### 土坑3（第7図、写真図版7）

調査区中央や西寄りに位置し、直接的な切り合い関係は認められないが、土坑2に隣接する。土坑4と西側で切り合うが、この土坑3が土坑4を切って構築されている。遺構を検出した面は、第Ⅳ層上面である。検出状況は第Ⅳ層に3重の土色変化を呈する円形プランを確認した。この土色は、土坑外縁から中心部に向け均等に黒褐色、褐色、黒色と変化しており、埋没過程を示す状況であると考えた。この状況は隣接する土坑2とも共通する。規模は開口部直径1.91m、深さ50.8cmである。底面は平坦で、壁下半は垂直方向に立ち上がり、上半は外方へ開く。平坦な底面には径5cm大の杭跡が複数確認できた。いずれも土坑に伴うものであると考えられる。埋土は最上層、上層、下層、最下層に大別でき、最下層は土坑中央部に堆積しておらず、底面外周のみ分布するいわゆる三角堆積の状況である。これより上の3層は検出時に平面で確認できた土色変化を反映するものであり、平面中央に見えていた最上層は黒色シルトの自然堆積層、その外側に見えていた上層は地山（第Ⅸ層）起源の褐色シルトが不整合なく自然に流入している。外縁に環状に見えていた下層は黒褐色シルトの自然堆積層である。上層と下層の層界には薄い炭化植物の層が確認でき、面的に分布が広がる。炭化植物はカヤのような細かな材であり、土坑開口部にこの植物で覆いがなされていた可能性を示唆している。土坑底面で確認できた杭跡は、この覆いを内部から支持する材の痕跡であったことも併せて推定され



第5図 掘立柱建物 1



第6図 掘立柱建物2

造構北側の一部を現代の擾乱坑によって切られている。直径1.1mの平面円形を呈するシルトの断層で、深さは14cmである。遺物の出土は無く、時間も性格も不明である。

### 土壤7(第8圖、写真図版8)

調査区西側に位置し、第Ⅳ層上面で土坑8とともに検出した土坑である。土坑8と切り合い関係があり、土坑8がこの土坑埋土の一部を切り込んでいる。規模および形態は、直径1.5mの不整な円形であり、深さは23.4cmである。埋土は灰黄褐色シルトである。土坑の性格は不明である。また、出土遺物は無く、時期は不明であるが、少なくとも土坑8より古い遺構である。

### 土坑8（第8図、写真図版8）

調査区西側に位置し、第Ⅳ層上面で土坑7とともに検出した土坑である。土坑7と切り合い関係があり、土坑7によって切られている。規模および形態は、長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形であり、深さは21.5cmである。埋土は黒褐色シルトの単層である。土坑の性格は不明である。また、出土遺物も

る。埋土上層の地山起源の自然堆積層は、覆いの落ち込み後、外周に土坑掘削土によって構築された土手状の高まりが周囲から崩落、流入したと想定することができる。出土した遺物は無いが、検出面や遺構の特徴などから繩文時代の貯蔵穴である可能性が高い。

#### 土坑4（第7図、写真図版8）

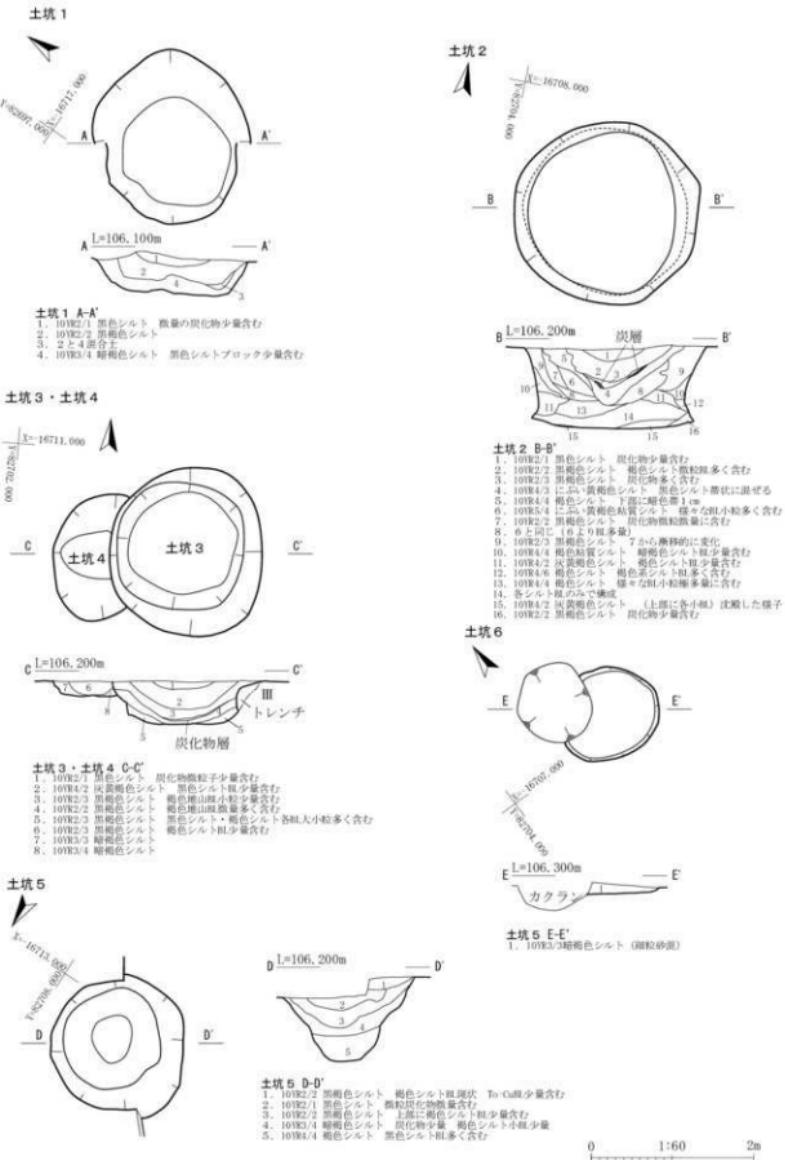
調査区中央やや西寄りに位置し、直接的な切り合い関係は認められないが、土坑2に隣接する。土坑3と東側で切り合うが、この土坑4は埋没後に土坑3に切られている。第IV層上面で土坑3とともに黒褐色の楕円形のプランを検出した。規模は南北長さ148m、残存する東西長は0.8m、深さは19.9cmである。埋土は上下2層に区分でき、いずれも自然堆積であると判断した。遺物は出土せず、時期も機能も不明であるが、少なくとも土坑3の貯蔵穴構築以前には埋没していたものと考えられる。

### 土坑5（第7図、写真図版8）

調査区中央南寄りに位置し、土坑3、土坑4に近在する。平成29年度岩手県教育委員会による事前の試掘トレントン2で東側約半分が確認されていた遺構である。第IV層上面で黒～黒褐色の円形プランを検出した。規模は開口部直径1.6m、底面直径0.6m、深さ81.3cmである。底面は狭く平坦であるが、壁への立ち上がりはやや緩やかである。壁下半は外傾しつつ立ち上がるが、壁上半は外方に開く。埋土は概ね5層に区分できる。遺物は出土しなかったが、縄文時代の貯蔵穴の可能性が考えられる。

### 土坑6（第7図、写真図版8）

調査区中央北端に位置し、第IV層上面で検出した。



第7図 土坑 1～6

無く、時期は不明であるが、少なくとも土坑7よりは新しい遺構である。

#### 土坑9（第8図、写真図版9）

調査区中央やや北寄りに位置する。第IV層上面で検出したが、検出当初は2個の柱穴が切り合い関係を持ちながら存在するものと考えた。調査過程で半裁した結果、埋土や底面に境界が認められず、1基の長楕円形の土坑であると判断した。規模は長軸1.1m、短軸0.9mであり、深さは25.0cmである。埋土は暗褐色シルト主体で自然堆積であると考えられる。遺構の時期および性格は不明である。

#### 土坑10（第8図、写真図版9）

調査区西端に位置し、調査区外へと続く。調査区端断面から第IV層上面が検出面であると判断される。遺構の全容は不明だが、検出した限りでは、平面楕円形であると推測される。規模は短軸0.49m、残存する長軸0.94m、深さは37.1cmである。埋土は上下2層からなり、上層は黒褐色シルト、下層は褐色シルトである。埋土から遺物は出土しなかった。遺構の性格および時期は不明である。

#### 土坑11（第8図、写真図版9）

調査区西端に位置し、調査区外へと続く。調査区端断面から第IV層上面が検出面であると判断される。遺構の全容は不明だが、検出した限りでは、平面は長楕円形であると推測される。規模は短軸1.26m、残存する長軸1.82m、深さは59.8cmである。埋土は上下2層からなり、上層は黒褐色シルト、下層は褐色シルトである。埋土から遺物は出土しなかった。遺構の性格および時期は不明である。

#### 土坑12（第8図、写真図版9）

調査区南西側に位置し、第IV層上面で検出した遺構である。検出時は複数の柱穴が密集していると考え調査を進めたが、調査途中から土坑のような広がりを有する遺構であると判断した。遺構の性格および時期は不明である。

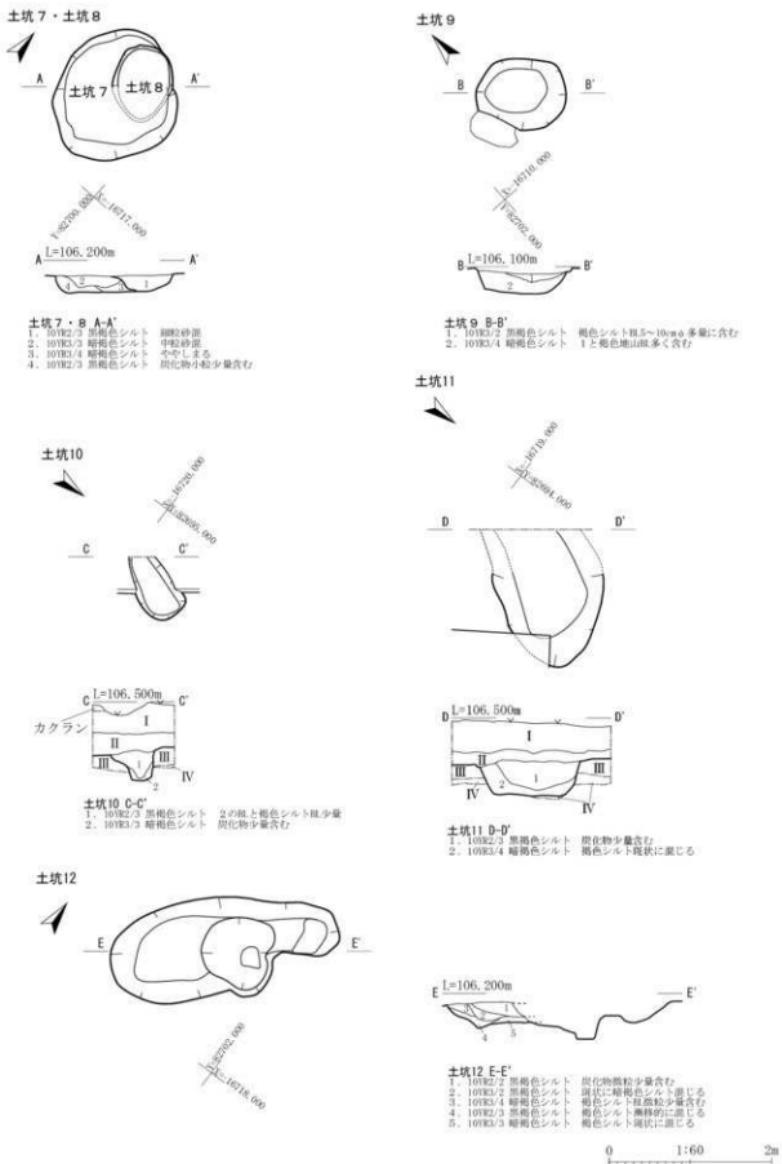
#### 柱穴状土坑（第4図、表1）

調査区のはば全域で柱穴状土坑を79個検出した。これら掘立柱建物の構成柱穴以外の柱穴状土坑は、調査域内に建物を想定できないため単独の遺構として扱い、一覧表にまとめた。掘立柱建物の構成柱穴よりも小規模なものが大半を占め、帰属する時代も不明である。柱穴の埋土はいずれもシルトであるが、大まかな色調区分によると暗褐色を主体とする柱穴と黒褐色を主体とする柱穴の2種に分かれれる。P28とした柱穴状土坑埋土より縄文土器片が1点出土したが、その他の柱穴状土坑から遺物は出土していない。

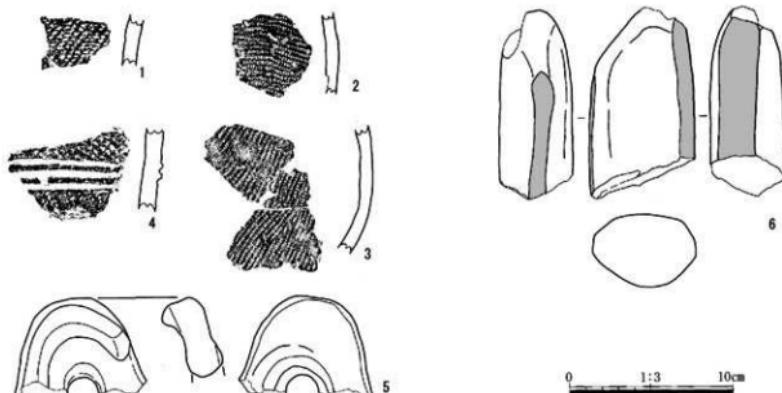
#### （2）出土遺物

出土遺物は縄文土器片30点、礫石器1点、フレイク1点、鉄釘1点である。これら出土遺物の大半は遺構に伴わない。縄文土器片は微細な破片が多く、これらのうち、遺跡および遺構の時期決定等の判断材料に寄与すると思われる土器5片、礫石器1点を選抜し掲載した（第9図、写真図版10）。1～5は縄文土器片である。1～3は地文である縄文が施文されているのみの簡素な土器片である。4は平行する2条の隆沈線が横走し、その上下には縄文が展開する。摩滅しているが、隆沈線の凸部断面形は角張らず丸みを持ったかまぼこ状である。5は大型の深鉢口縁加飾部片であるとみられる。全周しないが隆線によって縁取られた半楕円形である。欠損しているが、加飾中心部には半円孔が認められる。本来は正円孔であった可能性が考えられる。掲載した実測図は逆「U」字形としたが、倒位方向の突起である可能性もある。いずれの土器も縄文時代中期であると考えられ、うち4・5は縄文時代中期中葉の大木8式であるとみられる。6はいわゆる特殊磨石である。長軸方向の2側面に非常に強い擦痕が面的に認められ、幅の狭い磨面はより強い擦痕である。

(5) 森の越道路第36次



第8図 土坑 7～12



第9図 出土遺物

表2 掘載土器一覧

No.	種別	出土状況	おもな文様と調整	胎土	色調	焼成	備考
1	縄文土器	掘立柱建物2柱穴2埋土上位	単節繩文のみ、内面ミガキ	粗粒砂混入	黒褐色～褐色	良好	天地不明。
2	縄文土器	土坑8埋土上層	単節繩文のみ、内面ミガキ	粗粒砂混入	橙色	良好	天地不明。
3	縄文土器	掘立柱建物1柱穴2柱痕跡土、土坑8検出面	単節繩文のみ、内面ミガキ	細粒砂 微量混入	橙色～暗褐色	良好	天地不明。
4	縄文土器	P50埋土	単節繩文に水平方向の 隆沈線、内面ミガキ	中～粗粒砂 少量混入	橙色～明褐色	良好	天地不明。
5	縄文土器	県教委試掘トレンチ2 埋め戻し土	隆線で縁取り、全面ミガキ	粗粒砂混入	橙色～褐色	良好	装飾円形孔あり。

表3 掘載石器

No.	種別	出土状況	磨面	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
6	特殊磨石	調査区北東端表面採集	長辺の2側面	安山岩	11.2	6.4	503.2	両端部破損。

## 5 自然科学分析

### (1) 試料と目的

今回の発掘調査で得られた考古学的な知見以外に、自然科学的な観点から補助的に知見を得るために炭化植物の放射性炭素年代測定(AMS測定)と炭化植物種の同定をそれぞれ専門機関に業務委託した。これら炭化植物は、土坑3の機能時に開口部を覆っていたと想定したものである。

年代測定は炭化植物2点を測定試料とした。試料は調査中発掘現場で調査担当者が採取したものを作成した。土坑3では遺物が出土しなかったため遺構の年代を決める材料の一つを得る目的で測定をおこなうこととした。

炭化植物種の同定も同様に土坑3で面的に広がって検出された炭化材を同定試料とした。この試料は、調査中発掘現場で遺構埋土にまとまつた状態で検出された炭化材を全て剥ぎ取るようにして容器に採取し、洗浄作業からおこなってもらうように容器のまま提供した。種の同定によってどのような植物資源を用いて土坑の覆いがおこなわれたかを知る目的で実施したものである。

いずれの提供試料ともに採取時のサンプリングエラーはないものと考えている。

(福島)

## (2) 放射性炭素年代 (AMS測定)

### 測定対象試料

森の越遺跡は、岩手県岩泉町岩泉字三本松26-1（北緯39°50'43"、東經141°48'00"）に所在し、低位段丘に立地する。測定対象試料は、貯蔵穴と考えられる土坑の埋土より採取された草本類と見られる炭化物2点である（表4）。

### 測定の意義

試料が出土した遺構からは遺物が出土していないため、年代測定によって遺構の年代を推定する。

### 化学処理工程

- i) メス・ビンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- ii) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1\text{mol/l}$ （1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表4に記載する。
- iii) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- iv) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- v) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- vi) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）、<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 算出方法

- i)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表4）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ii) <sup>14</sup>C年代（Libby Age: yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表5に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

iii) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい（<sup>14</sup>Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。

iv) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力され

る値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表5に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

#### 測定結果

測定結果を表4、5に示す。

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、土坑3-1が $950 \pm 20$ yrBP、土坑3-2が $1010 \pm 20$ yrBPである。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、土坑3-1が $1031 \sim 1150$ cal ADの間に3つの範囲、土坑3-2が $997 \sim 1032$ cal ADの範囲で示される。2点の間には若干年代差があり、 $1\sigma$ 暦年年代範囲ではほとんど重ならないが、確率の低い範囲を含めて $2\sigma$ 暦年年代範囲で見ると、ある程度重なる範囲がある。

試料の炭素含有率は、いずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

(株式会社 加速器分析研究所)

#### 文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

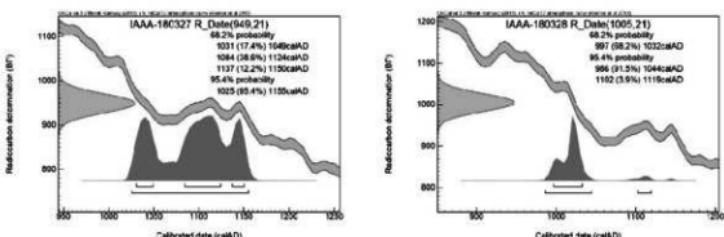
Suiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表4 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-180327	土坑3-1	土坑3 埋土下層	炭化物	AAA	-10.98 $\pm$ 0.36	950 $\pm$ 20	88.85 $\pm$ 0.24
IAAA-180328	土坑3-2	土坑3 埋土下層	炭化物	AAA	-10.42 $\pm$ 0.27	1010 $\pm$ 20	88.24 $\pm$ 0.23

表5 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		$1\sigma$ 暦年年代範囲	$2\sigma$ 暦年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)		
IAAA-180327	720 $\pm$ 20	91.43 $\pm$ 0.24	949 $\pm$ 21	1031calAD - 1049calAD (17.4%) 1084calAD - 1124calAD (38.6%) 1137calAD - 1150calAD (12.2%)
IAAA-180328	770 $\pm$ 20	90.9 $\pm$ 0.24	1005 $\pm$ 21	997calAD - 1032calAD (68.2%) 986calAD - 1044calAD (91.5%) 1102calAD - 1119calAD (3.9%)



第10図 暦年較正年代グラフ (参考)

## (3) 茎状炭化物の同定

森の越遺跡は岩泉町中心部に位置する縄文時代の住居跡を中心とした遺跡である。本遺跡で縄文時代と見られた土坑から茎状炭化物が束状で検出され、利用などを推測する目的で炭化物の分析をおこなった。今回分析に供した試料は推定では縄文時代であったが年代測定の結果10~12世紀頃の平安時代と判明した。炭化植物の塊からは保存状況が良いものを10点選び、自然乾燥後に茎状炭化物は徒手で横断面を割り出しプレパラートに固定して実体顕微鏡及び反射光式顕微鏡で観察・同定をおこなった。葉片はそのまま実体顕微鏡で観察をおこなった。外観と断面を観察した結果、いずれの試料にもイネ科に見られる節状構造は確認されず茎状の炭化植物片はシダ植物の葉柄・中軸と同定された。また堆積していた葉の小片2点もシダ植物であった。

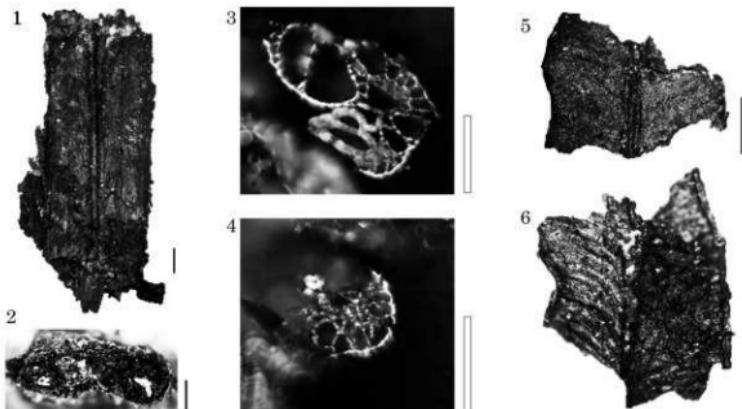
以下に出土した炭化植物の形態記載をおこなう。

シダ植物：茎状の炭化物は幅5mm程度で片側中央に溝があり、断面は楕円形である。実体顕微鏡で断面を観察すると厚い膜で覆われた内部に数本の維管束が確認でき、数本は断面が円形で1本は長い楕円形をくの字に曲げた形を呈する。この維管束の形はややタツノオトシゴ型維管束に似ており、オシダ科を中心に多数のシダ植物にある（鈴木2017）。葉片はかなり小さいが、葉縁に鋸歯ではなく小葉の主脈から網状に側脈が伸びている。鈴木三男氏によると維管束の状況と葉の形状からやワラビに似ているが他の近似するシダ植物の可能性もあり、葉の成長状況からは食用ではなく縄などの素材として束状にまとめられたものではないかとのご指摘を頂いた。本稿の炭化植物の同定に際して東北大名譽教授の鈴木三男氏に貴重なご意見を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

(古代の森研究会 吉川純子)

## 引用文献

鈴木三男 2017 「鳥浜貝塚のリヨウメンシダの縄。歴博フォーラム さらにわかった縄文人の植物利用」工藤雄一郎編 国立歴史民俗博物館 新泉社、182-185。



1. 茎、側面観 2. 茎、断面観 3. タツノオトシゴ型維管束 4. 円形維管束 5. 葉、表面 6. 葉表面  
スケールは、1, 2, 5, 6が1mm、3, 4が0.1mm

第11図 森の越遺跡出土シダ植物顕微鏡写真

#### (4) 所見

自然科学的な測定および同定の結果を受けて、発掘調査担当者としての所見を以下に記す。

放射性炭素年代測定は、土坑3検出炭化植物が平安時代であるという結果が得られた。出土遺物に恵まれなかつたが、考古学的な見地から土坑3は、縄文時代の貯蔵穴であると判断したため、非常に意外な測定結果となつた。これに隣接し似通つた堆積状況を示す土坑2については、土坑側壁の底面下端がわずかに外方へ突出するフ拉斯コ形であり、埋土下層より縄文時代中期の土器片も出土した。土器片は混入の可能性が高いが、比較的埋没初期段階に混入したものと考えられる。よつて、土坑2は縄文時代の貯蔵穴であると考えられる。最終的な結論は避けなければならないが、現段階では土坑3同様の特徴を有する土坑が、縄文時代のみならず平安時代にも存在していた可能性を指摘する程度に留めておきたい。

土坑3検出の炭化植物種同定では、シダ植物のまとまりであることが判明した。これらシダ植物は、ワラビにも似ているが、その他の種である可能性もあるとのことである。仮に食用として、しばしば採取されるワラビであったとしても、今回の試料は成長した茎・葉であり、食用ではないと推測された。以上のような同定からシダ植物の葉が大きく成長する季節に採取され、土坑の覆いとして利用されたことが想定される。また、シダ植物の大きさ・柔軟性・重量を考慮すると、樹枝などの支えや押さえが必要であったことが想像されるが、調査では明らかにできなかった。ただし、土手状の高まりを想定した場合、覆い外周端部を土によって押さえることが可能であったと思われる。

(福島)

#### 6 まとめ

森の越遺跡第36次発掘調査は、300m<sup>2</sup>を対象におこない、縄文時代の遺構・遺物を確認することができた。検出遺構は掘立柱建物2棟、土坑12基、柱穴状土坑79基である。遺構はおもに調査区西側に集中し、東側は遺構が希薄である。出土遺物は縄文中期の土器約30片、磨石1点などである。

検出した掘立柱建物は調査範囲外へ続いており、建物の全容を確認できなかつた。しかし、1棟は6本分の柱穴を確認し、県内の類例から亀甲形の平面形態を有する建物が想定される。時期は縄文時代中期の可能性が考えられる。検出した土坑類の大半は性格不明であるが、うち4基の比較的大形の土坑は貯蔵穴であると考えられる。森の越遺跡では過去の調査でも縄文時代の貯蔵穴が多く調査されている。これらは様々な形態のものがあり、分布に粗密がある。広大な遺跡内において今次調査区は貯蔵穴の比較的密度が高いエリアであったと考えられる。隣接する第19次発掘調査でも貯蔵穴が確認されているようであり、貯蔵穴内から炭化植物が検出されている（未報告、岩泉町教育委員会田鎖康之氏のご教示による）。今回も同様に炭化植物を検出した貯蔵穴が1基（土坑3）、さらに、土壤化が進んでいるが同様の痕跡が認められた土坑2を加えると、蓋あるいは屋根などの覆いが施されて機能した3基がこのエリアにまとまっている。このような貯蔵穴開口部の閉塞を追認できる事例は珍しく、縄文時代の貯蔵施設と貯蔵方法を考えるうえで貴重な事例である。土坑3の炭化植物はシダ植物であり、茎のみならず葉も同定できた。大きく聞くように成長したシダ植物を採取し利用したものとみられる。ただし、土坑3より検出した炭化植物の放射性炭素年代測定では平安時代という予想に反した測定結果が提示され、平安時代の遺構である可能性も完全には否定できない。今後、類例等に注視する必要がある。

森の越遺跡は岩泉町教育委員会によってこれまで35次に及ぶ調査がおこなわれ、小本川流域最大の縄文時代中期の集落遺跡として知られていた。今回の第36次調査では堅穴住居など集落の核となる遺構は確認されなかつたが、縄文時代中期に形成された大集落縁辺部の様子を窺い知ることができた。

特に、管見に触れる限り縄文時代の掘立柱建物は本遺跡において初見の遺構であると思われ、この大集落の一角に堅穴住居以外の建物が存在する景観が加わることは大変意義深い成果である。

なお、森の越遺跡第36次発掘調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

## 参考文献

- 岩泉町教育委員会 1983 『岩手県岩泉町文化財調査報告第5集 森の越遺跡』  
岩泉町教育委員会 1985 『岩手県岩泉町文化財調査報告第7集 森の越遺跡』  
岩泉町教育委員会 1985 『岩手県岩泉町文化財調査報告第9集 森の越遺跡』  
岩泉町教育委員会 1986 『岩手県岩泉町文化財調査報告第11集 森の越遺跡』  
岩泉町教育委員会 1987 『岩手県岩泉町文化財調査報告第13集 森の越遺跡—第13次発掘調査概報一』  
岩泉町教育委員会 1988 『岩手県岩泉町文化財調査報告第15集 森の越遺跡—第14次発掘調査概報一』  
岩泉町教育委員会 1989 『岩手県岩泉町文化財調査報告第16集 森の越遺跡—第15次発掘調査概報一』  
岩泉町教育委員会 1988 『岩手県岩泉町文化財調査報告第17集 森の越遺跡—第16次発掘調査概報一』  
岩泉町教育委員会 1989 『岩手県岩泉町文化財調査報告第18集 森の越遺跡—第14次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 1998 『岩手県岩泉町文化財調査報告第31集 森の越遺跡—第22・23次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 1999 『岩手県岩泉町文化財調査報告第33集 森の越遺跡—第25次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 2000 『岩手県岩泉町文化財調査報告第34集 森の越遺跡—第27次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 2001 『岩手県岩泉町文化財調査報告第36集 森の越遺跡—第28次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 2002 『岩手県岩泉町文化財調査報告第38集 森の越遺跡—第29・30次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 2003 『岩手県岩泉町文化財調査報告第40集 森の越遺跡—第31次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 2005 『岩手県岩泉町文化財調査報告第42集 沢廻遺跡・森の越遺跡—平成16年度発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 2007 『岩手県岩泉町文化財調査報告第44集 森の越遺跡—第33次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 2007 『岩手県岩泉町文化財調査報告第45集 森の越遺跡—第34次発掘調査報告書一』  
岩泉町教育委員会 2010 『岩手県岩泉町文化財調査報告第46集 森の越遺跡—第35次発掘調査報告書一』



遺跡遠景(南から)



調査区直上



調査区全景(直上から)



調査前全景(北東から)



調査区全景(北東から)

写真図版2 調査区全景



基本層序東隅断面(北西から)



基本層序南西断面(西から)



基本層序西断面(北東から)

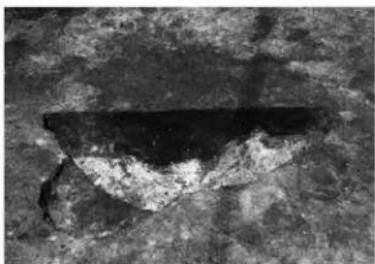
写真図版 3 基本層序断面



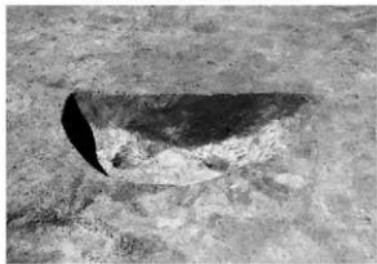
掘立柱建物1全景(南西から)



掘立柱建物1柱穴1断面(東から)



掘立柱建物1柱穴2断面(東から)



掘立柱建物1柱穴3断面(西から)

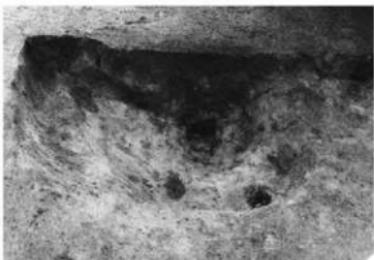


掘立柱建物1柱穴4断面(西から)

写真図版 4 掘立柱建物 1



掘立柱建物1柱穴5断面(南から)



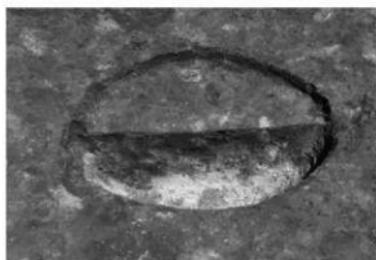
掘立柱建物1柱穴6断面(南から)



掘立柱建物1全景(直上から)



掘立柱建物2柱穴1断面(南東から)



掘立柱建物2柱穴2断面(南東から)



掘立柱建物1柱穴3断面(南東から)

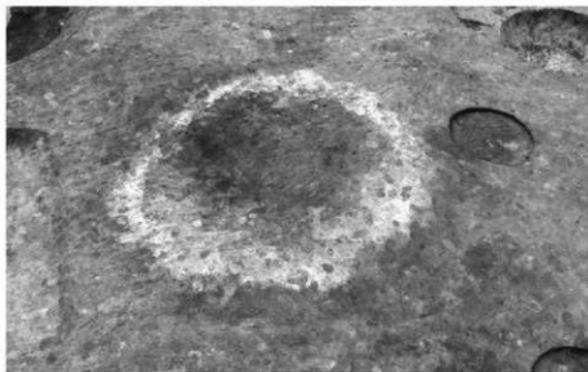


土坑1断面(南西から)

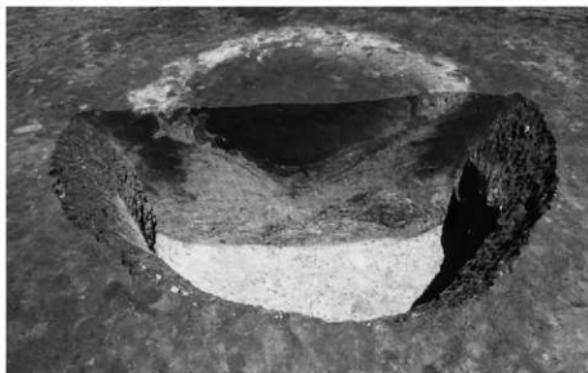


土坑1全景(南から)

写真図版5 掘立柱建物1・2、土坑1



検出(東から)

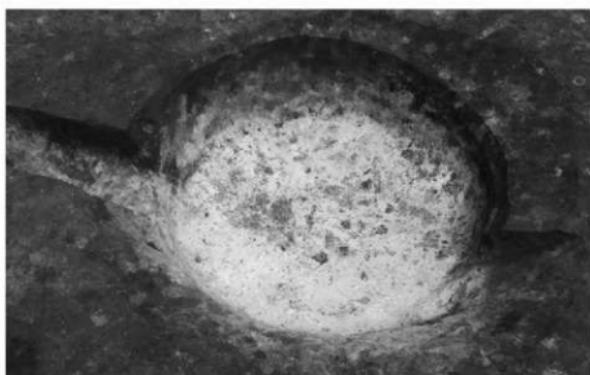
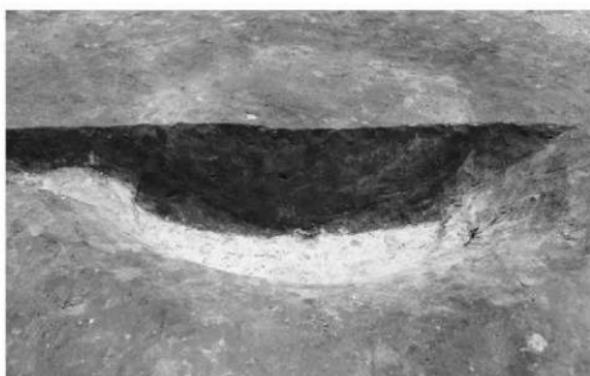
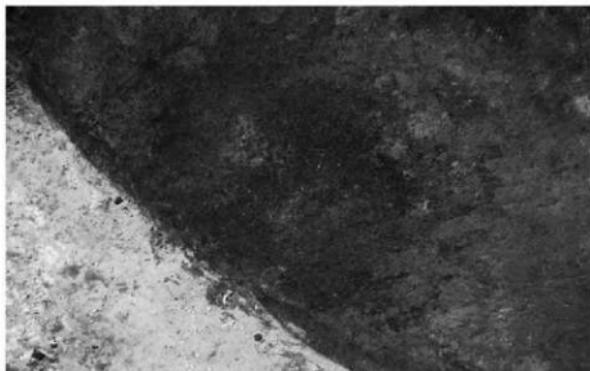


断面(南から)



全景(南から)

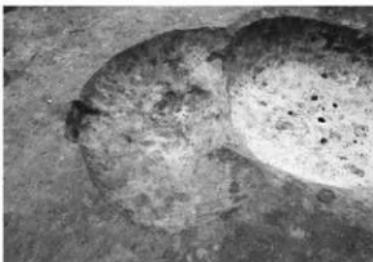
写真図版6 土坑2



写真図版 7 土坑3



土坑4断面(南から)



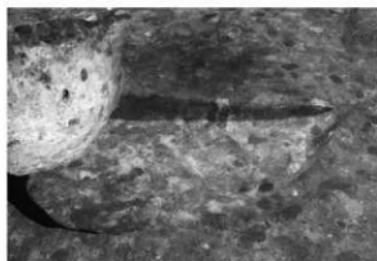
土坑4全景(南から)



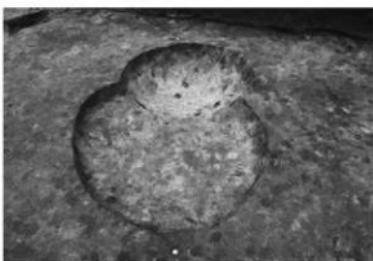
土坑5断面(北から)



土坑5全景(南から)



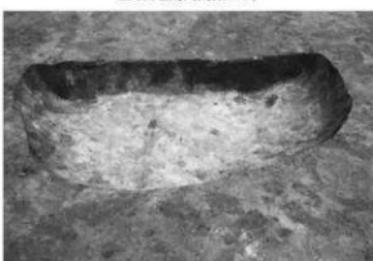
土坑6断面(南西から)



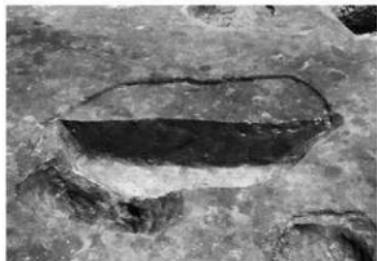
土坑6全景(南東から)



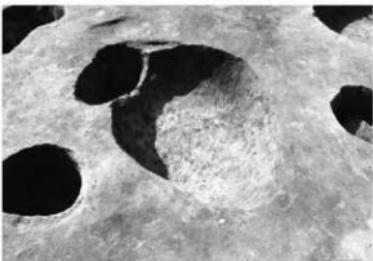
土坑7全景(南東から)



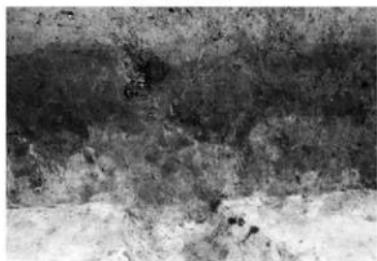
土坑7・8断面(南東から)



土坑9断面(南西から)



土坑9全景(南から)



土坑10断面(東から)



土坑10全景(南西から)



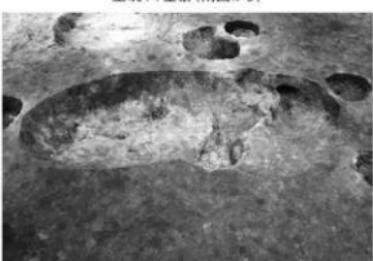
土坑11断面(東から)



土坑11全景(南西から)

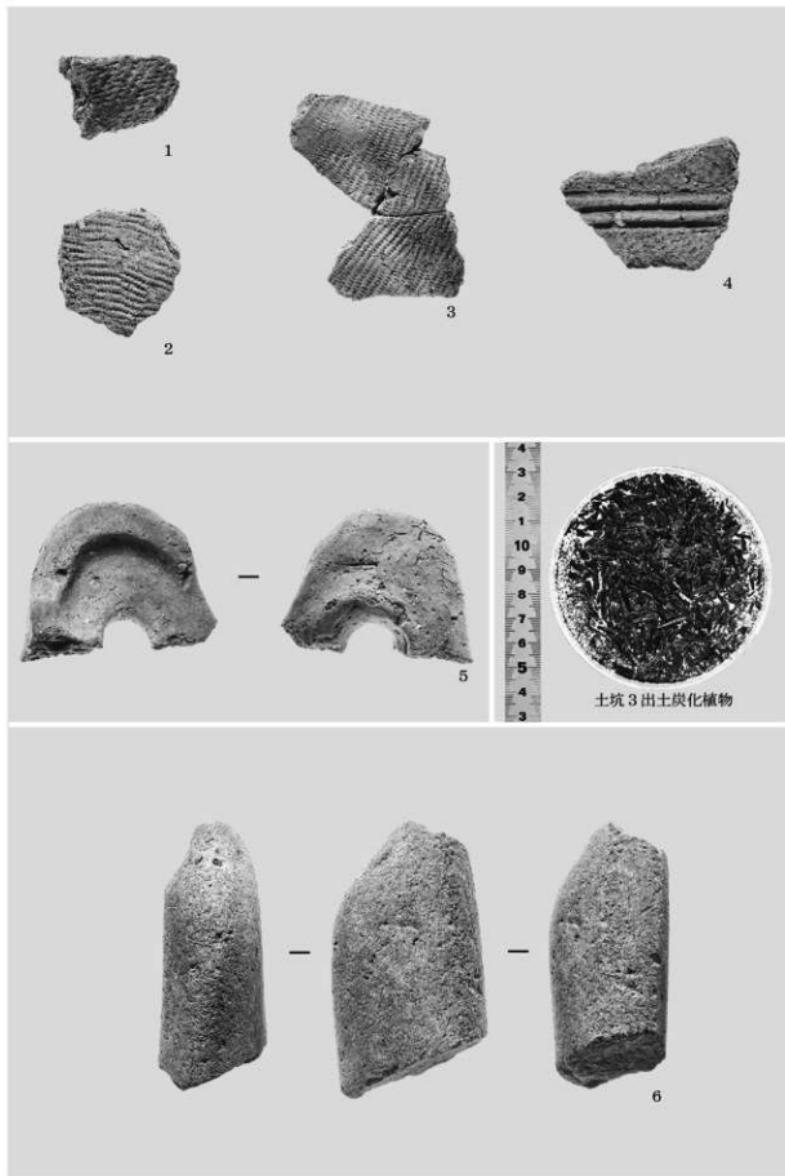


土坑12断面(南から)



土坑12全景(南から)

写真図版9 土坑9~12



写真図版 10 出土遺物

## II 発掘調査概報

#### 凡例

- ・遺跡位置図は、1:50,000である。国土地理院2001『数値地図－岩手』を使用した。
- ・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。
  - 大コンテナ：42×32×30cm
  - 中コンテナ：42×32×20cm
  - 小コンテナ：42×32×10cm
- ・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。  
(例) 竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

## (6) 北日詰城内 I 遺跡

所 在 地 紫波郡紫波町大字北日詰字城内234番地ほか  
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
 事 業 名 北上川緊急治水対策事業  
 発掘調査期間 平成30年4月16日～9月28日  
 調査終了面積 1,190m<sup>2</sup>  
 調査担当者 須原拓・川村英  
 主要な時代 中世

## 遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線日詰駅から東へ約2km、北上川の支流である平沢川の西岸に位置し、北上川により形成された河岸段丘上に立地する。標高は91m前後である。調査前は水田であった。

## 調査の概要

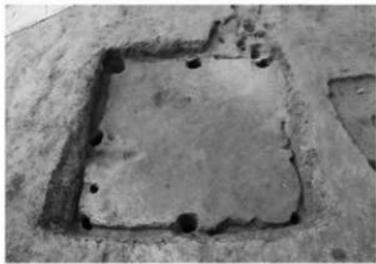
検出遺構は、掘立柱建物2棟、竪穴建物3棟、土坑17基、溝17条、柱穴状土坑155個である。いずれの遺構も出土遺物がわずかしか無いため、時期の判断が難しいが、遺構の形態から中世以降に比定されると推測する。

竪穴建物3棟のうち2棟はほぼ正方形を呈し、壁際には柱穴が巡る（写真左下）。床面には炉が付属するものもあり、いずれも工房であったと推測する。また径25m、深さ1.5mを計る大型の土坑（写真右下）や調査区を縱断する溝が集中して分布する。調査区の北側には北条館跡の堀が隣接しており、これらの遺構群は北条館跡に関連する遺構群であろうと推測する。

出土遺物は、縄文土器・土師器・かわらけの小片が小コンテナ1箱、中世・近世の陶磁器片が数片である。



調査区全景(南から)



竪穴建物全景(南から)



大型の土坑全景(北から)

## (7) 北条館跡

所 在 地 紫波郡紫波町大字北日詰字城内 105番地の2ほか  
委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
事 業 名 北上川緊急治水対策事業  
発掘調査期間 平成30年6月18日～11月15日  
調査終了面積 3,700 m<sup>2</sup>  
調査担当者 川又晋・西澤正晴・須原拓・川村英・河村美佳  
主要な時代 平安・中世

### 遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線日詰駅から東へ約2km、北上川の支流である平沢川の西岸に位置し、北上川により形成された河岸段丘上に立地する。標高は91m前後である。調査前は水田であった。

### 調査の概要

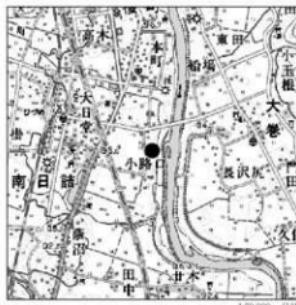
検出遺構は、堀3条、掘立柱建物6棟、竪穴建物1棟、土坑11基、炉4基、溝12条、柱穴状土坑102個である。

調査区外の北側、一段高くなった面が北条館の主郭に相当すると推測されており、堀以外の遺構はこの主郭側（調査区の北端）に集中している。堀（写真左下）は3条とも幅6～8m、深さ1.5～2.5mを計る。いずれも東西方向にのびているが、館全体を囲んでいたと推測する。

検出遺構には、溝や円形の土坑（井戸か）からかわらけが出土するものもあり（写真右下）、中世城館の他に、古代の遺構も点在することを確認した。

出土遺物は、かわらけが最も多く、大コンテナ15箱分出土している。かわらけの時期は形態から12世紀前半から後半に属すると推測する。中世の遺物は少なく、陶磁器片は小コンテナ0.5箱、錢貨（永楽通宝）2枚が出土している。

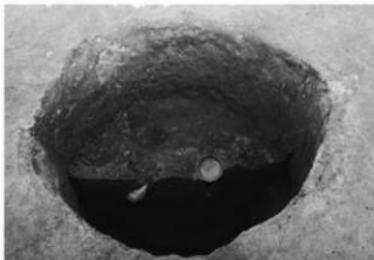
他に縄文土器、土師器が数片、縄文時代の石器が中コンテナ1箱出土している。



堀全景(東から)



調査区全景(南から)



土坑内かわらけ出土状況(南から)

## (8) 南日詰大銀II遺跡

所 在 地 紫波郡紫波町大字南日詰字小路口地内  
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
 事 業 名 北上川緊急治水対策事業  
 発掘調査期間 平成30年4月16日～8月30日  
 調査終了面積 1,380m<sup>2</sup>  
 調査 担 当 者 西澤正晴 河村美佳  
 主要な時 代 繩文・平安・中世



## 遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線日詰駅の南東約1km、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。調査前の状況は畠等の耕作地であった。標高は93m前後、一段低い北側は90mである。遺跡の西側には、12世紀の遺跡である南日詰小路口I・II遺跡、国道4号をはさんで比爪氏の居館と推定される比爪館跡が連続して位置する。また、遺跡の北側は、北日詰城内I遺跡、北条館跡が隣接している。

これまでの調査は平成27年度から29年度まで紫波町教育委員会によって行われており、今回の調査は4回目となる。

## 調査の概要

検出遺構は、竪穴建物1棟、掘立柱建物30棟前後、溝2条、土坑19基、いわゆるカマド状遺構6基、柱穴状土坑517個（掘立柱建物を構成するものを含む）である。出土遺物には、土師器、須恵器、かわらけ（12世紀）、常滑・渥美産の陶器、中国産の陶器、白磁、青白磁片などがある。なかでもかわらけが大半を占める。遺物の時期は、9世紀、12世紀、15～16世紀に大まかに分けられる。これらは、明確に遺構から出土する例は少ないが、検出した遺構はいずれかの時期に相当すると考えられる。また、12世紀の土器には、いわゆる柱状高台や杯形を呈する器形の存在などから12世紀でも前半代に属するものが含まれる。

調査の結果、12世紀の建物を含む遺構・遺物が発見されたことは重要な成果である。過去の調査も含めて考えてみると、この遺跡が12世紀前半から営まれた主要な居館である可能性が高くなつた。



遺跡全景(南から)



溝内かわらけ出土状況

## (9) 中平遺跡

所 在 地 九戸郡野田村大字野田第13地割字大平野地内  
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
事 業 名 三陸沿岸道路  
発掘調査期間 平成30年4月5日～4月26日  
調査終了面積 653 m<sup>2</sup>  
調査担当者 北田 純・遠藤 修・村上千華・河村美佳  
主要な時代 繩文・古墳末～平安



### 遺跡の立地

遺跡は、野田村役場から南西約800mに位置しており、明内川と泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は道路で、標高は215～245mである。

平成26・27・29年度に引き続き、4箇年目の調査である。

### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構4基、古墳時代末～平安時代の円形周溝1基・方形周溝1基（平成27年度検出済み）、柱穴状土坑2個・自然流路2条である。出土遺物は縄文土器1片・石鏃1点、古墳時代末～平安時代の土師器小コンテナ0.5箱・須恵器1片である。

4箇年の調査で検出した遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構65基、古墳時代末～平安時代の竪穴住居16棟、円形周溝1基・方形周溝1基など、縄文時代の狩猟場と古代の集落の広がりが確認された。



調査区全景(西から)

## (10) サニニヤⅢ遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第25地割地内  
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
 事 業 名 三陸沿岸道路  
 発掘調査期間 平成30年4月4日～9月28日  
 調査終了面積 2,000m<sup>2</sup>  
 調査 担 当 者 菊池貴広・野中裕貴・出町拓也  
 主要な時代 繩文



## 遺跡の立地

遺跡は、九戸郡洋野町種市第25地割に所在し、川尻川右岸の標高52～65m地点に立地する。遺跡中央部は谷底、南北端は傾斜面、南端は平坦面となっている。今年度は南端部の2,000m<sup>2</sup>を調査した。

## 調査の概要

今年度調査区は全域が町有地造成時による削平・盛土により攪乱を受けている状況であった。検出遺構は、陥し穴状遺構1基、出土遺物は縄文時代早期の土器片1点である。三箇年の継続調査で、縄文時代に狩猟場として機能した遺跡の概要を明らかにすることが出来た。



検出状況



陥し穴状遺構 全景



作業風景



陥し穴状遺構 断面

## (11) 宿戸遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第6地割字宿戸地内  
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
事 業 名 三陸沿岸道路  
発掘調査期間 平成30年4月4日～7月31日  
調査終了面積 6,040 m<sup>2</sup>  
調査担当者 八木勝枝・福島正和・船渡耕己・戦場由裕・川村 英  
主要な時代 繩文・弥生



### 遺跡の立地

遺跡は、九戸郡洋野町種市第6地割字宿戸に所在し、海岸から450m、標高27～40mの斜面地に立地する。現況は山林である。

### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居6棟・土坑17基・埋設土器3基・陥し穴状遺構2基、弥生時代の竪穴住居1棟・土坑1基である。

出土遺物は、縄文時代・弥生時代の土器大コンテナ9箱、縄文時代・弥生時代の石器中コンテナ10箱、縄文時代の土偶1点、寛永通寶2点である。

平成28・29年度に調査を行った丘陵高位面では、縄文時代早期から中期の集落遺跡であることが判明している。今年度調査区では縄文時代後期から弥生時代の居住域が検出されたことから、時代が新しくなるに従って低い地点も居住域として利用されていたことが明らかになった。



遺跡遠景

## (12) 北玉川遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第14地割北玉川地内  
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
 事 業 名 三陸沿岸道路  
 発掘調査期間 平成30年11月1日～11月22日  
 調査終了面積 980m<sup>2</sup>  
 調査 担 当 者 野中裕貴・村木敬・菊池貴広・出町拓也  
 主要な時 代 繩文・弥生・近代

## 遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場から南約2.7kmに位置し、東流する和座川南岸の丘陵上に立地する。標高は60～70mである。調査前は山林であった。今年度は、昨年度調査区の東側に位置する980m<sup>2</sup>の調査を行った。

## 調査の概要

検出遺構は、縄文時代後期が想定される竪穴住居4棟、貯蔵穴を含む土坑2基、縄文時代前期中葉以前と考えられる陥し穴状遺構1基である。竪穴住居はいずれも斜面上方のみ壁の立ち上がりを確認している。住居の中央付近と推定される位置には炉があり、石窯炉を構成していた可能性のある砾石が見つかった1基を除いて他は地床炉である。昨年度調査でも同様の特徴を持つ縄文時代後期前葉の竪穴住居が3棟見つかっており、小規模な集落が営まれていたことが判明している。今回の調査と昨年度調査で見つかった竪穴住居の分布を比較すると、両者は近接した位置にあり、特徴にも類似性が見出せることから、今回の調査で見つかった住居もほぼ同時期のものであると推測される。しかしながら、一部の住居から弥生時代中期の遺物が少量ながら出土したため、年代測定の結果などと合わせて時期を総合的に判断する必要性がある。土坑は断面形がラスコ状となる貯蔵穴が1基見つかっている。昨年度の調査では竪穴住居の周辺から多く見つかっており、竪穴住居に伴うことが想定される。陥し穴状遺構は平面形が円形、断面形がすり鉢状をしており、底面からは逆茂木を設置した跡と考えられる副穴が散在して見つかっている。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ0.5箱、弥生土器少量、石器中コンテナ2箱、コハク1点である。



調査区遠景(西から)



竪穴住居全景(南から)

### (13) 田ノ端 II 遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第42地割田ノ端地内  
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
事 業 名 三陸沿岸道路  
発掘調査期間 平成30年4月4日～6月22日  
調査終了面積 2,000m<sup>2</sup>  
調査担当者 村木 敬・西澤正晴・佐々木昭太・船渡耕己  
主要な時代 繩文時代前～後期



#### 遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場の北西約5kmに位置する。東流する二十一川右岸の段丘に形成されており、標高89m前後の頂部に立地している。調査前の現況は山林である。

#### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代前期の竪穴住居32棟、竪穴状遺構5基、土坑22基、埋設土器1基、陥し穴状遺構4基である。

出土遺物は、縄文時代前期の土器が大コンテナ1箱、石器が中コンテナ1箱である。

2箇年にわたって調査が行われた結果、縄文時代前期から後期にかけて形成された集落であることが明らかとなった。



調査区全景

## (14) 鹿糠浜 I 遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市15地割字鹿糠浜地内  
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
 事 業 名 三陸沿岸道路  
 発掘調査期間 平成30年4月5日～5月31日  
 調査終了面積 1,350m<sup>2</sup>  
 調査 担 当 者 高木 晃・溜 浩二郎・須原 拓・藤田崇志  
 主要な時代 繩文・奈良

## 遺跡の立地

遺跡は洋野町役場から南方向へ約3kmの丘陵頂部に立地し、標高は53～61mを測る。調査前の現況は山林である。今年度は昨年度調査区の北側に隣接する1,350m<sup>2</sup>を調査した。

## 調査の概要

検出遺構は縄文時代の陥し穴状遺構3基、土坑16基、奈良時代の竪穴住居2棟である。

出土遺物は縄文土器大コンテナ0.5箱、土器大コンテナ3箱、石器小コンテナ3箱、他に紡錘車・勾玉などの土製品10点、鉄製品3点、コハクの破片少量である。

遺跡は、縄文時代は狩猟および貯蔵場として、奈良時代は集落として利用されていたことが明らかになった。



調査区全景(上が南)



奈良時代の竪穴住居



竪穴住居内遺物出土状況



円形陥し穴状遺構

## (15) 板橋 II 遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第21地割地内  
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
 事 業 名 三陸沿岸道路  
 発掘調査期間 平成30年5月1日～10月31日  
 調査終了面積 8.732m<sup>2</sup>  
 調査 担 当 者 野中裕貴・村木 敬・菊池貴広・出町拓也  
 主要な時 代 繩文



## 遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場から南西約1.3kmに位置し、西側にオーシャン・ビュースタジアムが隣接する。南側は昨年度調査を行った荒津内遺跡と境界を接する。東側へと延びる丘陵上の緩斜面地に立地しており、標高は58～65mである。調査区中央の谷部には縄文時代の河道が調査区を東西に横切るように見つかっている。調査前は山林であった。

## 調査の概要

検出遺構は、縄文時代後期初頭～前葉の堅穴住居12棟、貯蔵穴を含む土坑17基、陥し穴状遺構38基である。堅穴住居はいずれも掘り込みが浅く、平面形が円形・楕円形をしている。規模は3～5mのものが大半であり、住居の中央付近に炉があるものが多い。炉は地床炉と石岡炉の2種類が見られる。土坑は断面形がラスコ状となるものが大半で、堅穴住居の周辺から見つかっている。規模は底径1.5m、深さ1.2m程度のものが多く見られる。大型の土坑では底径が2mを超すものもある。陥し穴状遺構は平面形が円形と溝状の2種類がある。いずれも詳細な時期は不明であるが、埋土の堆積状況から判断すると、円形は縄文時代前期以前、溝状は縄文時代後期前葉以前であることが想定される。

遺構の配置は、堅穴住居と土坑が緩斜面頂上部に集中し、陥し穴状遺構が調査区北側の斜面落ちと谷部に位置する縄文時代の河道沿いに集中する傾向を示す。このことから、縄文時代後期初頭～前葉にかけて緩斜面頂上部に堅穴住居とそれに伴う貯蔵穴から構成される集落が存在し、調査区北側の平坦面と谷部である河道沿いは狩猟場として機能していたと考えられる。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ5箱、石器中コンテナ8.5箱、陶磁器小コンテナ0.1袋、土製品10点、石製品3点、コハク片少量、水晶8点などである。



調査区全景(直上から)



縄文時代後期初頭～前葉の住居群(北西から)

## (16) 万丁目遺跡

所 在 地 花巻市南万丁目844-1ほか  
 委 託 者 県南広域振興局農政部北上農村整備センター  
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業万丁目地区  
 発掘調査期間 平成30年4月6日～10月31日  
 調査終了面積 11,500m<sup>2</sup>  
 調査 担 当 者 羽柴直人・溜 浩二郎・光井文行・山川純一  
 　・古川 健  
 主要な時代 古代・中世



## 遺跡の立地

遺跡は、東北縦貫自動車道路花巻南インターチェンジ付近に所在し、標高約96mの低位段丘に立地する。現況は水田である。

## 調査の概要

検出遺構は、古代の堅穴住居3棟、中世の堅穴建物8棟、中世の掘立柱建物168棟、土坑81基、井戸1基、菟池1基、溝19条、カマド状遺構24基、縄文時代の炉1基、陥し穴状遺構18基である。

出土遺物は、縄文土器中コンテナ1箱、土師器・須恵器中コンテナ5箱、石器・石製品中コンテナ5箱、12世紀のかわらけ5点、中世陶磁器11点、鉄製品16点、銭貨15点である。

12～15世紀中頃と推測される居館を検出した。居館は南北約50m、東西約80mの範囲が溝で区画され、区画内部に大型の掘立柱建物、堅穴建物等が配置される。区画内には菟池も存在し、居館の格式の高さを表している。また、12世紀のかわらけの出土は奥州藤原氏との関係性の高さを示している。



遺跡遠景

(17) 二子城跡

所 在 地 北上市二子町坊館地内  
委 託 者 岩手県企業局  
事 業 名 第一北上中部工業用水道浄水場建設事業  
発掘調査期間 平成30年11月1日～12月20日  
調査終了面積 1,655m<sup>2</sup>  
調査担当者 北田 紘・西澤正晴・須原拓・川村英・  
河村美佳・藤田崇志・戦場由裕  
主要な時代 縄文・弥生・中世



1:50,000 花巻・北上

遺跡の立地

遺跡は、北上市北東部の北工業団地東側に位置しており、JR東北本線村崎野駅から北東約2kmの距離にある北上川西岸の河岸段丘上に立地している。現況は山林で、標高は78～80mである。

調査の概要

二子城は、中世和賀氏の本城と伝えられており、全体の規模は南北約1,000m×東西約500mある和賀郡最大の城館跡である。これまで北上市教育委員会や当センターによって、二子城跡・坊館跡・物見崎遺跡・監物館跡などとして調査が行われており、多くの遺構・遺物が確認されている。

今回の調査区は、昭和63年に当センターで調査した坊館跡の北側に位置し、工場跡地を挟んだ南北2箇所の調査地点である。検出した遺構は、縄文時代の陥り穴状遺構6基、縄文～弥生時代の土坑15基、中世以降の堀1条・溝4条・柱穴状土坑24個、出土した遺物は縄文・弥生土器中コンテナ1箱・石器中コンテナ1箱・土製品1点・近世陶器1片である。

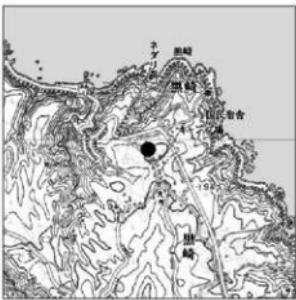
今回の調査から、縄文時代の狩猟場、縄文～弥生時代の集落、中世城館が営まれていたことが確認された。調査は、次年度も継続して行う予定である。



調査区全景(北から)

## (18) 下村遺跡

所 在 地 下閉伊郡普代村第3地割字黒崎18番地1ほか  
 委 託 者 普代村建設水産課  
 事 業 名 村道拡幅（黒崎地区）  
 発掘調査期間 平成30年8月1日～10月5日  
 調査終了面積 869m<sup>2</sup>  
 調査 担 当 者 八木勝枝・戦場由裕・松渡耕己  
 主要な時 代 縄文



## 遺跡の立地

遺跡は、下閉伊郡普代村第3地割字黒崎18番地1ほかに所在し、海岸から約730m、海岸段丘上標高約197mの地点に立地する。現況は舗装道路及び畠地である。

## 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居13棟、土坑20基、陥し穴状遺構2基、柱穴状土坑1個、時期不明の柱穴状土坑2個である。

出土遺物は、縄文時代の土器大コンテナ5箱、石器中コンテナ4箱、コハク2点、近・現代陶磁器少量である。

標高最高地点付近に竪穴住居が配置され、緩やかな傾斜地にはフラスコ状土坑がまとまることが判明した。竪穴住居は5m以上の大形は方形基調で炉が2箇所、4m程度の中形は円形で炉が1箇所、3m以下の小形は楕円形で炉が認められない。竪穴住居域の貯蔵穴5基は直径1m、深さ90cm、竪穴住居域から離れたフラスコ状土坑9基は開口部直径1.2m、深さ2.2m、底面直径2.2mのものが多い。



遺跡遠景

## 報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいさんじゅうねんどはつくつちょうさほくしょ 平成30年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第708集							
編著者名	溜 浩二郎							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2019年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 。°'"	東経 。°'"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
紙圖 I 遺跡	岩手県 西磐井郡 平泉町 平泉 字紙圖 194-1ほか	03402	NE86-0006	38度 59分 33秒	141度 6分 47秒	2018. 06. 01 ~ 2018. 08. 24	2,945m <sup>2</sup>	平泉スマートインター・チエンジ建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
紙圖 I 遺跡	散布地	縄文時代		土器、石器	陥し穴状遺構の年代は底面から出土した木杭を放射性炭素年代測定したところ、10世紀後半～11世紀前半と判明した。			
	狩猟場・散 布地	平安時代	陥し穴状遺構 2基 溝4条	かわらけ、国産陶器 (常滑、渥美、須恵器系)、中国産白磁、 錢貨、木杭				
	散布地	近世	溝1条	陶磁器、錢貨				
		時期不明	土坑1基 柱穴状土坑23個					
要約	遺跡は縄文時代～近世まで長期にわたり断続的に生活に利用されていたことが明らかになった。10世紀後半～11世紀前半は狩猟場、その他の時期は出土遺物量及び検出遺構から生活領域にあるが、集落から離れた場所であったと考えられる。							

\*緯度・経度は世界測地系(2000)による数値である。

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいさんじゅうねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成30年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第708集							
編著者名	北田 勲							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2019年3月20日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
岩洞湖E遺跡	岩手県 盛岡市 藤川 字亀橋 地内	03201	KF60-0285	39度 49分 36秒	141度 19分 31秒	2018.08.20 ～ 2018.09.27	1,052m <sup>2</sup>	岩洞ダム 貯水池護 岸工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岩洞湖E遺跡	散布地	縄文時代	柱穴状土坑1個	なし				
要約	岩洞湖の北西端に位置する遺跡で、調査から柱穴状土坑1個を確認した。調査区内からの出土遺物はないが、浸食された湖岸からは縄文時代前期初頭～晩期中葉までの各時期の遺物を表面採集することができる。また、縄文時代の堅穴住居・土坑・陥し穴状遺構など各種遺構が認められ、遺跡の一端を窺い知ることができる。							

\*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいさんじゅうねんどはつくつちようさほうこくしょ					
書名	平成30年度発掘調査報告書					
副書名						
巻次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第708集					
編著者名	北田 翁					
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001					
発行年月日	西暦2019年3月20日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 。°'."	東経 。°'."	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>
八幡館跡	岩手県 盛岡市 宇田 字下武道69 ほか	03201 KE57-1101	39度 51分 17秒	141度 10分 14秒	2018.05.01 ～ 2018.08.09	3,317m <sup>2</sup>
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
八幡館跡	城館跡	縄文時代 平安時代 中世	堅穴住居 1棟 土坑17基 堀 3条 溝 6条 柱穴状土坑 18個 自然流路（谷）3条	縄文土器 須恵器 土師器 陶磁器	9世紀前半の堅穴住居から北陸型長胴甕などが出土。 中世の堀 3条が確認され、調査区外にある城館本体の範囲と平時の居館の存在が推定された。	
要約	今回の調査から、平安時代中期の堅穴住居 1棟と中世と考えられる堀 3条が確認された。堅穴住居は、北上川によって形成された段丘線の調査区西端で検出され、川に近い箇所まで集落が広がっているのが分かった。遺構内から、内外面にタタキ目のある丸底土師器の北陸型長胴甕が出土し、内陸北部まで分布することが確認された。中世と考えられる堀のうち、調査区北端で検出された 1 条は、調査区北側にある城館本体を L 字形に巡ると推定され、城館の範囲を推定することができた。また、調査区南側からも 2 条の堀が見つかったことから、平時の居館の存在も想定される。堀からは出土遺物がなく時期を特定できないが、谷を埋め立てた造成土から16世紀末の所産と見られる唐津焼片が出土しており、少なくとも該期まで城館が存続していたことが指摘される。					

\*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいさんじゅうねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成30年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第708集							
編著者名	村木敬、船渡耕己、藤田崇志							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2019年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○.′.″	東経 ○.′.″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
沖遺跡	岩手県 九戸郡 九戸村 長興寺 地内	03506	JF12-1251     	40度 13分 47秒	141度 25分 2秒	2018. 09. 03 ～ 2018. 10. 30	1,742 m <sup>2</sup>	地域連携 道路一般 国道340 号長興寺 地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
沖遺跡	散布地	奈良時代 近世 不明	竪穴住居1棟 柱状土坑311基 掘立柱建物7棟 土坑2基	土師器 近世陶磁器 銭貨 不明石器				
要約	古代の竪穴住居1棟と近世の掘立柱建物7棟を検出し、古代と近世の複合遺跡であることが判明した。古代の住居は近世期に削平を受けている。							

\*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

## 報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいさんじゅうねんどはくつちょうさほうこくしょ 平成30年度発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第708集						
編著者名	福島正和、川村 英						
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	西暦2019年3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
もりのこいとせき 森の越遺跡	いわてけん 岩手県 いわて 下閉伊郡 しもぢいぐん 岩泉町 いわいずみまち 岩泉 いわいずみ 字三本松 あざみさんばんまつ 26-1	03483	KG50-1375	40度 18分 13秒	141度 45分 50秒 ～ 2018.05.31	300 m <sup>2</sup>	岩泉町災 害公営住 宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
森の越遺跡第 36次	集落	縄文時代	掘立柱建物2棟 土坑12基 柱穴状土坑79個	縄文土器 石器			
要約	森の越遺跡は、これまで35次に及ぶ発掘調査によって、縄文時代中期の大規模集落として知られていた。今回の第36次調査は集落の南端に当たる部分である。調査によって縄文時代の掘立柱建物、土坑などを検出した。掘立柱建物のうち1棟は6角形の平面形態であると推測される。土坑のうち大形のものは、貯蔵穴の機能を有するものと考えられる。縄文時代中期における大規模集落の縁辺部の様子を窺うことができた。						

\*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。



---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第708集

## 平成30年度発掘調査報告書

印 刷 平成31年3月 5日

発 行 平成31年3月 20日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0053 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019)638-9001

F A X (019)638-8563

発 行 (公財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電 話 (019)654-2235

F A X (019)625-3595

印 刷 鈴木印刷株式会社

〒023-1101 岩手県奥州市江刺岩谷堂字松長根15番5号

電 話 (0197)35-4515

F A X (0197)35-4518

---